

---

# 魔王はハンバーガーがお好き

28号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王はハンバーガーがお好き

### 【Nコード】

N7736S

### 【作者名】

28号

### 【あらすじ】

異世界で死したはずの魔王。

勇者に剣によつて絶命したはずの彼はなぜか、現代の地球、それもアメリカの荒野に建つ一軒のハンバーガーダイナーの前に立っていた。

今は廃線となつたアメリカで有名な国道ルート66。

その国道沿いにひっそり建つハンバーガーダイナーを営む少女と、死に損なつた魔王の奇妙な日常と恋。（『6倍数の御題様』よりお借りした御題を使用した作品です）

## はじめに

この連載は、文章力とやる気の足りない己を鍛えるための、修行企画です。

『6倍数の御題様』 <http://www3.tio/6title>  
よりお借りした『60の創作の御題2』と『6つのセリフの御題4』を合計した66のお題を使って小説を書いていくという物です。(あえて66にしたり、舞台がアレなのは、完全に私の趣味です) 小説は短編連作で、66で一つのシリーズが完結する作りになろうと思っています。

目標は1週間で3話(その分1話1話は短めでいきます)

勝手にやれよって感じですが、ほら、見られてると思うと、さぼり癖も強制されるかもしれないし・・・ということで、こちらで掲載させて頂くことにしました。勝手に。

もしお時間があれば、のぞいて頂けますと幸いです。

つつこみ、感想等もお待ちしておりますので、何かあればコメント等お待ちしております。

## あらすじ

異世界で死したはずの魔王。

勇者に剣によつて絶命したはずの彼はなぜか、現代の地球、それもアメリカの荒野に建つ一軒のハンバーガーダイナーの前に立っていた。

今は廃線となったアメリカで有名な国道ルート66。

その国道沿いにひっそり建つハンバーガーダイナーを営む少女と、死に損なつた魔王の奇妙な日常と恋。

60の創作の御題2

- 1 . はじめて
- 2 . 日課
- 3 . メイク
- 4 . 甘える
- 5 . 少年の心
- 6 . カメラ
- 7 . 苦手なもの
- 8 . ギター
- 9 . 毒舌
- 10 . 楽屋
- 11 . 笑い方
- 12 . リラックス
- 13 . 寝たふり
- 14 . 気心の知れた仲
- 15 . タイミング
- 16 . プラモデル
- 17 . 対決
- 18 . バナナ
- 19 . 美男子
- 20 . リーダー
- 21 . 集合
- 22 . アイコンタクト
- 23 . お祝い
- 24 . 癒し系
- 25 . メンバー
- 26 . ツボ
- 27 . ちびっ子ギャング
- 28 . 得意料理

5 8 .	見せ所
5 7 .	睡眠
5 6 .	グルメ
5 5 .	我慢
5 4 .	うるさい
5 3 .	いつの間にか
5 2 .	協力
5 1 .	オフショット
5 0 .	仲間入り
4 9 .	愛犬
4 8 .	ドライブ
4 7 .	気合
4 6 .	ケーキ
4 5 .	好きなもの
4 4 .	変わらない
4 3 .	ハスキーボイス
4 2 .	フオロ
4 1 .	応援
4 0 .	人見知り
3 9 .	食事
3 8 .	大切に
3 7 .	マッサージ
3 6 .	とぼける
3 5 .	いたずらっ子
3 4 .	掛け声
3 3 .	センス
3 2 .	ワイングラス
3 1 .	変身
3 0 .	バランス
2 9 .	打ち合わせ

59・絆  
60・またね

6つのセリフの御題4（10話ごとに1題挑戦します）

- 1．「あなたが言うつと冗談に聞こえませんか」
- 2．「今は非常時だよ！非常時だからきつと何をしても許されるよ！」
- 3．「可哀想な子、みたいな目で見られるから話したくありません」
- 4．「えー、この人と一緒にされると迷惑なんですけど」
- 5．「これって正当防衛だから罪にならないよね？」
- 6．「あーアホらしい。さっさと帰ろう」

お題配布もと『6倍数の御題様』  
<http://www3.t.o/>  
6 t i t l e

## Episode 01 はじめて

すべてが終わる。

それを望んでいたはずなのに、なぜか私はこんな所にいる。

ハンバーガーダイナー『ROUTE 66』。

見覚えのない文字だが、なぜだか私は目の前に建つその店の名前をはっきりと読むことができた。

その店の周りに、他の建物は何もない。

どこまでも広がる荒野と岩山、店の側を走る灰色の道だけが地平線の彼方と伸びている。

「いつまでそんなトコいんの？入るなら入りなよ」

店の前に立ちつくしていた私に声をかけたのは、1人の少女だった。年は10代後半くらいで、長い髪をひとつに結わえている。

「ほら、早く」

屈託のない笑顔につられ、私は少女とともに店の中に入った。店には少女の他に人影はなかった。

「何にする？つつつてもハンバーガーしかないんだけど」

「じゃあ、それで」

「飲み物は？」

「ワインを」

「そんなしゃれた物ないよ。あるのは炭酸、コーラかSprite。」

炭酸抜きならオレンジジュースかコーヒー」

「コーヒーならわかる」

「ホット？アイス？」

「ホットで」

「ポテトは？」

「いや、コーヒーに芋は入れない」

「ちがう、サイドオーダーきいてんの」

「よくわからないが、それはどのような芋なのだ？」

「・・・細く切ってあげてある芋。ケチャップにつける」

「ケチャップとは？」

「あんた本当にアメリカ人？」

「いや、メルトキオ人だ」

「トキオ？ってことは、日本人観光客か。でも日本人ってそんな赤い目だっけ？」

「いや、私の瞳は特別らしい。人が殺せるからな」

「もうアメリカンジョーク体得してんの？笑えないけどまあいいや、観光客ならサービスしてあげる」

少女はそう言って笑うと店の奥へと引っ込んでしまった。

1人窓際の席に座り、私はこの状況について考える。

つい先ほどまで、私は自分の城にいたはずだった。そこで待ちこがれた勇者と対峙し、己の運命と命の終わりをようやく迎えたはずだった。

なのに・・・。

「はい、特製ハンバーガーとポテトとコーヒーお待ちー」

目の前に置かれたのは、香ばしいにおいの牛肉が挟まったサンドイッチであった。サンドイッチには見えてくれがよくないが。

「これがケチャップ。ハンバーガーにもつけるといいよ」

いうなり、少女は無骨なサンドイッチの上部のパンをはがし、そこに瓶詰めにされた真っ赤な血液をぶちまけた。

この少女、見かけによらず、豪傑である。

「よし、食べな！」

はがしたパンを最初よりも3センチほど傾いた状態で上にのせ、少女は笑う。

「では・・・」

言いながら、私はナプキンとナイフとフォークを探す。

しかし、ない。

「もしかして、箸とかさがしてる？ハンバーガーはね手で食べるの、手で」



「ではナプキンは？」

「汚れたらトイレで洗えばいいよ」

「いいのだろうか、それで。」

「いいからたべてよ、マジでおいしいから」

言いながら、少女は私の向かいの席に腰を下ろす。許可無く魔王と相席とは、この少女、やはり豪傑である。

少女の視線が気になりつつも、私は無骨なサンドイッチを手でつかみ、口にした。

「……………」

「どう？」

美味である。

非常に、美味であった。

「ね、おいしいでしょ？」

否定しようがない。美味だ、生きていてよかったと涙が出るほど美味であった。

「泣くほどおいしいか、そうかそうか。さつすが私」

肉を包むパンはほどよい加減にトーストされ、間にはさまった肉厚な牛肉からは肉汁が絶えずしたたる。

そしてなにより、このケチャップという血液！

今まで飲んだ人や妖魔の物とも違う、芳醇な香りと甘美なる舌触りである。

そしてこれが、パンと肉に非常に合うのだ。

「こんなに美味な食べ物、はじめてだ」

「そ、そんなに褒めなくても……」

「私は嘘はつかぬ」

気がつけば、私は手元のハンバーガーとやらをすべて食べてしまっていた。付け合わせの芋とピクルスと呼ばれる酢の物も平らげていた。

もちろん、コーヒーもおいしく頂いた。ただし、コーヒーの味だけは最悪だったがハンバーガーのおいしさの前ではそれも気になら

ない。

「\$4・79でそこまで満足してもらえとは、我ながらいい仕事をしたもんだ」

「うむ、誇ってよいぞ」

それより・・・

「よんどるななじゅうきゅうせんと、とはいったい何のことだ？」  
私がそう訪ねたとたん、なぜだか少女の顔から血の気が引いた。

## Episode 2 日課

この世界にきてから、私の日課はダイナー『ROUTE66』の掃除となった。

未だにこうして生きていることはもちろん信じられないが、一番信じられないのはこの私が、魔王であるこの私がたった1人の少女に虐げられていることである。

「モップがけ終わったら、トイレ掃除もお願いねー」

納得いかない。たった一回の無銭飲食でもう1週間もこき使われている。

その上私の素性を話したというのに全く信じるそぶりもない。

これは近々、ダイナーの看板を私の邪眼ビームか魔剣で粉碎してみせねばなるまい。そうすればさすがの少女も私の恐ろしさを思い知るであろう。

そう考えたとたん、私は思わず魔王的な不適笑いを浮かべてしまう。虐げられ続けた所為かDSスイッチが入ってしまったようだ。

がしかし、それを少女は鋭い洞察力見とがめた。見とがめた上に、舌打ちまでした。

「ほら魔王！はやくしないと、バーガーにチーズ挟んであげないからね！」

それは困る。私はハンバーガー、それもチーズが挟んである物が大好物なのだ。虐げられるのは不快だが、チーズバーガーと等価交換なら致し方ない気もする。

そもそも、私には行くところもないのだし、掃除だけで衣食住がまかなえるのなら安い気もする。

と納得のための言い訳を自分に繰り返し、私はDSスイッチを切った。

## Episode 3 メイク

この世界にきてすでに2週間がたった。家がない私を、少女はダイナーに住まわせてくれている。

いまだ、なぜこの場所に自分がいるのかはわからない。もちろんもとの世界への帰り方もわからない。帰れると言われて帰るかどうかは別として。

正直、私はこの場所を気に入り始めている。

理由は二つ。一つ目はここにいれば毎食ハンバーガーが食べられる事。

二つ目は、少女と暮らすの日々がそれなりに充実している事だ。

少女はとにかく感情が豊かで、毎日一緒にいても飽きることがない。

そしてもう一つ、時折聞くことできる少女の歌声。これが何よりすばらしい。

といっても、歌う状況はもう少し考えて頂きたいところだが……。

日頃は魔王であるこの私を虐げるほどの豪傑でありながら、時折どうしようもない間違いを起こすことが少女には多々ある。そしてそう言うとき、彼女は歌うのだ。

ちなみに彼女の間違いのほとんどは、異性との交友関係だ。

この少女、男らしいわりに、交際している男にこころつとたまされるのである。

二股をかけられるのは日常茶飯事。最高で20又をかけられたこともあるらしい。そして売り上げをそう言う男に貢いでしまうため、店もボロいままなのだという。

男にだまされた次の日はたいがい、少女はメイクもせず素顔のまままで店に来る。その顔には泣きはらしたあとがくっきりで、そう言う日は店を開けず、テラス席に腰を下ろし一日中ギターという楽器

を弾きながら失恋の歌を歌うのだ。

これが、非常に上手い。ただ聞いていると妙に切なくなるが。

「あたし、本当はカントリー歌手になりたかったの」

歌の合間に、彼女がそうこぼしたことがある。

この世界の歌い手にどのような物があるかはわからないが、少なくとも私は彼女が夢をかなえるだけの声と素質があると私は思っている。

ハンバーガーと同じくらい、彼女の歌声は私をこの世界に縛り付けるだけの魅力があったからだ。

しかしいくら褒めても、彼女はそれを本気にとらない。

ハンバーガーが好きな魔王の言葉は当てにならないと笑い、また続きを歌い出すのだ。

仕方なく、私は彼女の側で彼女の歌を黙って聞き続ける。

地平線に沈む夕日が荒野を赤く染め、失恋から少しだけ回復した彼女が、私のためにハンバーガーを作ってくれるまで、私は彼女の側で彼女の歌を聞き続ける。

**E p i s o d e 0 3    メイク（後書き）**

9 / 4 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

## Episode 4 甘える

「はい、あーん」

「あーん」

と、窓際の席にかけているカップルがポテトを食べさせあっているのをじっと見つめていたら、少女に殴られた。

「じろじろ見ないの」

「見ようと思っっているわけではない。なぜか目に入ってしまったのだ。私がいた世界では、男女は慎ましやかな交際をする物だった。とくに婚儀を終えるまでは。」

ふれ合いといえればせいぜい手に触れたり、軽いキスをするくらい。しかしこちらでは、一つのポテトを両端から食べ合ったり、食事をしながら男性が女性を膝の上にのせたり、鼻についたケチャップを嘗めあたりりするのだ。

破廉恥である。しかし、なぜだか、見ていると目がそらせなくなるのである。

それを素直に言っと、

「たまってるんじゃないの？」

と少女に言われた。

どういう意味かと返したら殴られた。

「あんたさ、恋人とかいないわけ？」

「魔王を愛してくれる者がいると思うか」

「あんだ、性格はともかく顔はいいし」

「この世界では、顔がよいと異性にもてるのか？魔王でもか？」

「ちなみに体は？鍛えたりしてる？」

「一応鍛錬は欠かしていない」

「腹筋とか割れてれば、問題ないんじゃない？」

割れているとはどういうことだろうか。私の腹は当てはまるのだろうか。

そう思い、「確認してくれ」と服をめくりあげたら、少女が真っ赤になって私を殴り飛ばした。

今日はよく殴られる日だ。

殴られた勢いで床にひっくり返ると、逆さまの世界で男女が微笑みあっているのが見えた。

今日もこの世界は平和だと、思わせてくれる暖かな微笑みだった。けれどそれを眺めていた私の脳裏には、暗闇と恐怖に囲まれている私の日常が思い出させた。

同時に、今見ているすべては夢で、私はまだあの暗い世界の住人なのではないかという考えに支配される。

・・・がしかし。

「ほら、おきな！」

少女に蹴られた腹には鈍い痛み。そうか、やはりこれは夢ではない。

「なにニヤニヤしてんのよ、やっぱり欲求不満なわけ？」

「いや、私は満たされているよ」

私が笑うと、少女は意味がわからないとつぶやきながら、起きあがる私に手をさしのべてくれた。



## Episode 05 少年の心

「あんたさ、ハンバーガー作ってみる？」

少女の言葉に、私は1も2もなく頷いた。客のいない、真夏の昼下がりのことである。

まあ実際やってみたら少女のようにうまくいかず、パテを5枚も焦がしてしまったのだが。

「私はハンバーガーを作る才能がないのだろうか？」

「あんたでも、凹むことあるんだ」

うなだれた私を、少女は笑う。

「安心しなよ、私も最初はこんなだったから」

「今の君からは想像できないが」

「死んだ父さんにつきつきりで教えてもらってさ、それでも一人前って言われるまで1年もかかった」

「そうか、武術の鍛錬と同じなのだ。何事も精進が必要というわけだ」

「・・・もしも、だけど」

私のこがしたパテを鉄板からはがしながら、少女はがらにもないか細い声で続ける。

「あんたが、ずっとここにいて言うなら、教えてあげてもいいよ」

いやじゃなければ。と少女が続けた。

もちろん嫌なわけがない。むしろ、非常に喜ばしい事だ。

「君のような職人に私もなりたい。ハンバーガーは今や私の命だ」  
「なにそれ」

「教えてほしい。なにもかもを」

私が少女の手を取ると、彼女は笑った。

「そんな子供みたいなキラキラした目でみられたら、教えないわけにはいかないか」

「では、今日からあなたは私の師匠だな」

「なにそれ、マスターオビワンみたいなの？あんたスターウォーズオタク？ますます子供っぽいよ」

「子供っぽいという敬称ははじめてだ」

「いいんじゃないの？少年の心を持った魔王つてのも」

師匠はそう言つと、早速私にハンバーガーの作り方の手ほどきをしてくれた。

## Episode 6 カメラ

魔王の舌をうならせるだけあって、『ROUTE 66』はそれなりにお客が来る店である。

店と同じ名の側を通る道路はほとんど使われていないらしいが、それでもマニアックな観光客や、近隣の街に物資を運ぶトラックという機械仕掛けの乗り物が時折通りかかる。

そう言う人たちの中に足繁くこの店に通う物も多いのだ。

「いやあ、それにしてもわれらの歌姫にもついにコレができたとはなかでも、この男。私に向かって小指を突き立てている『ステイプ』自称43歳独身は常連中の常連で、やたらと私や師匠にかまってくる。」

「で、歌姫との仲はどれくらい進展したんだ？」

「歌姫とは師匠のことか？師匠とは、一緒に肉を焼く仲だ」

「お前変な奴だな。ジョークは笑えないが」

そう言いながら、ステイプは唐突に私を側へと引き寄せる。

「ま、冗談はこれくらいにして」

言うなり、ステイプは私に黒い小さな箱を押しつけてきた。

「お前みたいのが歌姫の好みとは思えん。何か訳ありだろう？」

「うむ」

「よかつたら、俺がいろいろと協力してやる」

「本当か？」

「ただし」

言うつと、男は小さな箱を私の手にしっかりと握らせる。

「歌姫ちゃんの写真をフィルムいっぱいにとれ。もちろん気づかないように、着替え中だとなおよし」

「写真？それは何だ」

「しらないのか？」

「うむ」

「とにかく歌姫ちゃんに気づかれないように、このレンズから歌姫ちゃんをみる！そしてこのボタンを押せ」

「それだけで私に協力するというのか？この世界に住人は皆人がよいのだな」

「俺は来週また来る。それまでにカメラとフィルムを預けるから、取りきれよ」

「承知した」

ステイブが帰ったあと、私は早速カメラとやらで師匠の写真とやらをとって見た。

・・・が。

「それで、あんた隠れているつもりなの？」

「うむ、隠れてとれとの指令だ」

「柱から、体の半分丸出しで？」

「全部隠れたらこの窓に師匠が入らない」

「魔王って盗撮もできないのね」

「とうさつとはなんだ？」

「まあいいや、そのカメラ貸して」

「いや、コレは私の仕事で」

「私が写つてればいいんでしょ」

言うなり師匠は私の腕からカメラをひったくると、唐突に私の肩を抱き寄せる。

それからカメラの表面を私たちの方に向け、微笑んだ。

「魔王、あんたが好きなバーガーは？」

「チーズ」

そして師匠はボタンを押した。

Episode 07 苦手なもの

「いやー……」

深夜。店の片づけをしていると突然師匠の叫び声が聞こえた。

あわてて師匠のいる厨房に向かうと、彼女は黒い魔物と対峙していた。

黒い魔物とは私の城のメイド達が、そう称していたゴキブリと呼ばれる小さな昆虫だ。

「おお、こいつはこちらの世界にもいるのだな」

「のんきにしてないで、退治して！」

といわれても手元に武器はない。

しかたなく、私は久しぶりに我が相棒を呼び出すことにした。

我が相棒の名は、魔剣アンティベラム。一振りで山をも切り崩す魔力を秘めた剣である。

「我が誓約により、出でよ！」

久しぶり過ぎて危うく忘れかけていた召喚の魔法を口にすれば、意外なほどあっけなく相棒は現れた。

『久方ぶりです。我が主殿』

「うむ。悪いが、お前の力を使うぞ」

『なんなり……』

言いながら、我が相棒は唐突に黙り込む。

『主よ、私はいったい何に使われるのか確認してもよろしいでしょうか』

「あれを、たたきつぶそうと思う」

『せめて、切ってください』

「了解した」

長年の相棒の意見は尊重せねばなるまい。

私は相棒を鞘から抜き放つとほぼ同時に黒い悪魔を切り捨てた。

『あと、可能なら洗って頂けるとありがたい』

相棒の言葉に頷き、私は師匠に目を向けた。

「黒い悪魔は無事葬り去ったぞ」

私が微笑んだとたん、彼女は突然白目をむいて気絶した。

「うむ、それほどまでに黒い悪魔が苦手だったのか」

『いえ、そう言うわけではないのでは？』

相棒の言葉を、私は理解できずにいた。

## Episode 08 ギター

黒い悪魔を葬り去ってから、師匠は私と距離を置くようになった。それを柄にもなく寂しく思っていた4日目の夜、師匠に話があるといわれた。

「あんたさ、本当にこの世界の人じゃないの？」

これ以上嫌われるのは嫌なので、私は素直に頷いた。

「魔王って何か、ゲートルで調べただけけど、結構悪い奴だったのよね。人の生き血をすするとか、マジなの？」

「かつての主食は人の血であった。それこそが、私の力の源ゆえ」

「もしかして、今も？」

「いや、ケチャップがあれば問題ないようだ」

「そういうもんなの？」

「うむ、3食ハンバーガーだが問題ないぞ」

「でも隠れて人の魂を食らってるとか」

「それはない。食らうような高貴な魂を持つ客がこの店には来ないからな」

「嫌み？」

「事実を述べたまでだ」

答えると、師匠は少しほっとした顔をした。どうやら、私は知らず知らずのうちに彼女に不安を与えていたらしい。そう言えば、魔王という肩書きはそう言う物だったと、今更ながらに思い出す。

ここで暮らすうちに忘れていたが、そもそも私は人に恐怖を与える存在なのだ。

「師匠は、私が恐ろしいか？」

「よくわからない。剣とか出したときは、さすがに少し怖かったけど」

「もしも、師匠が私を不快だと思うならいつてくれ。そのときは、潔くここを立ち去るつもりだ」

「行く場所、あるの？」

「ない。しかし師匠は私にハンバーガーのおいしさを教えてくれた人だ、そんな師匠を苦しめたくはない」

「ほんと、あんた魔王っぽくないわね」

「まあ、できたらここに居たいというのも素直な気持ちだ。師匠のハンバーガーとは、離れがたい」

「そこ、私と離れがたいとか言おうよ」

「師匠とも離れがたい」

「いや、今更だし」

「本当だ。師匠のハンバーガーと同じくらい、師匠の歌も好きなのだ。あのギターとか言う楽器を奏でている姿は、美しいと思う」

「ほ、褒めても何も出ないよ」

「事実を述べたまでだ」

師匠は突然赤くなると、私の方を乱暴に突き飛ばした。

「そ、そこまで言うならここに置いてあげてもいい」

「本当か！ハンバーガーをまた食べてもいいのか！」

「あんた、ホントそればかりね」

「師匠とも離れがたいぞ」

私が言うと、師匠はようやく私に笑顔を向けてくれた。

「まあそこまで言うなら、たまには歌ってあげようかな。失恋ソング以外も」

「なら、ロッカーからギターをとってこよう」

「壊さないでよ」

「安心しろ、師匠と師匠の大切な物は何があっても傷つけない」

私の言葉に、なぜだか師匠は少しくすぐったそうに笑った。



常日頃からこの店を取り巻く荒野は暑いが、その暑さがさらに増し始めた頃、師匠の友人という少女が訪ねてきた。少女とは違いこぎれいと言うか見目麗しいタイプの令嬢である。

厨房にいた少女の変わりに応接をしたところ、師匠とはハイスクールという学校とともに勉学をいそしんでいる仲らしい。

日頃から常に店にいたので学校に通っていないとばかり思っていたが、どうやら夏休みという休暇中故に1日中店を開けていたようだ。

普段は学校が終わる6時過ぎから夜中の2時までが営業時間らしい。

そこまでの説明を聞いて、また一つ師匠について詳しくなった気でいたとき、師匠がこちらに気づいて厨房から出てきた。

「もしかしてまた例の件できたの？」

師匠の登場に、少女は師匠の方へと駆け寄った。うむ、走り方も師匠より女性らしく可憐だ。

「おねがいよ。あなたの歌があれば盛り上がること間違いなしなの」

「仕事が忙しいの」

「とにかくもう一回考えて、ね？」

師匠の友人はそう言うのと、慌ただしく店を出て行った。

残されたのは師匠と私の二人のみ。もちろん私は、師匠にこの展開の解説を求めべく熱い視線を向けたが、師匠は見事なまでに無視を決め込んだ。

だがその夜、いつもはさっさと車に乗って帰ってしまう師匠が、どういふ訳か深夜の3時までコーヒーを飲んでいた。

「あんたさ……」

コーヒーを入れて30分もたったところで、師匠は苦虫をかみつ

ぶしたような顔でようやく口を開く。

「私の先生とか、やってみない？」

「唐突だな。ちなみに、どういう意味だ？」

尋ねると、いつもより覇気がない声で師匠は続ける。

「昼間来てたあたしの友達いたでしょ？あの子がパーティの企画やつてるんだけど、そのテーマが今年はカントリーでさ」

「カントリーというのは、師匠の歌うあの歌か」

「そう。で、そこで歌わないかって言われたのね」

それはすごい事だ。

「だがなぜ、私が先生なのだ」

「私ってさ結構鈍りもキツイし口も悪いでしょ。前に舞台上で歌ったとき、トークで大失敗してさ……」

異邦人故あまり気にしなかったが、確かに師匠の言葉遣いは悪い。そして発音も、どことなく他者と違う気もする。

「魔王のくせにさ、あんたの英語完璧なのよ。だから教えてくれな  
いかなって」

「私自身は英語を喋っているつもりはないのだが」

「一緒にセリフ考えて、普通に読んでくれればいいから」

「それで師匠の役に立つのなら」

でも、と私は師匠に笑いかけた。

「私は師匠のしゃべり方は好きだぞ。鈍りとやらも心地良い。…まあ、たしかに多少毒舌だが私はそれも心地良いと思う」

「…褒めてるの？ それとも、マゾをアピールしてんの？」

「褒めたつもりだが、間違えただろうか」

私が笑うと、師匠はようやくほっとした顔で椅子にもたれる。

いつもは豪傑な師匠にも、それなりに悩みはあるようだ。

そしてそれを告白してくれたこと。その相談役に私を選んでくれたことが嬉しくて微笑むと、師匠に頭をこづかれた。

でもそれが何故か心地よかった。どうやら師匠が言うように、私はマゾであるようだ。

## Episode 10 楽屋

師匠に喋り方のレクチャーをした翌日、私は生まれて初めての体験を沢山した。

一つ目は車という鉄のドラゴンに始めて乗った。運転は師匠だ。正直乱暴で気分が悪くなった。

次に、この世界の人間達が暮らす街という所に始めて行った。そこで始めて服というのも買って貰った。

今までは師匠の死んだ父親の服を着ていたのだが、若干丈が合わず不格好だった。それではパーティに連れて行けないと言うことで私のサイズにあった服を買ってくれたのだ。

そしてそう、何よりも初めてで驚いたのはパーティという宴である。

師匠の高校の体育館で開かれたそれは、若い男女だけでなく街中の男女が詰めかけるとても賑やかな物であった。

狭い街故、こういう催し物はたくさんの人々が来るのだという。

そしてそれに、私が出ることを師匠は許可してくれたのだ。

「でも、絶対私の側を離れないでよ」

「あと、ハンバーガーは絶対食べちゃ駄目。私より上手いハンバーガーなんてないし、口が腐る。でもまあ、ピザなら許す」

「あとそう、絶対知らない女の子について行っちゃ駄目だからね。

ダンスとか絶対駄目」

そういって、師匠は楽屋として用意されたステージ裏で、私にくさんの約束事を取り付けた。

師匠は怖いので全部メモした。

「私は殆ど舞台の上だから、何かあったらステイプに聞いて。あいつも来てるから」

「了解した。でもその心配はない」

「大丈夫？」

「私はつねに、師匠の側にいる。舞台袖から一步も動かないつもりだ」

「いや、でもさすがにそれはつまらないでしょ」

「今日は、師匠の歌う姿を見に来たのだ。だからずっと見ている」  
私がいようと、師匠は何故だか真っ赤になつて私をこづいた。

最近師匠は私の言葉でよく赤くなる。たぶん、私の言葉のどこかに師匠を赤くなるほど怒らせる言葉があるのだろう。

気を付けねば

Another Episode 1 「あんたが言つと冗談に聞こえない」(前書)

Episode 10 話 別視点です。

Another Episode 1 「あんたが言つと冗談に聞こえない」

パーティに魔王を連れてきたのは間違いかも知れないと、私は思  
い始めていた。

入り口から楽屋に入る僅かな間だったが、その間にも多くの女子  
達が彼をうつつりした顔で見つめていたのだ。

つつい忘れがちだが、魔王は顔だけは良いのだ。顔だけは。

とはいえ、別に嫉妬しているとかそう言うことは談じてない。別  
に魔王とはなにもない。たまたま家の外にいたから拾っただけの赤  
の他人だ。

でも一応魔王だし、何か間違いがあるといけない。

だからつつい、彼に色々な約束を取り付けてしまったのだ。そ  
してそれを、魔王は律儀にメモなんか取っている。

ひとつくらい嫌だとか出来ないと言えはいいのに、魔王はいつも  
私のいうことを全て真に受ける。まるで犬だ。

「私は殆ど舞台の上だから、何かあったらステイブに聞いて。あ  
いつも来てるから」

「了解した。でもその心配はない」

「大丈夫？」

「私はつねに、師匠の側にいる。舞台袖から一步も動かないつもり  
だ」

「いや、でもさすがにそれはつまらないでしょ」

「今日は、師匠の歌う姿を見に来たのだ。だからずっと見ている」  
犬。それも忠犬過ぎる魔王は、そんなことをさらりと語ってのけ  
る。

犬だからわからないのだ。そんな真面目な顔で、甘い声音で言わ  
れたら世の中の女子がどう思うか。

「そう言うセリフ、あんまり言っちゃ駄目よ」

「セリフ？」

「あんたが言つと冗談に聞こえない」  
私の言葉を、魔王はちつとも理解していない表情で頷く。  
頭の悪さも、犬並みだ。

## Episode 11 笑い方

パーティーの翌日は、店にたくさんのお客さんが詰めかけた。昨日の夜の師匠の歌は素晴らしく、一緒に考えたトークも良かったようだ。

「店の宣伝を入れたのはあたりだったわね」

厨房で忙しく働くながら、師匠は嬉しそうに笑っていた。

だがふと、客入りを見て師匠は僅かに表情を暗くする。

「なんか、女子も多くない？」

そうだろうかとカウンターから顔を出すと、何故だか女子達から歓声が上がった。なんなんだこれは。

「：ステイプあたりがバラしたな」

「何をだ？」

「：あんだ、今日厨房」

「しかしハンバーガーは」

「今いる分は全部焼いてあるから、後はひたすら挟め！とにかくあんたは、そこから出るな！」

そう言つと、師匠は私を置いて厨房から出て行ってしまった。

言われるがまま、ハンバーガーを作りながら師匠の方を伺つと、

師匠は先ほどの女子達の所にいた。

心なしか、師匠の笑い方が怖い。今日は言われたとおり、厨房からでない方が良さそうだった。



## Episode 12 リラックス

「あんたさ、ずっと店のソファーじゃつらくない？」

ある晩、店の片づけを終えた師匠がそう言った。

「多少かたいが、睡眠には問題ない」

「でも、ちゃんとしたベッドで寝たいとか思わない？ ここじゃリラックスも出来ないでしょ」

「屋根と寝床があるだけで私は幸せだ」

それは本心だったが、どういう訳かその日、師匠は私を無理矢理車に乗せた。

何もない荒野を1時間ほど走り、以前服を買った街へ入って更に15分ほど走ると、そこは閑静な住宅街だった。

店の周りとは違い緑も多く、師匠が車を止めたのも芝生の敷き詰められた広い庭がある家だった。

「いい家だな」

「私の家よ」

「そうか。一人暮らしなのに広いな」

「昔は両親と暮らしていたから」

「そうか」

会話が途切れた。師匠は真剣な顔で何かを考えている。

そう言うときに声をかけると怒られるので、私は窓の外から景色を眺めてのんびり待った。

「…誤解はしないでよね」

きっかり5分たった後、師匠は何故か睨むような表情で私に行ってきた。

「あんたよく働いてくれるから、だからこれはご褒美」

「ご褒美？」

「親父の部屋、使わせてあげる」

「それは、同棲という奴か」

「だから誤解しない！」  
事実を述べたつもりだったが、何故か師匠に殴られた。  
「あんたが何かしたら、すぐに追い出すから」  
「大丈夫だ。皿やグラスは割らない」  
「いや、そう言う事じゃない」  
「食料を勝手に食べたりもしない」  
「…犬か、あんたは」  
「あと、寝室も綺麗に使う」  
私の言葉に、師匠は呆れたように笑い、車のドアを開けた。  
「何か馬鹿らしくなってきたわ」  
そして彼女は、私の座る助手席のドアを開けてくれた。  
「食べ物も好きに食べて良いし、部屋は好きに使って良い」  
「しかし手持ちがない」  
「学校が始まったら掃除とか家事をお願いするから、それでチャラ」  
「それだけで良いのか？」  
「あんたが言ったとおり、一人じゃこの家広いのよ」  
そう言って差し出された師匠の手を、私は取った。

### Episode 13 寝たふり

その日は朝から体調があまり良くなかった。

こちらの世界に来てからずっとハンバーガーだけで生活していたが、やはりそれだけでは良くなかったようだ。

だが血を拝借出来るような相手はいない。墓場も近くにはない。

「あんた、顔色悪いけどどうしたの？」

そして運が悪いことに師匠に体調不良がばれた。

「きつと食あたりだろう」

だから大丈夫だと笑って店の掃除に戻ろうとしていたとき、唐突に体が傾いた。気がついたときには頭からテーブルに突っ込んでいた。

その後数時間の記憶が私にはない。ただ気がつけば白い布で囲まれた寝台の上に横になっていた。

「原因がわからないってどういう事ですか！」

聞こえてきたのは師匠の怒声だった。

「ですから異常は見あたらなないので。ただ血圧と脈が低下しています」

「あんた医者でしょ！いいから、こいつを直してよ！」

師匠の声がまるで泣いているように震えていた。だから私は寝たふりをしている事も出来ず、側のカーテンを開けた。

起きあがった私に医者は信じられないという顔をし、師匠は涙で潤んだ目で私を見ていた。

「元気になった。だから、帰ろう」

本当は元気ではなかった。でも、ここいいても何も解決しないことは明かで、多分師匠もそれに気付いたのだ。

泣きながら抱きついてきた師匠を抱え、私は医者に礼を言って病

院を出た。

師匠の運転する車が町を出ると、既に日は傾きかけている。

本当は家に帰るはずだったが、夕日に染まる荒野が見たいという私の言葉に、師匠が車を走らせてくれたのだ。

「窓を、開けても良いか？」

私が尋ねると、師匠は頷いた。

窓を開け、そこから私は頭と肩を出す。

私はこの、荒野の乾いた風と土の香りが好きだ。

私をもといた世界に比べるとここは緑も少なく、生物の影もあまりない過酷な地だ。

だが地平線の向こうから太陽が登る朝や。鮮やかな赤い世界が闇に包まれてゆく黄昏時。そして宝石をちりばめたような荒野の夜空。時間によって移り変わるこの世界の輝きは、私を虜にしてやまない。

「魔王……」

ガラにもなくセンチメンタルとやらに浸っていた所為だろう。師匠が心配そうな顔で私を見つめていた。

「ん？」

「死んだりしないよね」

風にかき消えてしまいたいそうなほどか細い声で、師匠は言う。

だから私は笑った。

「安心しろ。だから窓を開けたのだ」

そういうと、私は病院から拝借してきた物をポケットから取り出す。

直後、師匠が思い切りブレーキを踏んだ。危ないとは思ったが、どうせロクに車も来ないので問題はないだろう。

「あんた、それ……！」

「魔法で盗んだのだ。沢山置いてあったから」

「だからって、取って来ちゃ駄目だろう！」

そう言って師匠が指さすのは、私が持っているパックに入った血液だ。

「安心しろ、師匠から頂きたお小遣いを置いてきた」

「いくら」

「10ドル」

師匠が、力無くハンドルに体をもたれた。

「ああそうだ、後ろの窓も開けた方が良いぞ。血のおいがついてしまう」

「そんなことより、そんな少なくて良いわけ？」

「これでも多すぎる位だ。ワイングラス半分で、十分だからな」

私がいうと、師匠はようやく車を走らせた。

「それだけで良いなら、欲しくなったら私にいなさいよ」

「買ってきてくれるのか？」

ちがうわよ馬鹿！と私を殴った後、師匠は苛立ちを抑えた声で続けた。

「私、血の気が多いからけっこう献血とかするし。別にあなたになら、多少くれてやっても良いかなって」

「よいのか？」

「し、死んだりはしないわよね！」

「安心しろ、吸血行為で人を殺したことはない」

「あんだ、本当に魔王？」

「人が死ぬほどの血液だぞ、こちらの腹がはち切れてしまう」

私がいうと、師匠はおかしそうに笑った。

## Episode 14 気心の知れた仲

朝起きると、師匠が私にメモを押しつけてきた。

「今日から私学校なの。授業はないからお昼過ぎにはもどってくるから」

「ということとは、店の方は午後からか？」

「うん。学校が始まったら夕方からになるとおもっ」

「なんなら、先に行つて開店の準備をしようか？」

「でも車運転出来ないでしょう」

「安心しろ。こういう時のために、色々と教わつたのだ」

得意げに言つと、私は我が相棒魔剣アンティベラムを呼び出す。

『例の奴ですか』

「たのむ」

私はいつと、我が相棒を床に突き立てた。

その直後、相棒は一台のバイクへと変化する。

「これは・・・」

「運転の仕方はステイプに教えて貰つた」

「あんた達、いつの間にそんな仲に」

「師匠の寝顔の写真を渡したら、私の事情を全て受け入れてくれたぞ」

なぜか、そこで殴られた。

「変な奴と心を通わせおつて・・・」

「そうなのだ！ ステイプは良い友人なのだ！ 私に、これほど良くしてくれる友人は未だかつていなかったのだ」

私がいつと、何故だか師匠は拗ねたような顔で私を見上げてきた。

「私は、友達じゃないわけ？」

「うむ」

頷くと殴られた。しかし嘘はないのだから仕方ない。

「師匠は友人よりももっと特別だ。どう形容してよいのかはわから

ないが、ステイプよりもっと気心が知れた間柄だと思っている」  
私が答えると、やはり師匠は真っ赤になってそのまま家を出て行った。

『主よ、発言してもよろしいでしょうか？』

「なんだ？」

『私はあなたを少し見直しました。破壊行為以外は何の取り柄もないと思っていました。まさか女性の心を掴む才能があったとは』  
『女性の心とは手でつかめるものなのか？』

『その上天然でいらっしやる。どうやら跡継ぎの心配はいりませんね』

「そのような者を作るつもりはない」

『ですがせっかく新天地を見付けられたのです。この世界を我が物になさりたいとは思わないのですか？』

「不思議な話だが、こちらに来てからはそのような感情とは縁がない」

『ふむ』

「ただあるのは、ハンバーガーがたまらなく愛しいという感情だ」

『私には理解しがたい』

「お前にもそのうち分かるさ。私とお前は破壊のために作られた物同士、その片割れがハンバーガーをこんなにも愛せるならば、お前にもその素質があるはずだ」

『お言葉ですが、私は物を食せません』

「ならばあの造形を愛でればよい」

『たしかに、あのふくらみは女性の胸のようで愛らしいとは思いますが』

「おまえ、エッチだな」

『覚え立ての言葉をすぐ使いたがる所は、直した方がよいかと思います』

魔王の相棒は、そう言ってエンジンを吹かした。





## Episode 15 タイミング

「いい？肉をひっくり返すタイミングは香りと音で計るの」

鉄板の前でパテをひっくり返しながら、師匠は額の汗を拭う。

「目で肉の焼き加減を見るのももちろん大事、だけど中までは見えな  
いでしょ」

師匠の言葉に、私も自分の前のパテをひっくり返す。

「今は、なにを基準にひっくり返した？」

「香りだ。肉の焼ける香りがこちらまで香ってきたので返した。少  
し早い気もしたが、師匠はいつもはやめだから」

「何でだと思っ？」

「焼きすぎるよりは生焼けの方が後で調整がきくかと」

師匠が笑顔で頷いた。

「私だって毎回完璧じゃない。だから最後まで気を抜かないで、失  
敗したと思っても慌てないのが大事」

慌てない事は得意だ。昔から、良い意味でも悪い意味でも動揺し  
ない魔王だと言われてきた。

「でもホント、あんた随分上手くなった」

「師匠に褒められると、なんだかむず痒いな」

「これは、私もそろそろお役ご免かな」

師匠の言葉に、何故だか突然喉のあたりがくつと詰まった。

剣の師匠に免許皆伝を貰ったときは何の感動もなかったが、ハン  
バーガーを前にすると私は涙もろくなるらしい。

「ちょっと、早いわよ泣くのー！」

「自分でも驚いている。私は涙という物に縁がないと思っていたの  
だが」

「っていつか、無表情のまま泣くのやめて。なんか怖い」

「一応、多分これは感動の涙だと思う」

「ならそう言う顔しなさい」

「そう言う顔とはどういう顔だ」

「そういえば、感動したときの顔って説明しづらいわね」  
それから彼女は私の顔を見上げて少し考え込む。

「とりあえず笑っておけば？」

言われるがまま笑った。

「だめだ、泣いたままだと今度は気持ち悪い」

そう言うのと師匠は焼いていたパテを持ち上げ、それから置いてあったバンズにそれを挟んだ。

「とりあえず、これ食べて」

言われるがまま、今度はハンバーガーにかぶりついた。

「うん、あんたはハンバーガー食べてるときが一番いい顔してる」  
師匠はそう言うのと、私の涙と口に付いたケチャップをぬぐい取った。

## Episode 16 プラモデル

師匠の家に住むようになってから、私は「買い物」という手伝いをするようになった。

家で使う生活用品、食料などをスーパーと呼ばれる道具屋で購入するのだ。

師匠は学業とハンバーガーで忙しい。なので、家のことくらいはこなしたいと考えていた私に、師匠が与えてくれた仕事が「買い物」である。

しかし、これが非常に難しい。

今でこそだいぶ慣れたが、最初は牛乳と洗濯用洗剤をよく間違えた。

そのたびに師匠に怒られた。

でも、似たような容器に入っているのが悪いと思う。

私の国では牛乳と言えば紙の容器か瓶に入っていたのに、この街の牛乳は洗濯用洗剤そっくりの大きなプラスチックボトルに入っているのだ。とても良い迷惑である。

しかし私は魔王と呼ばれた男。どんな強敵を前にしても、降参するわけにはいかない。

毎日師匠に殴られているうちに、私は買い物でも免許皆伝を貰えるようになった。

牛乳と洗剤はもう間違えない。シリアルと犬の餌を取り違えたりはもうしない。

だが、余裕が出てくると今度は新しい問題が私を悩ませた。

買う物を間違えないことだけに目がいつていた頃は気付かなかつたが、このスーパーという道具屋には面白い物が沢山売っているのだ。

人が10人は入れるテント。

エンジンの着いていないバイク。

妖精が入っているのかと思うほど良く弾むボール。

それらはとても興味深く、そして購入欲を誘うのである。

その中でも、私が一番気になっているのは掌に載るくらいの車の模型だ。

プラモデルと言っらしいそれは、とても細かいパーツを自分で組み立てて遊ぶ玩具らしい。非常に興味がある。だが、小さい割にこれはとても根が張るのだ

計算したところ、私のお小遣い半年分である。半年。

かつての世界ではあつという間だったが、この世界に着てからは時間の流れが穏やかなので、短いとは思えなかった。

とはいえ欲しい。あれはどうしても欲しい。

なので、私は自分の部屋に貯金箱という奴を置いた。師匠の部屋に転がっていた子豚さんの貯金箱だ。

「あんだ、貯金なんてして何かうつもり？」

ナイフ？銃？と師匠は失礼な事を言う。魔王だからと言って、武器マニアというわけではない。それに、銃やナイフであれば我が相棒に頼めば変形してくれる。

「プラモデルだ」

「そんなの、ガレージに沢山あるわよ」

いきなり、子豚さんがお役ご免になった。

「親父が好きだったの。馬鹿みたいに沢山買って、作り終わるより先に死んじゃった」

だから好きなの作りなさいと師匠は笑う。

言われるがままガレージに行けば、確かにそこはプラモデルの山がある。

「師匠」

「あん？」

「あなたの父上は、まさに神だな」

子豚さんの中のお金は、今度師匠が墓参りに行くときの花代にし

よ。

そう決意し、私はプラモデルの山に飛び込んだ。

## Episode 17 対決

「彼女をかけて、俺と勝負だ！」

かつては勇者と名乗る人間達と戦いを繰り返してきた私だが、この世界で決闘を申し込まれたのはそれがはじめてだった。

そのうえ対決の場所は暗黒の谷にそびえ立つ城でも、魔物の森の奥の神殿でもなく、師匠の家の玄関先である。

「師匠！ 対決を申し込まれたのだが、受けるべきだろうか！」

師匠は部屋の中でエクササイズという奴に興じていたが、私の言葉に面倒くさそうに顔を上げる。

「誰がきたの？」

「君は誰だ？」

「チャーリーだ！」

「チャーリーだそうだ」

「ああ、クラスメイトなの」

「師匠の友人か、それは対決すべきではないな。さあ中に入り給え、コーヒーとコーラがあるがどちらが良い？」

「……あんだ、俺の話聞いてたか？」

「師匠の友人なのだろう。ああそうだ、昨日私が焼いたクッキーがあるんだ、どうぞ食べていってくれ」

「いや、だから俺はあんだと勝負を……」

「師匠の友人は私の友人だ！ そうだ、私のプラモデルコレクションを見せよう！ 友達に見せるのが夢だったんだ！」

「俺を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿にされることはあるが、人を馬鹿にしたことはないぞ」

それからもう一度飲み物のオーダーを聞くと、チャーリーという若者は小声で「コーラ」と返してくれた。

## Episode 18 バナナ

兼ねてから、私はこの店の飲み物に関しては懸念を抱いてきた。

コーラ。これはとても薄い。

オレンジジュース。これも薄い。

スプライト。薄い

飲料水。実は水道水。

コーヒー。これはもはやコーヒーの味がしない。

と言った具合に、ハンバーガーがあれほど美味であるのに、飲み物がどれも酷い味なのだ。

どこのハンバーガーダイナーもこういう物だと言うが、私がこっそり書店で読んだ本には飲み物も売りにしている店も多いと書いてあった。

それを指摘したら師匠は不満そうな顔だったが、やはりハンバーガーを引き立てる飲み物も大事だと私は思う。

そこで私は師匠が寝静まった深夜、こっそり店に通い、店の売りになるドリンクの開発を始めた。

とりあえず先日知り合ったチャーリーという若者とその仲間の話を聞いたところ、スムージーやシェイクと言った甘い飲み物もあると良いとの話だった。

そこで私は手頃な値段の果実を用いて、シェイクという奴を作ってみた。

アイスと牛乳と果物をミキサーという拷問器具で混ぜればすぐに出来るお手頃商品である。

とはいえ配分は、勘。飲んだことがないのだから仕方がない。

しかしこれが意外と良くできた。特にバナナを使った物は大変美味であった。

開発から約一週間後、恐る恐る師匠に試飲をお願いしてみた。

「どうだろうか？」

「いくらで売るつもり？」

「25セント？」

「安すぎて元取れない」

そう言った後、師匠は私の前に3ドルを置いた。

「これくらいでも、私は飲む」

そして私のバナナシェイクは3ドルで売られることになり、店の人気商品のひとつになった。



**E p i s o d e 1 8    バナナ（後書き）**

9 / 4 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

## Episode 19 美男子

最近師匠の機嫌が悪い。

毎日私の顔を見ると舌打ちをするのだ。

正直傷つく、とても傷つく。

今日も朝から3回も舌打ちをされた事に落ち込んでみると、女性客達が慰めの声をくれた。

そう言えば師匠に舌打ちされる一方、店の客には優しくされる事が多くなった。特に女性の客に。

今日も20回ほど週末の予定を聞かれた。

週末は、師匠とビデオを見る予定だと告げると何故だかとても残念がられた。

やはり、休日の夜に恐怖映画を見るなんて、今時の若者は好まないのだろうか……。

最近疲れている師匠を癒やす為に、無い知恵を絞って企画したイベントなのだが、実は良い迷惑だったのかも知れない。

もしかしたら、舌打ちも原因なのかもしれない。

「師匠、師匠はジェイソンさんはお嫌いか？」

厨房に飛び込むと同時に尋ねれば、またアホなことを言い出した、と言う顔で師匠が私を見る。

「順序立てて話せ」

言われるがまま、舌打ちで傷ついていた事から厨房へ駆け込むまでの心情を伝えれば、師匠は少しだけばつが悪そうな顔をする。

「別に、映画は嫌じゃない」

「じゃあ、何が嫌なんだ？」

「……あんたは、本当にそれでいいの？」

何がだと尋ねると、師匠はパテを焼きながらちらりとこちらを伺う。

「今週の日曜日、またうちの高校でパーティーがある。店に来てる子

達は、みんなそれに魔王と行きたいのよ」

「師匠はまた歌うのか？」

「今回は歌わない」

「なら行かない」

即答すれば師匠は驚いた顔で私を見た。

「日曜日は師匠と映画を見る。そう約束した」

「約束なんて律儀に守らなくて良いよ。もし行きたきゃ、行けばいい」

「でも、私は師匠との約束は守る」

何故と尋ねられた。

何故と言われても、守りたいから守る以外に理由はない。

それを素直に告げれば、師匠はホツとした顔で私から顔を背けた。

「……舌打ちとかして、ごめん」

「そうだ、なぜ師匠は舌打ちをしたのだ？ 映画が嫌ではないのだらう？」

「あんたがもう少し不細工ならって、思ったの」

「なら、その包丁で顔をぐちゃぐちゃにするか？」

「そう言うのは映画の中だけで十分」

それにこの街一の美男子の顔をグチャグチャにしたら、街中の女の子達が泣くだろうと、師匠は笑う。

「師匠も泣くのか？」

むしろ清々する。

そう言う師匠の笑顔は、確かに清々しかった。

私は恐怖映画というのを甘く見ていた。

すさまじく甘く見ていた。

「次どれにする？ 今の奴の続き？ それともエルム街の悪夢いつてみる？」

楽しそうにビデオを選ぶ師匠に、私はもはや息も絶え絶えである。恐怖映画というのは、なんだか、胃と胸に来るのだな……」

「なに、怖いのか？」

「ジェysonさんを甘く見ていた。我が魔剣でも、あのチェインソーに太刀打ちするのは難しいだろう」

「じゃあ、続編行こうか」

人の話を全く聞いていない。

と言うか聞く気もなかったのだろう。尋ねる前から、師匠はジェysonさんに顔がかかれたビデオを持っていた。

「師匠は恐怖映画が好きなのか？」

「スカツとするじゃない、いけ好かないイケメンやチアリーダーがスタスタにされるのって」

「ちありーだー？」

「高校で幅をきかせている女の子達よ」

「強いのか？」

「ある意味ね。高校では、胸が大きくて、ポンポン振りながらスポーツ部の連中とエッチしてると最強になれるの」

「それだけでいい顔ができるのか？ 高校とは変わっているな」

「でも、あんだだって胸が大きくて可愛い子が好きでしょう？」

とんでもない。

「そう言う女子と一緒にいるとジェysonさんに狙われるのだろうか？ 絶対に嫌だ」

私が真面目に力説すれば、師匠は笑いながら私の横に座る。

それから師匠はリモコンという遠隔操作装置で恐怖映画をスタートさせる。

恐怖の再来である。

「師匠」

「ん？」

「手、握っても良いか？」

「あなた、本当に魔王なの？」

「魔王だって、勝てないものはある」

伝説の勇者とジェイソンさん。

この二人の前では、魔王なんてただのゴミだ。

特にジェイソンさん、彼は本当に怖い。

Another Episode 2

「今は非常時なのよ！非常時だからきつ

Episode 20 . 5話 別視点です。

気がつけば、手を握られるところか抱え込まれていた。

画面の中では殺人鬼と対峙した女子が悲鳴を上げているが、悲鳴を上げたいのはこちらである。

ホラー映画が苦手という馬鹿っぽい魔王は、クッションの変わりに私を抱え、私の肩から目だけを出して映画を凝視している。

怖いなら見なければいいのに、やはり興味はあるらしい。

でもこの体勢は、この体勢は違う意味で心臓に悪い。

「子どもじゃないんだから」

「こうしていないと怖い」

そう言って、魔王は後ろから私の体をギョツと抱きしめる。

それどころか、回された手に魔剣なんぞを持っている。

本当に子どもだ。でも密着している魔王の体は無駄にたくましく、嫌でも彼が年上の男であることを感じさせる。

殴り倒したい。

殴り倒したいが、ほんの少しだけ、ほんの少しだけこのままでも良いと思ってしまうたのも事実だ。

「師匠は怖くないのか？」

耳元でささやかれた言葉を甘く感じてしまうのも、きっと部屋を暗くして映画なんて物を見ている所為だ。

そして魔王ほどではないが、映画のシーンは殺人鬼の恐怖を、これでもかと言うほどに演出してやる。

「そんな訳ないでしょう」

いつもの調子で言ってしまった直後、画面一杯に殺人鬼の姿が映った。

殺人鬼は怖くない。でも驚かせる演出に私は弱いのだ。

思わず魔王の腕の中で、彼の胸に縋り付いてしまった。そんな自分の行動に気付いて、私はパニックになる。

今は非常時なのよ！非常時だからきつと何をしても許されるわよ！  
例え相手が赤の他人でも、魔王でも、殺人鬼が飛び出してきたら  
普通は飛びつくはず。

今更のように自分に言い訳を重ねて、私は魔王の腕をギュッと掴  
んだ。

『非常時、確かに非常時ですなこれは』

いつの間にか、考えが口に出していたらしい。

側の魔剣がそう言って、にたりと笑った……気がした。



前々から気になっていたことがひとつある。

それは、店のカウンターの上に飾られた1枚の写真という絵画だ。今日もそれをじっと眺めていると、師匠が私の横に並んだ。

「あなた、これよく見てるわよね」

「師匠が、師匠に見えないから不思議なのだ」

写真には大人の男達に囲まれて笑っている師匠が写っている。その笑顔は今よりもずっと明るくて、何故だかそれを見ているとドキドキする。

「これ、父さんが生きてたときに撮った集合写真なの。周りにはのは、当時の従業員よ」

「前は人が沢山いたのだな」

「まあね」

そう言う師匠は凄く寂しそうで、それを見ているこちらまで何故だか切なくなってきた。

「父さんが死んでからお客さんも減っちゃって……だからみんな、やめちゃったの」

「師匠は、みんなに戻ってきて欲しいのか？」

「寂しいのは確かだけど、みんなの生活を支えるほどの稼ぎはないもの。だから無責任に帰ってきて何て言えない」

写真を見上げる師匠の顔は、写真の中の師匠より辛そうに見えた。

師匠は年頃の娘にもかかわらず、責任感が強い。

だからこそこうしてダイナーを経営出来ているのだろう

けどそれは、何かとても大切な物と引き替えに得た物なのかも知れない。

例えば私が、死と引き替えにここに来たように。

「師匠はもう少し素直になっても良いと思う」

「何よ突然」

「私は、写真の中の師匠の方が好きだ」

苦労や我慢で笑顔を曇らせるには、師匠はまだ若い。

「だからまた、こうやって笑ってくれ。辛い時や苦しい時は、私が側にいるから」

私の言葉に、師匠は突然手で顔を覆うと、トイレに駆け込んでしまった。

また何か失礼なことを言ったのかと思い、慌てて女子トイレの扉に縋り付けば、師匠がドア越しに五月蠅いと怒鳴る。

「もしかして腹が痛いのか？ 下しているのか？」

尋ねた次の瞬間、内側から思い切り開かれた扉が鼻に激突した。

あまりの痛みにしゃがみ込むと、トイレから出てきた師匠に殴られた。3回も。

「もう少しデリカシーを持って！」

「デリバリーが何かよくわからないが、努力する」

鼻を押さえる私の横を、師匠が早足で通り過ぎていく。その目が赤くはれていた所以我は慌てて師匠に縋り付いたが、結局その場でもう一度殴られ、それ以上の言葉は重ねられなかった。

けれどその日から、ほんの少しだけ師匠の笑顔が写真の中の笑顔に近くなった気がする。

## Episode 2 アイコンタクト

「最近、お前さん達息が合ってきたよな」

ある夜、ダイナーを訪れたステイブが私を呼び止めそんなことを言った。

「でもまだ、よく怒られる」

それに最近、仕事中はあまり言葉を交わさなくなった。

「それはな、言葉が無くともお互いが繋がってるからだ」

「どういう意味だ？」

「言葉だけじゃなく、人間ってのは目線でも会話が出るんだぜ」  
言われてみれば、言葉数は少なくとも師匠と目が合う事は多い気がする。

確かに、目が合うことで師匠の考えが読めることも沢山あった。  
皿を片づけろ、水を運べ、床にモップをかける、トイレ掃除に行つてこい等々、師匠の言いたいことは確かに目を見ればわかる。  
そして師匠も、助けを求める視線を送ればすぐに飛んできてくれる。

私にとって、人と目を合わせることは人を殺す事と同意義だったが、こちらの世界ではそうとも限らないらしい。

「目で会話をするのか、人間は本当に器用だな」

「安心しな、お前さんもちゃんと出来ている」

特に師匠との間ではそれが出来ているらしい。

それが嬉しくて、私はカウンターの向こうの師匠に目を向けた。

すると師匠も、こちらに気付いて顔を上げた。

たしかに、目が合うととても幸せだ。

幸せすぎてちょっと感動していると、ついついリミッターが外れてしまった。

物凄い爆音がして、師匠の前のカウンターから突然火の手が上がった。

「すまない、久しぶりに目に入れたら邪眼ビームが出てしまっ  
た」

それから1週間ほど、師匠は私と目を合わせてくれなくなった。

## Episode 23 お祝い

夏が終わりにさしかかり、ほんの少しだけ気温が下がった秋の初めのある日、店にはたくさんのお客が押し寄せていた。

突然の大混雑に私が慌てている横で、師匠は少しだけ機嫌が良かった。

見れば、客達は皆師匠に綺麗な包装紙で包まれた箱を渡している。箱の大きさは様々だが、それを貰った師匠はとても嬉しそうだった。

そして皆こう言うのだ、「はっぴばすでー」と。

客が帰り、師匠と共に箱を車に積みながら、私は「はっぴばすでー」について尋ねてみた。

「誕生日なの、今日」

「誕生、と言うことは師匠が生まれた日か？」

本当に無知なのねと笑う師匠に、私はようやく事の重大さに気付いた。

今日は師匠が生まれた日なのだ。確かにそれはめでたい。祝うほどめでたい。

「そうか、これは師匠が生まれたことに感謝する人々からの贈り物か」

「誕生日にはプレゼントを贈ったり、ケーキを食べたりして祝うのよ。パーティーとかを開いて盛大に祝う人もいるわね」

だと言うのに、私は今日配膳しかしていない。贈り物もない。

「そんな、この世の終わりみたいな顔しないでよ。教えてなかったし、期待もしてなかったから」

「師匠には世話になっているのに、本当に申し訳ない」

そう思ってポケット漁るが、勿論何もない。

家に帰ったところで、プラモデル以外に私の私物はないし、そもそもあれは師匠の父親の物だ。

「心臓とか眼球なら取り出せるが、年頃の女性はそう言う物を貰って嬉しいか？」

「いや、激しくいらぬ」

「食べたらず不老不死だと言われているぞ」

「いや、激しくいらぬ」

困った。完全に手詰まりである。

そのとき、贈り物に撒かれたリボンに目が行った。やはりこういう物を私も上げたい。

師匠の生まれた日を、私はどうしてもお祝いしたい。

「やはり、これしかあるまい」

私はリボンを抜き取ると、それを自分の頭に結んで師匠の手を取る。

「…もしかして、プレゼントは自分とかアホなこと言おうとしてない？」

「師匠はエスパーか」

「いらぬ」

「眼球も臓物も脳みそも好きにして良いのだぞ」

かつて多くの勇者が奪おうとした魔力の結晶詰め合わせである。大盤振る舞いである。

「我が相棒を貸す。だから好きなどころを持って行ってくれ」

「だから、激しくいらぬ」

「背骨なんてどうだろう。お肌にも良いぞ、きつと」

「……もういい。想像してた展開とも違いすぎるし」

「想像？」

尋ねると、師匠は何故か少し赤くなって私を殴り飛ばす。

「好きにして良いって、内臓取り出して良いとかそう言う事じゃないでしょう普通！」

「じゃあどうすればいい？ 師匠のためだったら何だって差し出すぞ」

私が引き下がる気配を見せないと、師匠は私の頭からリボ

ンを外した。

「好きにして良いって言うなら、五体満足で私の側にいなさい」

「それで良いのか？」

「あとそうね、家に帰ったら私のためにバナナシェイク作ってよ」

「何杯でも作る！ 100杯でも1000杯でも」

「そんないらない」

即答だった。

けれど否定しながらも、バナナシェイクは楽しみにしていると  
言われた。

「師匠、はっぴばすでー」

それを言うなら、ハッピーバースデー。そう告げた師匠に、私は  
ハッピーバースデーと繰り返した。

## Episode 24 癒し系

「お前みたいな癒し系の方が、あの子は好きなのかな」

ある日、店に来たチャリーがそんなことを私に言った。

「いやしけい？どちらかと言えば私は破壊系だと思うが？」

意味がわからないと一蹴された。

「なあ、彼氏じゃないならあの子の好み聞いてきてよ」

「別に構わないぞ」

頷くと、チャリーはペーパーナプキンに師匠に聞く質問事項を

書いた。

早速客が少ない時間に、私は師匠の所へと赴いた。

「師匠、いくつか質問がある」

「なに？」

「好きな男のタイプは」

「魔王以外」

「好みの顔は」

「魔王以外」

「行きたいデートスポットは？」

「デートとか興味ない」

「アメフトとバスケットがどっちが好き？」

「私野球ファン」

「欲しい贈り物は？」

「頭にリボンを巻いた魔王だけはゼツタイに嫌」

「以上だ」

「参考になった？」

「なっただんじやないか？」

翌日、質問の答えを書いたナプキンをチャリーに渡すと、彼はそれを読み、無言のままゴミ箱に捨てた。



## Episode 25 メンバー

いつかはこんな日が来る気がしていた。

「おい、お前！ お前本当は人間じゃないだろう！」

私の正体が、ばれたのである。

それも私の正体を見破った相手は、正義の心を持つ勇者だった。

「白状しろ！ さもないと、お前の正体をボクのママにバラしちゃうからな！」

ただ、勇者としては少し幼い。見たところ、10歳に届くか届かないかくらいの少年だ。

「何故私が人でないと気付いた」

「お前、変な剣にしゃべりかけてるだろう！ あと手も使わずに掃除機とかモップを動かしているのを見た！」

たしかに、私には手をふれずに物を動かす力がある。

かつては、跳んできた矢や弾丸を止めるとか、無数の剣を操り勇者達を細切れにするために使用していた力だが、最近では広い家を効率的に掃除するために使用している。

ちなみに、手を使わないのは怠け心があるからではない。全ては、手を動かすよりも効率的で早いからである。大事なことからもう一度繰り返し返すが、怠け心から力を乱用しているわけではない。

だがまさか、それを見られていたとは思わなかった。これからは、掃除の前にはカーテンを閉めねばなるまい。

「わかった認めよう。君のママとやらがどれほどの猛者かはわからないが、師匠に迷惑をかけるわけにはいかないからな」

「じゃあやっぱり人間じゃないのか」

「さよう、私は魔王だ」

別の世界から来たと告げると、小さな勇者は恐れるどころか感動の眼差しを私へと向ける。

「すげえ、ゲームの登場人物みたいだ」

「ゲーむ？」

「魔王なのにゲームもしたことないのかよ」

ないとこたえると、小さな勇者は私の姿をまじまじと見る。

「今日は暇なんだ、何だったらお前俺の家に来るか？」

一瞬罷かとも思ったが、ゲームとやらには非常に心引かれる物がある。

それにもしかしたら、私がこの世界に来た理由がわかるかも知れない。

運良く今日はダイナーも休み。私は師匠に置き手紙を残すと、小さな勇者の家に向かうことにした。

小さな勇者の家は、師匠の家の正面だった。

なるほど、たしかにここからなら、師匠の家のリビングが丸見えである。

だが小さな勇者の親は仕事で帰りが毎晩遅いらしく、私の正体を知っているのは彼だけのようだ。

それに胸をホツとまで下ろしていると、小さな勇者がゲームとやらをテレビに繋いだ。

映画に似ているが、ゲームとやらを使うとテレビの中の人を自由に操作ができるらしい。

なるほど、確かに画面の中に広がる世界は私の世界に近いようだ。だが残念ながら似ているだけで同じではない。どうやら私の求める情報は得られそうもなかった。

「このゲーム、自分で好きなように勇者が作れるんだぜ」

とはいえ小さな勇者が見せてくれるゲームとやらは非常に興味深い。

それに感動していると小さな勇者は私に似た勇者を作ってくれた。

「私は魔王だが、勇者になれるのか？」

「闇の魔法使いだっただけど、改心して勇者の仲間になったことにするよ」

外見まで私に似せて作られた闇の魔法使いは、小さな勇者の手に

よって正義の心を植え付けられていく。

「なかなか格好良くできたな。俺のパーティメンバーにいれよう」

「勇者の仲間になる日がこようとはな」

「さあ、こつからは魔王が自分で操作するんだぞ。アクションRPGだからな！」

アクションRPGについて理解出来ないうちに、私の分身は小さな魔物にタコ殴りにされていた。

「…強そうなのは見た目だけだな」

まあレベルが低いから仕方がないかと小さな勇者に言われ、私はちよつと悔しかった。

悔しさのあまり適当にボタンを押していたら、物凄く強い魔法が出た。

「やれば出来るじゃん」

「一応魔王だからな」

でもその後、私の分身は魔物に倒され、最後は小さな勇者に足を引っ張るなど怒られた。

現実の世界と同じく、テレビの中の世界でも修行は必要なようだ。

## Episode 26 ツボ

「いらないって言ってるでしょう！」

師匠の怒鳴り声で目が覚めたのは、とある休日の朝だった。

驚いて玄関に向かえば、見ず知らずの男が玄関先でツボを片手に師匠と口論をしている。

「いまならたった100ドルですよ！ 100ドルであなたの家に幸運が舞い込むんですよ」

「訪問販売お断りつてステッカー見えなかったわけ！」

「お願いです、一個でも売らないとクビになってしまっんです！」

ツボの男が師匠に抱きつきなにやら懇願している。危険な男には見えなかったが、執拗に師匠にふれる男になにやら不快感を覚え、気がつけば、私は師匠と男の間に割っていた。

「師匠はいらないとやっている。男なら、ここは引き下がるべきだし、しかし！」

往生際の悪いツボの男、仕方なく私は男からツボを奪う。

見れば、確かにそのツボは男が言うように幸運を呼び寄せる力があるようだ。

「金が必要なら、このツボを持ってメインストリートで大道芸でもしろ！」

幸運を引き寄せる効果をほんの少し大きくし、ツボを突き返せば男は渋々家を出て行く。

「あんだ、意外とキツイのね」

でも助かったわと師匠は私に礼を言う。

「アレがああ男のためだ。あんな高価な物を100ドルで手放すなんて、大金をどぶに捨てるようなものだからな」

「どういう意味……」

「あのツボはどうやら私同様異世界から来た代物のようだった。幸運を呼ぶというのはあながち間違っていないのだ」

「…ちなみに、どれくらいの幸運？」

「億万長者くらいにはなれるんじゃないか？」

そんなまさかと笑う師匠。

だがそれから一週間後、ツボ男と意外な所で再会することになった。

『この方が、宝くじで2億3千ドルを引き当てたマイクさんです！』  
ツボ男がいたのはTVの中。

『なんと、マイクさんはこれを買ったのではなく貰ったとのことです！』

そのときの話を伺いましょうとTVの中のリポーターを向けると、ツボ男は笑顔を向ける。

『僕は壺を売る訪問販売の営業だったんですが、その日は一個も売れなかったんです。人目につく大通りで大道芸でもやれば客が来るかなって思ってた……、それでやけばちでジャグリングをしてたら25セントと一緒にこの宝くじを誰かがツボの中に入れてくれたんです！』

結局壺は売れなかったんですけど、まさかこんな幸運に巡り会えるなんて。

そう言っただけでピースをするツボ男。

「この人、あ那时的…」

横で一緒にTVを見ていた師匠の言葉に私は頷いた。

「だから言っただろう。幸運を呼ぶツボだよ」

私が得意げに言った直後、師匠は何故だか私を殴り飛ばした。

その上、私が億万長者になれるところだったのにと悔しがっている。

「だって師匠がいらないうって……」

「どう考えても普通は偽物でしょう！」

どこまで馬鹿なんだと怒鳴られた。

訪問販売には注意すること。

私はまたひとつ、こちらの世界での教訓を得た。

## Episode 27 ちびっ子ギャング

「師匠見てくれ！」

そう言って私が胸のバッジを誇らしげに指さしたというのに、師匠はちらりと目を向けただけだった。

「なんで瓶の蓋なんて胸につけてんの」

「違う、これはギャング団の証だ！」

私が言えば、師匠は虚空を見つめ、やる気のない声で「ああ」と答える。

「そう言えば近所の悪ガキ達が付けてるわね」

そう言って師匠がバッジを指で弾くと、バッジは小気味いい音を立てて床へと落ちる。

凄く格好いいのだが、蓋の裏にセロテープで安全ピンを貼り付けているため落ちやすいのが難点だ。

「ってかあんだ、いつの間にガキンチョ達と仲良くなったの？」

「仲が良いのとはちょっと違うな。私はリーダーのアルファに脅迫されているのだ」

「脅迫って、あの子10歳くらいでしょう」

「魔王であることが先日ばれてしまっただけ。それをアルファのママに黙っていて貰う変わりに、彼らの仕事に付き合っているのだ」

「情けない……ってか仕事って？」

「近所の犬の首輪を外したり、意地悪おじさんの家の玄関マットを隠したり、みなでお菓子を食べたり、ゲームをしたりすることだ」

「それ、仕事じゃなくて遊びっていわない？」

「でもみんな真剣だぞ」

むろん私もだと告げると、師匠は床に落ちたバッジを拾い上げる。

「あんたは良いわね、楽しそうで」

「私も、脅迫される事がこんなに楽しいとは思わなかった」

私が笑顔を向けると、師匠は壊れたバッジからセロテープをはが

し、粘着力の強いテープで貼り直してくれた。

あまりに手際が良いので驚いていると、師匠は私に苦笑をむけた。  
「私も昔は、ギャング団の一員だったの」

その後師匠は、ガレージの奥から大量のバッジを持ってきてくれた。古いが格好いいデザインのバッジに私が感動していると、師匠はその中から私好みのバッジを取り上げ、胸に付けてくれた。

これを見せたら、人気者になれるわよ。

師匠に言われるがまま、翌日アルファにバッジを見せると彼は大層感動していた。

「これどうしたんだ！」

「うちの師匠に貰ったんだ」

「そうか、どこかで見覚えがあると思ったらあの姉ちゃん伝説のボスだ！」

「ぼす？」

「俺達がやってるイタズラの殆どは、ボスが考えた物なんだぜ」  
前々から大物だとは思っていたが、やはり師匠はただ者ではないようだ。

「ボスの彼氏なら、これからは脅迫なんて出来ないな」

「彼氏ではないぞ」

「とか言っつていつもくっついてるじゃん」

確かにホラー映画を見るときはくっついてる。

あと見た後は一人では眠れないので師匠と一緒に寝ている。

「くつつくのが彼氏なら、確かに彼氏なのかも知れない」

「じゃあ今日からは対等の仲間だ」

差し出された手を握り、私は思わず笑みをこぼした。

脅迫されるのも悪くないが、対等になるのはもっと悪くないと思っ  
た。



## Episode 28 得意料理

今日もハンバーガーを食べていると、師匠が哀れむような目を私に向けた。

「あんたさ、毎日毎日ハンバーガーばかり食べててあきない？」

「ポテトも食べているぞ」

それに師匠から貰った血も飲んでいると答えれば、師匠は呆れた顔をする。

「売れ残ったハンバーガー食べてくれるのは嬉しいけど、やっぱり体に良くないわよ。肥満になるし」

「ひまん？」

「太るって事？」

「大丈夫だ、最近は家から店まで走っているしな」

「何キロあると思ってるのよ……」

「魔王の脚力にかかれば、あっという間だ」

だから肥満も問題ないと言ったが、やはり師匠は不満そうだった。

「あんたがもし、他のものも食べたいって言うなら作ってあげてもいいのよ。一応ハンバーガー以外にも、得意料理あるし」

「ポテト？」

「ジャンクフード以外も作れるわよ!!」

叩かれた頭をさすりながら、私はハンバーガー以外の料理について考える。

「ピザとホットドッグもジャンクフードか？」

「そうよ」

「ポテトチップは？」

「アレはお菓子」

即答され、私は困ってしまった。

実を言うと、私はあまり料理の名を知らない。

この世界に来る前は食事を取る習慣がなかった上に、こちらに来

てからはハンバーガーに夢中になりすぎて、他の物に興味がわかなかつたのだ。

それを素直に告げると、先ほどは叩いた頭を、師匠が優しく撫でてくれる。

「じゃあこれから見付けていきましょう」

得意料理は多いのよと微笑まされると、何故だか胸の奥がツンと痛くなる。

「師匠は優しいな」

「料理するのが好きなだけよ」

「たしかに、師匠は厨房に立っていると幸せそうだ」

私が微笑むと、何故だか師匠は私から顔をそらす。

「最近、他にも楽しいことあるし……」

「歌っているときか？」

「餌付けしている時よ」

家畜でも飼っているのかと聞いたら、大きな犬がいるという。

魔王の目にも映らない犬とは、魔獣かなにかだろうか？

**Episode 28 得意料理（後書き）**

お題の提供は『6倍数の御題様』

<http://www3.tio/6title>

## Episode 29 打ち合わせ

「明日、一人で留守番しててくれる？」

「構わないが、どこかに行くのか？」

「来週また高校でパーティーがあつて、そこで歌うことになったの」  
だから明日は打ち合わせだという師匠はとても嬉しそうで、私はすぐに頷いた。

翌日は店の休業日だったので、師匠が出かけた後、私は師匠が作ってくれたハンバーガーを食べながら夜を過ごしていた。

前に師匠はこの家のことを無駄に広いと言っていたが、確かに夜一人でいるとその言葉の意味がわかる。

家の中は酷く暗く、そして静かだった。

もちろん私が住んでいた城の方が更に闇が深く、無音になるときも多かったが、あのころはそれを気にしたことはなかった。

なのに今、一人であることが何故だか落ち着かない。

ホラー映画を見たわけでもないのに、沈黙と闇が恐ろしいとまで思ってしまう。

ジェイソンさんがでてくるならまだいい。

だがこの闇が私の世界の闇と繋がり、来たときのように突然元の世界に戻されたらと思うと、たまらなく恐ろしくなったのだ。

人々に闇と恐怖を植え付ける為生み出された私が、逆に闇を恐れるなどかつては考えられなかった。

けれどハンバーガーも師匠もない生活に、今の私はきつと耐えられない。

そう思ううちに恐怖は広がり続けたが、もちろん回避の仕方など知るよしもなかった。

そんな時、私の脳裏によぎったのは師匠の言葉だった。

『子どもの頃、暗闇が怖くなる度クローゼットに隠れてたの。毛布と懐中電灯を持って』

残念ながら懐中電灯は見あたらなかつたので、私はハンバーガーを片手に階段下にあるクローゼットの中に転がり込んだ。

だがしかし、クローゼットは想像以上に狭かつた。そしてやっぱり暗い。

逃げ込んだはずが逆に追いつめられたような錯覚に陥り、それがホラー映画を連想させ、むしろ非常に恐怖感を煽られる。

出よう。

すぐに出よう。

そう思って扉に手をかけると、何故だかノブが回らなかつた。どうやら慌てて駆け込んだ拍子に扉が壊れてしまったらしい。

叩いても蹴つてもドアはびくともしなかつた。

仕方なく我が魔剣で叩ききろうかと思つたが、狭いクローゼットの中では上手く身動きが取れない。これは確実に扉以外の物を破壊してしまう気がする。

そうしたら師匠は絶対に怒る。そして暗闇と師匠の怒りを比べた場合、後者の方が正直恐ろしい。

仕方なく、私は師匠が帰ってくるまでクローゼットの中で膝を抱えることになった。

「……あんだ、何でそんなに馬鹿なの？」

帰宅した師匠が放つた問いには、答えられなかつた。

**Episode 29 打ち合わせ（後書き）**

お題の提供は『6倍数の御題様』

<http://www3.tio/6title>

## Episode 30 バランス

目の前に出された本日の夕食を、私は直視出来なかった。

「師匠…」

「なに？」

「今日も、サラダなのか」

「そうよ」

「……師匠を怒らせるような事を何かしただろうか？」

「ここ3日ほど、私は師匠からハンバーガー禁止令を言い渡されている。」

「やっぱり、栄養のバランスが偏るのは良くないと思って」

「サラダばかりでも偏るのでは？」

「でもあなた、長い間ハンバーガー漬けだったでしょう？ だからバランス取るうと思って」

「健康に異常はない」

「私はあなたのこと心配してるのよ。もし何かあったら、嫌だし…」

…

背けられた顔に、私は慌ててサラダを引き寄せた。

ハンバーガーは食べたい。食べたいが、師匠が私の身を気遣ってくれているのに、我が儘を言えるはずがない。

「確かに師匠の言うとおりだ。もう少し、我慢する」

レタスが山盛りのボールにフォークを突き立てて、私はそれを食していく。

「おかわりも、あるわよ」

いつの間にか、私の前に置かれたサラダが5つに増えていた。

「これも体のためだ、貰おう」

「うん、どんどん食べてね」

「でもさすがに同じ味だと飽きてくるな」

「塩かければいいじゃない、塩」

そう言っ て師匠は、サラダに大量の塩をふりかける。

「師匠、塩分の取り過ぎも体に悪いのではなかったか？」

「その分葉っぱ食べればチャラよ」

「そう言う物か」

「そう言う物よ。だからもっと食べて」

気がつけば、サラダが5つから9つに増えていた。

「しかし師匠、こんなにレタスを消費してしまったら、店に出す分が無くなってしまわないか？」

「そこは気にしないで」

そう言えば、冷蔵庫の中のレタスの量がいつもより多かった気がする。

いつもの倍かそれ以上の量に発注ミスかと思ったが、どうやら師匠は私をためを思っ て、いつもより多く頼んでくれていたらしい。

「師匠は、本当に優しいな」

「良いから黙っ て食べて、何か胸が痛い」

「私も感動で胸が痛い」

「黙っ て」

「うむ」

この日だけで、私は一生分のサラダを食べた気がする。



**E p i s o d e 3 0 バランス（後書き）**

お題の提供は『6倍数の御題様』

<http://www3.tio/6title>

Another Episode 3

「可哀想な子、みたいな目で見られるか」

Episode 30 . 5話 別視点です。

「今日、ため息多いよね」

そう指摘されたのは、化学の時間のことだった。

指摘してきたのは、実験のパートナーになっている友人のチャーリーだ。

「何でもない」

「今日だけで38回だよ」

「何で分かるのよ。っていうか、いつから見てたわけ？」

「……可哀想な子、みたいな目で見られるから話したくない」

既に私の中での彼は魔王と同じ可哀想で頭の弱い子ポジションだが、それを言うより更に可哀想な顔をするので私は黙っていた。

「それで、どうしたの？」

「魔王のことだね」

「喧嘩でもした？」

「……あいつに、ひどい事してるの」

「俺だったら話、聞くけど」

思わず告白すると、実験もそっこのけで彼は私に顔を向けた。

「実はあいつに、ここ5日間レタスしか食べさせてないの」

「……予想外な上に予想以上に酷いな」

「私、先週発注ミスしちゃって……。いつもの3倍の量のレタスが届いちゃって……」

「処理しきれなくて、体のためとか言っつて、魔王を毎日レタス漬けにしちゃったの」

今朝もパンにレタスだけ挟んだサンドイッチ置いて来たと言われれば、チャーリーはさすがに苦笑いである。

「私、凄く酷い事してるわよね」

「俺だったら発狂してるかな……」

「普通そうよね。っていうか気付くわよね！ 大量のレタスを実際  
見ているわけだし」

「…あり得ないけど、あいつ抜けてるからなあ」

「それどころか、自分の体の心配してくれてるなんて！ とか感動  
までしてる」

「むしろこっちの心臓が痛いなそれは」

「やっぱり打ち明けるべきかな。けどさすがに今回は怒ると思うの  
よ、怒って見放されると思うのよ」

「思わずごぼせば、チャーリーは唸る。」

「言つべきだと思うよ。もし見放されても、君には俺が……」

チャーリーの言葉の途中だったが、先生がこれ見よがしな咳をし  
たので話を中断させることにした。

「ごめん、こんな話して」

私の言葉に、やっぱりチャーリーは可哀想な顔をした。

その日の店が終わったあと、私は6日ぶりに魔王にハンバーガー  
を作ってあげた。

ポテトも付けてあげたら、泣かれた。

「やっぱり、サラダだけってのもね……」

最初はそう言って誤魔化したのが、心の底から美味そうにハンバー  
ガーを食べる魔王を見ていると、さすがに罪悪感がわいてくる。

「魔王、あのね……」

意を決して告白しようとしたとき、魔王がはっと顔を上げた。

思わず身構えた私とは対照的に、彼はいつもの調子である。

「そういえば、さっき業者から電話があつた事を伝え忘れていた。  
先週、レタスを多く納品してしまつたらしい」

「私のミスじゃなかったのか、よかった……」

「え?」

「いや、何でもない」

ミスは私の所為でなくても、魔王をレタス漬けにした事実は変わらないので、手放しでは喜べない。

「余っているなら回収すると言われたが、断ってしまったのだ。殆ど残っていないかったから」

「うっ」

「も、もしかして回収するべきだったか？ すまない、もっと早く確認すべきだった……」

そう言っただけで魔王に、もう一度私は覚悟を決める。

だがとことん間が悪い魔王は、またしてもハツと顔を上げた。

なぜか、その顔は先ほどよりも輝いている。

「そうだ！ もし残っているなら私が食すぞ、余らせては勿体ないし」

もう、限界だった。

「ごめん！」

ついに、私は洗いざらい打ち明けた。

今度こそさすがの魔王も激怒するだろうが、あまりに純粋な彼に、これ以上嘘は付けなかった。

「……本当にごめん、あなたの発注ミスには文句言ってたクセに、自分の時は隠すなんて最低だよ」

その上レタスの処理は、全て彼にさせていたのである。

「……ごめん」

私も、今回ばかりは深く頭を下げる。

だがそんな私の頬に、突然魔王の手が伸びた。

「師匠の役に立てたなら、むしろ私は嬉しいぞ」

顎にふれた魔王の指が、私の顔を上へと持ち上げる。

「だから謝らないでくれ。今の私は師匠の物だ、師匠の好きなように使えばいい」

「あ、あなたは物じゃないよ」

私が言つと、魔王は不思議な物を見るような顔で、小首をかしげている。

「本当に物扱いしてたら、問答無用でレタスかじらせてたって言うか……。嘘ついたのは、後ろめたかったのもあるけど、あんたに嫌われたら嫌だったのもあって……」

師匠は凄く凄くと言われるのが嬉しくて、だから下手な部分を見せたくなかった。

そうこぼせば、魔王はまるで子どもをあやすように私の頭を軽く撫でた。

「師匠にも、可愛い所があるのだな」

思わず絶句するが、魔王は笑うばかりだ。

きつと他意はない。他意はないが、そんな優しげな声と笑みで言われると、嫌でも顔が火照る。

「無理矢理、褒めなくてもいいわよ」

「本音だぞ」

多分その通りなのだろう。私とは違い、彼は嘘をつかない。

「……ごめんね」

「もう良いと言っている。それに、謝罪よりも欲しい物があるんだが」

そう言っただけに近づいた顔に胸が跳ね上がる。

まさかそんなと体を硬くして、私は深く深く、後悔することになる。

「ハンバーガーがもう一個食べたい」

「……ですよ」

「やっぱりだめか？ もう一個は欲張りすぎか？」

私の落胆に、魔王は何を勘違いしたか慌て出す。

「欲しいなら2個でも3個でも焼いてあげるわよ」

「し、師匠が優しい」

「今のくだりの後で、良くそんなこと言えるわね」

「だって3個だぞ」

その言葉と魔王の真顔を見ると、3個どころから5個くらい作ってあげたくなる。

「すぐ作るから待ってて」

「ならサラダを食べながら待っている。レタスがまだ残っていたし嫌味でも皮肉でもなく、そう言える魔王がほんの少しだけ羨ましかった。」

## Episode 31 変身

朝目が覚めると、師匠が猫に変身していた。

「そんなに凝視されると、恥ずかしいんですけど」

正確には変身しかけていた、と言うべきだろう。

顔や体はいつもの師匠だが、ネコの耳と尻尾が生えていたのである。

「知らず知らずのうちに、獣化の魔法を使ってしまったのかと考えていたのだ」

「そんな便利な魔法があるなら言いなさいよ。わざわざ買わなくて良かったじゃない」

そう言っただけで師匠がネコの耳に手をかけると、それはいとも簡単に取れてしまう。

啞然とする私の中で、師匠は楽しそうに笑っていた。

「これ、ハロウィン用の仮装衣装なの」

「はるういん？」

「一年に一度、死者が家を訪ねる日をそう呼ぶの。そして尋ねてくる死者から身を守るために、自分たちもお化けとか怪物とか、怖い仮装をするの」

「死者と言うことは、ジェイソンさんも来るのだろうか」

「そうね、今日は街にたくさんいるんじゃないかしら」

意地悪く笑う師匠に、今日は一日家にいようと決意する。

だがそんな私の決意は、師匠の一言の前に崩壊した。

「ちなみに、今夜は高校のパーティで歌うの。だから、家いるなら留守番ね、一人で」

「じえ、ジェイソンさんが尋ねてきたら困る…」

思わず縋り付いた私に、師匠は安心しなさいと笑った。

「由来は怖いけど、ハロウィンって楽しい物よ。みんな仮装して騒いだり、子どもは菓子をもらいに家々を練り歩くの」



「お菓子が貰えるのか」

あなたはそつちに反応するかと師匠に呆れられたが、何だかんだ言いながら、師匠はお菓子を貰うための呪文を教えてください。

「あんた顔が良いから、それ言えば絶対みんなくれるわよ」

「でも仮装していいない」

「今からでも買いに行く？」

せつかくだしと財布を持ち出した師匠に、私は妙案を思いつく。

「師匠にこれ以上の借りは作れない。それに、恐ろしい格好ならばあてがある」

師匠の財布を棚に戻しながら、私は久しぶりに、封じていた魔力を解放する。

「本当はあまり見せたくなかったのだが、お菓子のためなら仕方がない」

魔力を使い、私は人の姿を取り払う。

赤き眼は血の如く、鋭い牙は獣の如く、長き尾は蛇の如く、黒き翼は竜の如く。

吟遊詩人達がそう称した私のもう一つの姿、それを私はこの世界で始めて解放した。

この姿を見た者は例外なく、恐怖におののき私を嫌悪した。

だから師匠にも本当は見せたくなかったのだが、お菓子のためなので仕方がない。

「これで、いいだろうか」

恐る恐る師匠を伺うと、彼女は言葉を失った顔で私を見上げ、そして…。

「…悪くないけど、洋服はどうにかしないと駄目ね」

そう言っつて、私の着ていたパジャマを引っ張った。

「しまった…、翼と尻尾の所為で穴が空いてしまった」

「やっぱり貫通するんだ…。格好いいけど、不便ねコレ」

「かつこいい、か？」

「うん。パジャマじゃなきゃ」

「怖くはないのか？」

「パジャマだし」

「でも、パジャマを脱いだから怖いだろう」

「初登場でパジャマだから、脱いだところで笑っちゃうと思うわ」

その言葉に、私は安心した。

「でもそうね、これだけ派手だと普通の服じゃあわないわよね」

そう言っつて、師匠は倉庫から亡き父上の仮装衣装を色々引っ張り出してくれた。

「これだつたら栄えるかも。角とか翼とかある意味宇宙人っぽいし」

そう言っつて師匠が着せてくれたのは、先日見た宇宙活劇映画に出てきた騎士が纏う衣装である。

「ジエダイっつて言うより、シスっばいけどまあいいか」

翼用に穴を開けるときは渋っていたが、衣装を纏った私の格好に師匠はご満悦だった。

その時点ですでに驚いたが、もっと驚いたのは街に出てからだ。

師匠だけでなく、アルファやチャーリーなどの友人達。そして街に行く人々までもが、私の姿を恐れるどころか喜んでくれたのだ。

写真をせがまれたり、お菓子の呪文を言っただけなのにキスマでされた。主に年配のご婦人達からだが。

向けられた笑顔と腕いっぱいのお菓子は夢のようで、私は生まれて初めて、この姿を持つことに喜びを感じた。

こんな素敵な気分になれるならハロウィンも悪くない。

「あ、魔王見て！ ジェysonに仮装した子どもが5人もいる！」

前言撤回だ。やっぱりハロウィンは恐ろしい。

## Episode 32 ワイングラス

「そう言えば、あんたってお酒飲めるの？」

ハロウインの翌日、師匠がそう言い出したのには訳がある。

昨日お菓子の呪文を使った際、お菓子の変わりにお酒や食べ物を持ってきてくれた人がいたのである。

隣に住む、美しき老婦人ミシエルさんである。

「これ、高いのよ！ でもいつも庭のお手入れをしてくれるお礼に、今日は奮発しちゃう」

と私にくれた古いワイン。それを師匠は昨日からやけに気にしていた。

「酒をたしなんだことはないな」

「でもあんた、最初にワイン注文してたじゃない」

「我が城にあったワインは酒ではないのだ。赤い色は同じだが、中身は別物だ」

「もしかしてそのワイン、吸血鬼映画に出てくるようなワインだったりするわけ？」

「うむ、人間の血液だ」

「あんたって、ジェイソン怖がるくせに結構ホラーな事ばろつと言っわね」

「ワインは怖くないだろう。チェーンソーも振りまわたりしない」

私の言葉に師匠は何かを諦めた顔をした。

「怖くないなら、せっかくだし飲んでみたら？」

「ちなみにどんな味なの？」

「未成年にそう言うこと聞くわけ？」

「酒癖が悪いとアルファが言っていたので、良くたしなんているのかと」

「あのガキ、いつかしめる」

そう言いつつ、ちゃっかりワイン用のグラスを二つ持ってくる辺

リアルファは嘘つきではないらしい。

「一口だけだもん」

と言いつつ二つのグラスに同量のワインを注ぎ、私達はグラスを打ち合わせた。

渋く、そして穏やかな熱をもたらすその飲み物は、美味と不快の間を歩き来する不思議な物だった。

同じブドウから作られた物なら、ブドウジュースの方が好みだが残すのも失礼なので、私は残りのワインを一気にあおる。

そしてその直後、私の意識は暗転した。

目が覚めると、そこは荒野の真ん中だった。

師匠の家にいたはずなのに、目の前にはROUTE66と書かれた看板が夕日をバックに佇んでいる。

何が起こったのかと辺りを見回せば、私の横では師匠が膝を抱えて座り込んでいた。

「師匠、なぜ私達は家を出ているのだ？ 時間も、かなりたっているようだが…」

「…自分で思い出せ、このどすけべ魔王」

なぜか、師匠は耳を夕日色に染めながら静かに怒っていた。

それ以上声をかけると殴られそうだったので、どすけべとは何だろうかと考えつつ、私は腕の時計を眺める。

そろそろ店の開店時間だったが、店に行くための乗り物は側にな

い。  
仕方なく、先日見た映画を真似て、道に向けて親指を突き出してみる。

けれど道を走る車のヘッドライトは見えず、結局そのあと3時間ほど私達はその場に座っていた。

その翌日、師匠が家中の酒をゴミに出した。

酒は体に悪いらしいので、良い心がけだと師匠を褒めたら酷く殴られた。

どすけべの意味は、未だ教えてもらっていない。

## Episode 33 センス

私はよく、師匠に服装が酷いと怒られる。

と言っても元々は全て、師匠の亡き父親の服なのだが。

「あんたって本当に服のセンス最悪よね。何でよりにもよってそれを選ぶわけ？」

そう言っつて、太陽とヤシの木とイルカが笑っているTシャツを師匠はなじる。

割と気に入っていたのだが、それを言っつと更に怒りそうなので、ビリビリにされる前に私はそれを脱いだ。

「今度の週末、お金上げるからチャーターと買い物でも行っつてきたら？ あいつ、服のセンスだけは良いから」

師匠に迫られ、私は早速チャーターに電話をした。

「師匠に、服のセンスだけは良いチャーターと買い物に行けと言われたのだが、週末はあいているだろうか」

長く拘束するのは悪いと思ったので要点だけを伝えた所、電話は一方的にきられた。

返事がなかったのが不安だったので、次の日曜日、私はチャーターを家まで迎えに行くことにした。

待ち合わせの時間を決めていなかったなので、仕方なく玄関前で3時間ほど待っている、物凄く不機嫌な顔のチャーターが家から出てくる。

「お前はストーカーか！」

「違う、チャーターが出てくるのを待っつていただけだ」

「……約束はしてない」

「でも電話をした」

「アレが人に者を頼む態度か！」

「駄目なのか？」

それは大変だと思い、私の至らぬ点を聞こうとしたが、チャーター

「の眉間の皺が更に深くなっただけだった。」

「服のセンスだけじゃなく、言葉選びのセンスもどうにかしろ。」

「やはり、私は言葉選びのセンスも悪いのか？」

「自覚のないところがまた腹立つ！」

「といいつつも、やっぱりチャーリーは親友だ。」

その日一日かけて買い物に付き合ってくれた上に、長いまま放置していた私の髪をカットまでしてくれたのだ。お陰で、師匠の反応は上々である、これで当分は叱られまい。

「やだ、凄く良いじゃない！」

そう言っただけで私をなで回す師匠に、何故だかチャーリーが落ち込んだ。

「逆にダサダサにしてやれば良かった。」

「ださださ？」

「見るにもたえない格好つて事だよ。」

「チャーリーはそっちの方が良いのか？ それならば、角とか尻尾を出すか。」

「せっかく買った服に穴が空くからやめろ。」

そう言っただけでチャーリーがあまりに落ち込んでいたので、私は師匠に内緒で、彼にタダでシェイクを作った。

「チャーリーが好きな物だけで作ったんだ、飲んでくれ。」

「把握してるのかよ。」

「バナナとバナライースとハチミツとパイナップルだ。さすがにピザとドクターペッパーは入れられなかったが、どれも好物だろう？」

「……こう言うところに女は弱いのか。」

口調はまだ落ち込んでいたが、上目遣いに美味しいと言ってくれたチャーリーの顔は笑顔だった。

その笑顔があんまり爽やかだったので、私は思わず嬉しくなる。

「やっぱり私は、笑っているチャーリーが好きだな。」

そしてそのうれしさを言葉にした所、なぜかチャーリーはシェイクを吹き出した。

その上顔まで赤らめている。

「そう言うのは男に言うな！」

「どうしてだ？ チャーリーのことが好きなのは事実なのに」  
嘘をつくのはあまり好きではないので、私はそう主張した。

だがなぜか、今度は側に来ていた師匠が驚いていた。

そんな師匠を見て、チャーリーも驚いていた。

見つめ合う二人。重い沈黙。

その後、最初に泣き出したのは師匠だった。

「あんた達なんて大っきらい」

何故だか持っていたお盆で私の頭を殴り飛ばし、師匠は厨房へと

駆け込んだ。

「きらいって言われた……きらいって……」

なにやらブツブツ呟くチャーリーの目は死者のようにつつろだった。

しかし魔王である私は復活の魔法を使えないので、その後しばらくチャーリーの目は死んだままだった。



## Episode 34 掛け声

「はけよーいのこたー、とはどういう意味だ？」

「とりあえず人間の言葉で話して」

師匠はそう指摘するが、これは歴とした人間の言葉である。

「テレビで見たのだ、太った男達がそう掛け声をかけながらタックルしているのを」

「太った男…」

「スポーツだとアンソニーが言っていたな」

「誰よアンソニーって」

「テレビの中にいる眼鏡の男だ」

「ああ、今朝のニュース番組の奴ね。アレは日本って国の相撲ってスポーツよ」

「すもう？ にほん？」

「相撲は私も良く知らない。日本って言うのは地球の反対側にある島国よ」

「ちきゅう」

「仕事の合間に、色々教えてあげる」

その日の夜、客が途絶えたダイナーのボックス席に師匠は大きな地図を広げた。

「私達がいるのはここ、アメリカ。相撲があるのはこの小さな島国」

「日本か」

「この地図は平らだけど、私達が住んでいるのは大きな球体の上なの。これを地球って呼ぶのよ」

「丸の上と言うことは、この世界は繋がっているのか」

「そうよ。海や陸で繋がった大きな世界にたくさんの国があって、たくさんの方が住んでいるの」

「それは凄いな」

「でも本当に大きな球体だから、場所によって言葉や文化、住む人

の姿は全然違う」

「私みたいな物もいるのか？」

「それはいいわね」

わかりきっていたことなのに、何故だか落胆してしまつう。

そもそもこの世界は命ある者の世界。私のような存在があるわけがない。

むしろ、私のような者が存在すべきではないのかも知れない。

「でも多種多様な人間が集まつてる星だから、あんたみたいのがいとも全然平気よ」

落胆した私を救ってくれたのは、師匠の微笑みだつた。

まるで私の考えを見透かしたように、大丈夫だと彼女は言ってくれた。

「あんたが思う以上に、色々な人や生き物があるんだから」

「例えばどんな人がいるのだろうか」

「相撲がある日本では、刀つて武器をさした侍とか忍者つて言う暗殺者がいるらしいわ」

「怖いな」

「あと、この前見たホラー映画の……テレビから出てくる女の人は……」

「……私は、日本には行きたくない」

「あと中国はね……」

そこで言葉を切り師匠は少しばかり考え込む。

「……キョンシーがいるわ」

「キョンシーは人間か？」

元人間だから似たような者だと師匠は言う。

「あとルーミアにはドラキュラ伯爵でしょ。フランスはオペラ座の怪人、切り裂きジャックはイギリス人で、エジプトにはミイラ、ブラジルには大アマゾンの半魚人がいるわ」

「……世界は、モンスターだらけだな」

「私世界史とか地理の授業サボつてたから、この手の有名人しかわ

「かないのよね」

「といいつつ師匠は何気なく、我々が住む場所からほど近い州を指さした。」

「あと、テキサスにはレザーフェイスかしら」

「彼のチェーンソーも怖い……。アメリカはすごく危険だな」

「たしかに、モンスターは凄く多いわね。だからほら、あんたがいとも全然大丈夫よ」

「師匠は私を元気づけようとしたようだが、その後も立て続けにモンスターの名前を列挙する師匠に、私は恐怖で身動きが取れなくなつた。」

「結局この日、あまりの恐怖に私は仕事がままならなくなり、翌朝まで師匠の腕を放せなくなつた。」

## Episode 35 いたずらっ子

11月に入ってから、師匠が店にやってくるのが少しだけ遅くなるようになった。

仕込みや準備は私の担当だし、ハンバーガーも一人前のお墨付きを貰ったので問題はないのだが、一人でダイナーに立つのは本当は少し寂しい。

「あれ、今日は一人か？」

ホールにぼつんと立っている私に、そう声をかけたのは久方ぶりに店に来たステイブだ。

相も変わらず薄汚くて幸が薄そうなトラック運転手は、無精髭をなぞりながら、おきまりのカウンター席に腰を下ろす。

「ようやく店に来れたのに、歌姫ちゃんがないなんてついてねえな」

「もうすぐ来ると思うぞ」

「あれか？ まさか彼氏が出来たとか？」

そんなわけはないと言おうとしたが、何故だか持っていた皿を取り落としてしまった。

「まあ最近目に見えて綺麗になったあらなあ。小さい頃は、どっちかって言うと男の子みたいだったのに」

「今もお淑やかではないぞ」

「アレでもある方なんだよ！ 昔はイタズラばかりして、オヤジさんにぶん殴られてた」

たしかにいたずらっ子の元締めアルファが尊敬するくらいだから、彼の言葉に偽りはないのだろう。

けれど今の彼女は、どちらかと言えば子どもを殴って叱る方である。

「あれだな、ガキが出来てすっかりする母親みたいなもんだな」

ガキと言いつつ指をさされ、私は少しだけ落ち込んだ。

「師匠は私の母親なのか」

「恋人になるかと思っただが、他にいるみたいだしな」

家族になれるのは嬉しいが、母親と子どもという関係は何故だかあまり嬉しくなかった。

「恋人が出来たら、子どもはどうすればいいのだろうか」

「まあ難しいよなあ。俺も母親が再婚してからは、実家に顔出さなくなっただしなあ」

「側にいては、いけないのだろうか」

「それぞれだろう。まああの子は、お前を放り出したりやしねえよでも邪魔になったら出て行くと、私は師匠と約束した。」

「ステイプ、もし師匠が結婚したら君の家に泊めて貰うことは可能だろうか」

「この年で野郎と同居とかしたくねえよ」

「男であることが問題なら、魔法で容姿を女に変えるぞ」

「…胸が大きいなら考えても言い」

「希望のサイズを言いたまえ」

「っていうか、こういう女になれるか？」

そう言っただけステイプは、いかがわしい格好の女性が写っている雑誌をつきだしてきた。

「こういう女性が好みなのか？」

「おう、一度で良いからこういう女に膝枕して貰いたい」

「良いだろう、このくびれはなかなか難しそうだが魔王の魔力にかかれればこれくらい…」

早速変身しようと力んだ直後、馴染みの衝撃が頭部を駆け抜ける。

気がつくのと、師匠がお盆を片手に私の背後に立っていた。

「さっきから聞いてりゃ、あんた達本当に馬鹿なんだから」

「デートはいいのかい？」

ステイプが尋ねると、私に喰らわせたのと同じお盆チヨップを師匠は繰り出す。

もはや客と従業員のやり取りではないが、ステイプが嬉しそう

なので良いのだろう。

「彼氏なんていないし、もうすぐテストだから勉強してただけよ」

「じゃあ師匠は結婚しないのか？」

思わず縋り付けば、また馬鹿なことをと師匠が呆れた。

「私は結婚しません。ずーっと一人でこの店をやってくつて決めるんだから」

「一人……」

「あ、あんたはいても良いけど」

その一言に、私は思わず師匠をギュツと抱き寄せた。お陰でお盆チヨップを3回も喰らったが、それでも放せぬほど嬉しかった。

「なんだよ、上手くいってるんじゃないか」

俺の巨乳がと残念がるステイプ。

「巨乳が見たいなら、変身しても良いぞ。私は今最高に機嫌が良い」

「やったら追い出すわよ」

師匠はそう言って、ステイプの雑誌をゴミ箱に捨てた。

久しぶりに変身魔法を使う気でいた私は、少しだけ残念だった。

## Episode 36 とぼける

割れた。

割れてしまった。

よりもよって、師匠が大切にしているコーヒーカップを粉々にしてしまった。

師匠がいないときで良かったと思いつながら破片を集めて、私はすぐさま魔法で元に戻そうと試みる。

だが元に戻り欠けたコップが、突然破裂した。

破片が突き刺さった痛みで私はようやく思い出す。

このカップを割ったのが、もう100回目であることを。

最近あまり使っていないので忘れていたが、私の魔法には回数制限がある。

同じモノを直せるのは99回まで。それ以上は何をどう頑張っても復元は不可能なのだ。

よりもよって、なぜかこのカップばかりとうなだれていると、私の特異な聴覚が師匠の足音を聞き取った。

友達の家で勉強をしようとっていたのにいつもより帰りが早い。

自分の間の悪さを悔やみながら、私は急いで割れた破片を植木鉢の中に隠した。

師匠が帰ってきたのは、植木鉢から飛び退いたのとはほぼ同時だった。

「今日は寒いね、すっかり冷えちゃった」

帰ってきた師匠は機嫌が良さそうだ。

だからこそ怒らせたくないと思い、私は喉まででかかった謝罪の言葉を飲み込む。

もう少し時間を置いて、完璧な嘘を考えよう。

完全なアリバイをつくり、絶対ばれない計画を考えるのだ。

いくら馬鹿だアホだと周りから言われているとは言え、私は魔王

だ。犯罪ならお手の物である。

「そうだ魔王」

「どうした師匠」

「寒いからコーヒー入れて」

早速計画が破綻した。

師匠はコーヒーを飲むときあのカップを必ず使う。

違うカップを出せば確実に怪しまれる、というかばれる。

「忙しいなら自分で入れるけど……」

「問題ない！」

キッチンへの進路を塞ぎ、私は慌てて食器棚の前に立つ。

ダメだ。妙案が全く思いつかない。

使える魔法があるとしたら、師匠に幻覚を見せるとかくらいのものだ。

しかし師匠にだけは魔法をかけないと私は決めている。これだけはやりたくない。

「…魔王、どうしたの？」

唐突にすぐ後ろで声がした。パニックで師匠の気配を読み間違えていたのだ。

「も、問題……ない」

「つてあんた、手の平血だらけじゃない！」

しまった。破片を片づけるのに必死で、全く気付かなかった。

「手当てしなきゃ」

「だ、大丈夫だ」

「でも滝のように血が出てるわよ」

「これくらいで死ぬような魔王ではない」

「でも痛いでしょう？」

痛いのは、割れてしまったコップの方だろう。

「…とりあえず治療を」

「そのまえに、あの、謝りたいのだが」

「別に良いわよ、気付いてるから」



「え？」

「とぼけたって無駄よ。割ったんでしよう、私のコップ」  
ばれていた。

「言っておくけど、あんた全部顔に出るから」

「か、隠していてすまない」

「それにいつか絶対割ると思ってたし」

「師匠は未来が見えるのか？」

師匠は私の血を拭いながら、何故か吹き出した。

「だってあんた、私のコップだけやらたら慎重に扱っじゃない。割らないように気を遣いすぎて、いつつも手が震えてるんだもの」

「大切な物だと聞いていたから……」

「だからってそんな腫れ物触るようになくても良いのよ。割れたらまた買えばいい」

「でも同じモノは売ってないのだから」

「同じのはないけど、前よりもっと可愛い奴をかうからいいの」

「次も割ってしまったらどうしよう」

「そしたらまた、もっと可愛い奴を買っわ」

でも、出来る限り割らないでよと苦笑され、私はごめんなさいと頭を下げた。

朝目を覚ますと、なんと師匠が花を飾っていた。

「似合わないのはわかるけど、その顔失礼すぎるわよ」

「いや、その、花は似合うのだが、自ら買ってくるのは初めてだったから」

「これはもらい物よ。ファンだって言う人から」

宅配でと言いながら師匠が差し出した紙には、見てるこちらが恥ずかしくなるような、恋の台詞が並んでいた。

どことなくチャーリーの字に似ているような気がしたが、差出人の名前は無い。

「まあ柄じゃないけど、こういうの貰えるとやっぱり嬉しい」

そう言っただけの香りを嗅ぐ師匠は、いつもより何倍も綺麗にみえて、何故だか私は焦ってしまった。

焦った上にとても不安で、それは師匠が学校に出かけたあとも消えてくれない。

その所為でことあるごとにガラスを割ったり、物を壊していたら、向かいの家からギャング団の頼れるリーダー、アルファがやってきた。

「遊ぶ約束を、していたらどうか？」

「心配できたんだよ。魔王の挙動不審な動き、俺の家からバッチリ見えるんだよね」

何があつたのかと尋ねられ、事の次第を話す。

するとアルファは、私の焦りと不安を取る素晴らしい解決法をみつけてくれた。

「花何かより、もっと凄いプレゼントをあげればいいんだよ」

「…でも私は何も持っていないし」

「じゃあチケットにしよう。お金もいらぬプレゼントだけど、うちのママは凄い喜んでくれる」

掃除を変わりにやるチケット、庭の草むしりをするチケットなど、仕事を肩代わりするチケットを渡すと、彼のママはとても喜んでくれるらしい。

「しかし、掃除も洗濯も草むしりも私の仕事だ」

「じゃあマツサージは？ 年頃の女は、エステとかマツサージのチケットが好きらしいよ」

「なるほど、じゃあ早速作ってみる！」

「一枚とかケチなコトしちゃだめだ。10枚綴りにして大人の魅力をアピールするんだ」

アルファの助言通りに早速チケットを作り、私はそれをこっそりとポストに入れた。

しかしその夜、私がチケットを見つけたのはゴミ箱の中だった。

シヨツクのあまり、仕事から帰った服のままゴミ箱の側で1時間ほど佇んでいると、師匠がばつの悪そう顔で私の横に立つ。

「もしかしてそれ、あんたがポストに入れた？」

「……」

「か、書いてある文字が読めなかったから、だからてっきり子どものイタズラかと思って……」

「……」

「そんな悲しそうな顔しないでよ！ ちょっと生ゴミ臭いし、正直なんだかよくわからないけど、あんたから貰った物は大事にするから！」

師匠はそう言ってチケットを取り上げたが、私はそれを奪うとゴミ箱に戻した。

「もういいんだ。忘れてくれ」

「……ごめんね」

「……」

「本当にごめん」

「……」

「……お詫びに、ハンバーガーにパテ3枚挟んであげる」

「……」

「チーズも2枚」

「……」

「じゃあ3枚」

「……マツサージの券だったんだ」

ゴミ箱を覗きながら言えば、師匠が謝罪の言葉を口にしながら私の手を握った。

「花何かより、ずっと嬉しい」

「本当か？」

「最近肩こり酷いし、マツサージされたいなあっておもってたの」  
師匠の言葉と笑顔に、ようやく沈んでいた気持ちが浮上した。

「今からでも使うか？ 10枚もついてるんだ」

「じゃあ食後をお願い」

そう言っただけで師匠は笑ってくれた。

ずっと不安だったのは、この笑顔が花を贈った誰かに向いていたからかも知れない。

花を愛でている時よりも美しいその笑顔に、ようやく私はホッと  
して、それから師匠の手を握りかえした。

「師匠のためなら私は何でもする。マツサージも掃除もするし、花  
だって摘んでくる」

「どうしたのよ突然」

「ただ師匠が望む物を贈りたいと、そう思っただけだ」

「……そういう台詞は、恥ずかしいからやめて」

どうして恥ずかしがるのかと尋ねたが、師匠はこたえてくれな  
かった。

それどころか、もう一度言ったらチーズを2枚に減らすと脅され  
たので、私は仕方なく黙った。

## Episode 38 大切に

「師匠、今日は私に付き合って欲しい」

私がそう言って頭を下げると、師匠は何故だか拳動不審になり、持っていたコーヒーを派手にブチまけた。

「っ、付き合っって…」

「うちのガレージでギャング団の集会があるから、一緒に出て欲しいのだ」

「……遊びか」

師匠はなにやらがっかりした顔でコーヒーを拭いている。

てっきり用事があるのかと私までがっかりすると、師匠が慌てて行くと言ってくれた。丁度今日は午後から休校らしい。

「それで、今日はどんなイタズラの会なの？」

「今日はイタズラではなく、宝物を見せ合う会なのだ」

「宝物？」

「一番の宝物を持ち寄って、それがいかに凄くて素敵かを自慢しあうのだ」

「え、あの、それ…」

「私は高価な物は持っていないし、それに宝と言ったら師匠しかないから」

だから来てくれないかとお願ひすると、師匠はなぜだか戸惑っていた。

「…けっけど、プラモデルとかハンバーガーとかもあるじゃない」

「でも宝物とは一番大切にしている物だろう？」

ハンバーガーは好きだけど食べてしまっし、プラモデルは遊ぶときに振りまわして傷つけてしまっ。

だから傷も付けたくないほど大切に、ずっと側にありたいと思う物は師匠しかないのだ。

「……だから、私と一緒に来て欲しい」

大事なお願いをするときは、紳士的な態度でお願いをする物だとテレビで言っていたので、私は師匠の前に片膝を突き、その手を取った。

途端に師匠は真っ赤になって私の腕をふりほどく。

「やはり駄目か…」

「そうじゃない、そうじゃないけど!」

「ならいいのか?」

「……あんまりドキドキさせないで、お願いだから」

「別に怖いことは言っていない」

「うん、わかんないならいいや。っていつかそうよね、無意識よね どうせ」

何故だか師匠はちょっと残念そうだったが、集会にはちゃんと来てくれた。

そう言う優しいところがやっぱり凄く好きで、それをふまえて師匠がいかに素晴らしい宝物かを熱弁したところ、本日の一等賞を貰うことが出来た。

やはり師匠は最高の宝物である。

最近師匠の営むダイナーに客が増えてきた。

師匠の話では、ホリデーシーズンというのに突入したかららしい。このホリデーシーズンになると、この国の人々は家から遠く離れた場所まで旅行に出かけるのだそうだ。

ダイナーの側の道、ルート66を車やバイクで走る旅行が流行っている事もあり、今年はいつもとより客が多いのだろうと師匠は話していた。

ホリデーシーズン以外でも、目新しい客が来ることは珍しいことではない。

だから最初の頃はさほど躊躇うこともなく、客入りの良い店に私も喜んでいた。

けれど、それは間違いだった。

その日店を訪れていたのは、バイクを乗って旅をする若者達の一団だった。

彼らはみな若く、何かにつけて師匠を呼びつけるところが何故だか少し気に入らなかった。

お客様は神様だと教えられているので勿論何も言えないが、師匠が彼らに微笑んでいるのも本当は少しいやだった。

「ねえ、明日もこの街にいるから良かったら食事しようよ」

若者達の中でも、ひときわ背が高く顔が整っている男がそう言えば、師匠は笑顔でどうしようかと悩んでいる。

途端に、何故だか心の内にどす黒い感情がわき上がってきて、私は慌てて店を飛び出した。

そのまま店の裏手に回り、黒い感情に支配されないよう気を付けながら魔法で深い穴を掘り、その穴へと飛び込んだ。

どれくらいじっとしていたかはわからない。だがふと上を見ると、師匠がこちらをのぞき込んでいた。

「……何してるの」

「悪い魔王が出そうだったから、ここでたえていた」

「悪い魔王？」

「昔の私だ。人を見ると、その、殺したくなる感じだ」

「…ねえ、そっち行ってもいい？」

「言うやいなや穴に飛び込んできた師匠を、私は慌てて抱きとめる。」

「お客は良いのか？」

「もう帰ったから」

その言葉に、私はまたさっきの光景を思い出してしまった。

途端に悪い魔王が出そうになったので、慌てて膝を抱えて座り込む。

「いけないよ、食事」

「まっまだ何も聞いていない」

「出てるから、顔に」

慌てて顔を手で押さえれば、師匠が笑いながら隣に座った。

「嫉妬はしてくれるようになったんだ」

「嫉妬ではなく、これは殺意だ」

「同じよ。私もあんたが女の子に誘われているところを見ると、相手の子を殺したくなるし」

「し、師匠も悪い魔王になるのか？」

「みんななるのよ、宝を取られそうになるとね」

「…私は、師匠の宝か？」

「嫌なの？」

嫌なわけがない。

「だから、もう穴掘らなくて良いわよ。埋めるの大変だし」

「…すまない」

「あと、私はあんたがいやだって思うことはしないから、ちゃんと言葉にしてくれると嬉しいかな」

「チャーリーやステイプは良い、でもさっきの男と食事に行かないでくれ。一人にされたら、私はきつと悪い魔王になる」



「じゃあ行かない。私良い魔王が好きだもの」

そう言って微笑む師匠を見ていたら、何故だか突然体が無意識に動いた。

「な…んで…」

師匠は真つ赤になって口を押さええている。

「どうしてだろう、何故だか突然こうしたくなった」

「ひっ人にキスしておいて、何なのよその言い草は！」

そうなのだ、気がついたら私は師匠にキスという奴をしていたのだ。

「私も困っているのだ、自分の体が無意識に動くななんて初めてだから」

どこか壊れてしまったのかと悩む私の頭を、師匠が叩く。

「む、無意識で許されるの、一回だけだから…」

「じゃあ2回目は駄目か？　なんだか、凄く気持ち良かったんだが」

「そう言うことをしれつと言っな！」

「口づけがこんなに素晴らしい物だとは知らなかったのだ。可能ならもう一回したい」

「だめ！」

「わかった、じゃあ今度チャーリーかスティーブをお願いします」

「それも駄目。絶対駄目」

「なら師匠にして欲しい」

私がお願ひすれば師匠は呆れ顔でもう一度私の頭を叩く。

「子どもが親にねだるのと同じか」

「駄目か？」

「…おでこだったらしてあげても言い」

それでも良いと頷けば、師匠が優しい口づけをくれる。

「うん、やっぱり唇が良いな」

我が儘言っなどと、口づけの変わりに張り手を送られた。4回も。

## Episode 40 人見知り

「あんだ、ついにあの子とできたのかい？」

鼻歌交じりで庭の芝刈りをしていた私に、そう声をかけたのは隣の家の老婦人だ。

彼女はとても変わった女性で、家の前を通る子どもを大声で怒鳴ったり、家に大量のゴミをため込んだりする癖がある。

あまりに異臭が酷い日があったので、こっそり消臭の魔法をかけたけれど頼みに行ったのが縁でときたまこうして話すようになったが、人見知りなのかいつも話しかけるのは私の方からだった。

なのに今日は彼女の方から声をかけてくれた。言っている意味はよくわからなかったが。

「別に師匠とは何も作っていないぞ」

「恋人同士になったのだったよ」

「それはない。前に師匠に、魔王とだけは恋人にならないと宣言されたからな」

「笑顔で言うことかい」

「恋人ではないが師匠は良くしてくれる。それに最近、キスというのをしてくれるようになったのだ」

あれはとても良い。されると胸がとても温かくなる。

「…あんだ、相変わらず頭のねじが緩いねえ」

「私は機械ではないぞ」

「そう言うところが馬鹿だっていつてんだよ」

老婦人はそう言うと、こちらへ来いと私を招き寄せた。

言われるがママ彼女の家の前に立てば、老婦人は家の中から小さな本を持ってくる。

「昔からね、女はこれに弱いんだよ」

「これは、詩の本か」

「愛にまつわる詩をよめば、女はみーんな喜ぶ」

「師匠もか！」

「あれも女だからねえ、いちおう」

「ありがとう！ 早速今夜師匠の前で読んでみる」

そう言つて頭を下げて、それから私は老婆の腕を取り手の甲に口づけをした。

感謝の代わりに、キスをしてもよいと師匠に教えて貰つたの思い出したからだ。

「……酔狂だねえ。こんな汚い婆の手に」

「何処が汚いんだ？ 細くて綺麗じゃないか」

私が言つと老婆は驚いたように目を見開き、それから呆れた顔で笑つた。

「本当に変わり者だよあんたは」

「ならあなたは、とてもいい人だな」

「褒めても何も出ないよ」

「事実だ。私の話し相手になつてくれるし」

「だがみんなはキチガイだというよ」

「怒鳴っているのは子ども達の為だろう？」

怒鳴りはするが、老婆の言葉は「車に気を付ける」とか「遅刻するな」という内容の物ばかりだ。

言い方が悪いので誤解されがちだが、子どもの身を案じての言葉であるのは、ちゃんと聞けばすぐにわかる。

「不器用だがあなたはいいい人だ。詩集もくれたし」

「あんたがあんまりアホな顔してるから、心配になつただけさ」

「そう言つところはやさしい」

勝手に言つておるとつげて、老婆は家へと戻っていく。

「お詫びに家の片づけなら手伝うぞ！」

「いらん世話だ」

相変わらず乱暴だが、やっぱり悪い人ではないと思つた。

Another Episode 4

「えー、この人と一緒にされると迷惑なん

Episode 4.5 師匠視点

「あんだ、ついにあの子とできたのかい？」

学校から帰った私に、そう声をかけたのは隣のケリーお婆ちゃんだ。

「あの子って？」

「お前の所の、あの若い男だよ」

「無いわよ。あいつ、そう言う感情欠落してるし」

「でもキスしてるんだらう」

そう言うことを表で言うなど、きつく叱らねばと心に決めた。魔王は人の誤解を生むのが上手すぎる。

「恋人は無いわ。キスも、親子でするような物ばかりだし」

「でもそれが残念なんだらう」

聡いケリーに、私は唸るほかない。

近所の大人達は、彼女を痴呆の始まった老人だと馬鹿にしているが、それは大きな間違いだ。

なにせこちらの秘めたる想いを的確に言い当てる、勘の鋭さは未だ健在。

ことあるごとに魔王とのことを尋ねてくる彼女は、高校の同級生よりその手の話題に敏感だ。

「ま、否定はしないわ」

「大人な反応が出来るようになったじゃないか。昔は違つと喚くだけだったのに」

「大人にもなるわよ。あんな大きな子どもが出来れば」

そう呆れた直後、ケリーの家から派手な倒壊音がした。

「もしかして、魔王がいる？」

「さすが」

さすがもなにも、この手の派手な音を立てるのは魔王の十八番である。

「迷惑かけてる？」

「…家の掃除をしたいときかなくてね。仕方がないから好きにさせてる」

「手伝うわよ。今日はお店お休みなの」

「こんな汚い家、私だったら死んでも入りたくないよ」

自分のことを棚に上げて笑うケリーお婆ちゃんは、どこか自嘲的だった。

「昔はよく遊びに来たじゃない。お爺ちゃんの作ったクッキーも、良くごちそうになったし」

でもそのお爺ちゃんが死んで、ケリーお婆ちゃんは変わってしまった。

同じ頃に私も父を亡くし、私達はそれぞれ、悲しみを言い訳に家からでなくなった。

そして、気がついたときにはケリーの家は荒れ果て、私は彼女との付き合い方がわからなくなってしまったのだ。

「もうあの人はいないよ」

「私は好きよ、ケリーが焼くクッキーも」

でも本当は、付き合い方なんてわからなくてもいいのだ。

だってケリーとは赤の他人だった魔王が、こうして家で好きかってやっているのだ。彼が家に入れているのに、私が入れないわけがない。

「だからまず、キッチンから綺麗にしましょう」

鞆をデッキにおき、私はケリーの家の扉を開ける。

数年ぶりに足を踏み入れたその家は、何もかもが変わってしまっている。

けれど立ちすくんだ私の背中を、派手な倒壊音と情けない悲鳴が押ししてくれる。

「あんた達、本当におかしなカップルだ」

「えー、この人と一緒にされると迷惑なんですけど」

いつだったか、ケリーに可愛いと褒められたおどけた笑顔を浮か

べれば、彼女は呆れたように笑う。

「綺麗になると思っかい？」

「あいつ掃除のプロだもん」

「破壊の間違いだろう？」

「それに私もいるし」

そう言って微笑めば、ケリーがようやく私の隣に並んでくれた。

「じゃあ家が綺麗になったら、久しぶりにクッキーを焼こうかね」

その言葉と、そして久しぶりに見た笑顔が嬉しくて、私は彼女の肩を軽く抱きしめる。

「ねえ、良かったらうちの店にクッキー置かない？ 私甘い物作るのどうも苦手で」

「考えておくよ。…ただし、売上げの9割は貰うから」

「その代わり、売れ残ったクッキー食べて良い？」

「私のクッキーが売れ残るわけがないだろう」

そう言うケリーは昔より偏屈になったが、それもまた可愛らしくて素敵だと思った。

出来ることならこういうお婆ちゃんになりたい。

そう思い、そしてそれを言葉にすれば、ケリーはにやりと微笑んだ。

「私みたいになりたけりゃ、まずは素敵な男を捕まえな」

「そんなのこの街にいる？」

「意外と近くに転がってるもんさ」

ゴミの中とかに。

そうつけて、ケリーおばちゃんは更に意地悪く笑った。

## Episode 4 1 応援

「お前は俺の親友だよな」

「もちろんだ。そんなことよりほら、ポテトが冷めてしまっぞ」

「親友だったら、どんなことでも応援できるよな」

「むろんだ。そんなことよりポテトが…」

「だったら俺と彼女の恋を応援してくれ」

突き出されたポテトのさきにいたのは、カウンターの側で暇そうにしている師匠だった。

驚きのあまり、私は片づけようとしていたコップを取り落とす。

派手な音をたてたが、チャーリーを覗けば他に客はいなかったの  
で、急いで魔法で治した。

「…あの、その、恋というのは、恋か？」

「そうだ、2週間後のクリスマスまでに、告白するつもりだ」

そう言うチャーリーの目は本気で、そして私は真剣な顔で尋ねる。

「師匠のことが好きなのか？」

「気付いて無かったのかよ！」

「だって、何も言わないし」

「それはまあ、俺の勇気がなかったんだけども」

そう言いつつ赤くなるチャーリーは、確かに恋をする男の顔だった。

「応援、してくれるよな」

もちろんだと言おうとした。チャーリーは親友だ。

親友の恋は応援する物だとギャング団の掟にも書いてある。

なのになぜか、師匠とチャーリーが、テレビドラマの中の若い恋人たちのように、四六時中キスをしたり、抱き合ったり、裸になったりするのを想像した途端、またしても悪い魔王が目を開けた。

けれどチャーリーは親友だ。殺す事なんて出来はしない。

「も、もんだいない…ぞ。 応援、大丈夫…する…」



悪い魔王を押さえ込みながら、必死に言葉を重ねると、何故だか涙が止まらなくなった。まるでダムが決壊したように目から涙が溢れてくるのだ。

お陰で悪い魔王は影を潜めたが、何故だかチャーリーが酷く慌てている。

「すまん、お前が本気だったなんて思わなかったんだ！ ホントごめん」

その上彼は、詫びる理由など無いのにごめんと繰り返す。

「応援、大丈夫…問題…ない」

「いやいい、もう忘れる。お前の気持ちはお前以上にわかったから」

「いや、恋は…大事だって…師匠が…」

だから応援すると口にしよとした瞬間、突然目の前の世界が歪んだ。

そしてその次の瞬間、私は3日後の師匠の家に行った。

正確には3日間寝込んでいたのだという。高熱で。

「目がさめた？」

側にいたのは師匠で、彼女は私の手をギュッと握ってくれる。

「チャーリーは？」

「毎日お見舞いに来てたわよ。あと、応援はもういらなくて」

「どうして？」

「失恋したから」

私は驚いて師匠を見る。

「おかしかったのよ。あいつ倒れたあんたを抱きながら、『俺を振ってくれー！』って大絶叫したんだから」

「でも、告白はまだだと…」

「うん。告白されてないけどって驚いたら、好きだっついままさら言うのよ」

まあ知ってたけどと師匠は言った。どうやら何も知らないのは私

だけのようだった。

「知っていたのに、振ってしまっただのか？」

「嬉しかったけど、彼の事は友達にしか見えなくて」

だから言われたとおりにしたのだと、師匠は静かに言った。

「私が応援したら、結果は変わっていたか？」

「こつというのは当人同士の問題。応援は関係ない」

むしろ大切なのはこれからだと、師匠が微笑む。

「成功したら一緒に喜ぶ。失敗したらなぐさめる。それが一番大事」

「なぐさめられるだろうか」

「大丈夫よ、あんた人の心を暖かくする天才だから」

師匠に言われると、なんだか頑張れる気がしてきた。

「今すぐにでも、チャーリーの所に行きたい」

「熱が下がったらね。それに、私も心配したんだから」

だからもう少し私と一緒にいてと師匠が言うので、私は彼女の手

を握った。

「それにしても、どうして急に熱なんて出たんだろう」

「知恵熱じゃないの？」

それはどんな物かと尋ねると、馬鹿が引く風邪のような物だと言

われた。

私の頭がもう少し良かったら、チャーリーを応援出来たのだろう

か。

そんなことを思っていると、また熱が上がってきてしまった。

考えると熱が出るのに、どうやって頭を良くすればいいのだろう。

でも次こそは、ちゃんと彼の恋を応援したい。

そしてそのために、とりあえず解熱剤は持ち歩くことにしよう

と思った。

## Episode 42 フォロー

「俺は決めたんだ。恋が実らないなら、潔くあの子の恋を応援しようって」

先週まで死人のようだったチャーリーが、ある朝物凄く元気になっ  
っていた。

「それはとても良いと思うが、師匠は留守だぞ」

「いい、用があるのはお前だ」

そう言うと、チャーリーは勝手に家に上がり込む。

「俺気付いたんだ。原因はお前だって」

「何の原因だ？」

「お前さ、恋したいとか思わないだろ」

「そんなことはないぞ。素敵な物だと聞くし、願望はある」

「それがもうダメだ。恋をして、そのあとはどうする？」

「恋のあとに何かあるのか？」

そういうと、チャーリーは「やっぱりそうか」と呟きながら、持  
っていた鞆の中身をリビングテーブルの上にぶちまけた。

それは大量のDVD。映画が何かのようだが、表紙に写っている  
のは裸の女性ばかりだった。

「お前は男として大事な物が欠落している！ 恋が出来ないのも、  
自覚が出来ないのもその所為だ」

「意味がわからない上に、そのDVDは物凄く目に悪いのだが」

「これを望んで直視できるようになれ！」

チャーリーが目の前に差し出したDVDには、雌豹を思わせるポ  
ーズを取る裸の女が写っていた。

「女性の裸を見るのは、失礼ではないか？」

「失礼じゃない。男はみんな、こういうDVDを持つてるもんだ」

「チャーリーもか？」

「これは全部俺のコレクションだ」

「沢山あるんだな」

「お前の趣味がわからなかったから、色々持ってきた」

「よくわからんが、手間をかせたようだな」

「とりあえず礼を言つと、チャーリーはさっそくテレビを付ける。」

「ちなみに、ホラー映画ではないだろうな？」

「そう言うのもあるが、普通のやつだ」

「怖くはないんだな」

「ムラムラするだけだ」

良いから画面を見ると言われ、チャーリーと共にソファに座ること5分。

唐突に、テレビの中で女性が服を脱ぎだした。

「あの、チャーリー？」

「なんだ？」

「これはどういうストーリーなのだ？」

「その女と、あっちの男がやるんだ」

「何を？」

「ホラー映画でもあるだろう。裸で重なるあれだよ」

「でもあのシーンだけで映画が成立するのか？」

「そう言う映画なんだよ、とりあえず見る！」

しかし正直何が面白いのかさっぱりわからなかった。

台詞もほとんど無いし、怖くもないのに女は悲鳴を上げるし、非常に退屈だ。

その所為か、どうやら私は寝てしまっていたらしい。

ふと気がつくとい時間もたっており、テレビは消えていた。

「おはよう」

顔を上げると、チャーリーの代わりに師匠が隣に座っていた。

「チャーリーがいなかったか？一緒に映画を見ていたんだが」

「ゴミと一緒に家の外に放り出したわ」

ゴミとはDVDのことなのだろう。山積みになっていたそれはなくなり、代わりに師匠が好きな映画がそこにはおいてある。

「もう、あの男ホント最低……」

「チャーリーはいい人だぞ。あの映画も、師匠の恋を応援するために持ってきたらしい」

それがなぜ恋の応援に繋がるかはわからないが。

「そんなフオローが出る時点で、全く役に立ってないのは明白ね」

「確かに、見るどころか寝てしまった…。チャーリーに悪いことをしたな」

「気にしなくて良い。あと、ああ言う映画は絶対見ちゃダメだからね」

そう言う師匠の目は、酷く冷たかった。

理由はわからなかったが、とにかく怖かったので私は二度と見ないと約束をした。

### Episode 3 ハスキーボイス

『私、おじさんと結婚するの』

テレビの中でそう言って笑う少女は、幼い頃の師匠だった。

「懐かしいなあ」

私達が見ているのは、大掃除の最中に見つけた『思い出ビデオ』だった。

昔の師匠が見られるというので無理矢理流して貰ったのだが、期待したとおり、幼い師匠は実に可愛い。見ていると、なぜかこちらがドキドキするくらい可愛い。

『ぜったいぜったい、おじさんと結婚する』

でもその笑顔は「おじさん」という男に向けられた物で、その事実は何故だか私を酷く動揺させた。

そのおじさんとやらが師匠を撮っているので、残念ながら姿はよく見えない。

ただ優しいハスキーボイスは師匠が好きなカントリー歌手の声に似ていて、そう言うところも大好きだとテレビの中の師匠は微笑んでいた。

それ見たとき、私は会ったこともないこの男に、なぜか敗北感を覚えた。

そもそも何かを競っている訳ではない。

けれど私は、テレビを見ながら「負けた」と強く感じたのだ。

「師匠はいつ、この人と結婚するんだ？」

考えると同時に口から零れた言葉に、師匠が飲んでいたコーヒーを吹き出した。

「何馬鹿な事言ってるのよ」

「だって結婚の約束をしたのだから」

「何年前の話だと思ってるのよ！」

あほらしいと言いながらコーヒーを拭く師匠。けれど真実の愛は

永遠の物だと、前に見た映画で誰かが言っていた。

「でもこの人が約束を覚えていて、ある朝薔薇の花束を持って玄関に立っていたらどうする！」

「あんたのプロポーズのイメージって微妙すぎるわよ」

「とっ、とにかく本当に訪ねてきたら…」

「ないない」

そう言いつつ、師匠の顔は少し寂しげだった。

このおじさんが今どこにいるのかはわからないが、もしかしたら師匠は彼に会いたいのかも知れない。

それきり師匠はおじさんについて何も言わなかったが、きっと我慢をしているだけなのだ。

そしてそれに気付いた瞬間、私はたまらなく寂しさを感じてしまった。

相変わらず理由はわからないが、寂しいと言うのは酷くつらい。

そしてそのつらさを師匠が感じているかと思うと、私はいても立ってもいられなくなった。

だから私は決意したのだ。師匠とおじさんを会わせてあげよう。しかし残念ながら、師匠はおじさんについては何も教えてくれなかった。

仕方なく、深夜になってから師匠に隠れてビデオやアルバムなどを片っ端から覗いたが、残念ながら彼の消息はつかめない。

なので私は、作戦を変えることにした。

おじさんの容姿と声、そして仕事を研究し、彼に変身する事にしたのだ。本人ではないが、寂しさはきつと紛れるはずだと思ったのである。

翌朝、薔薇を片手に師匠の家の玄関に立った私は、どこからどう見てもおじさんそのものだ。

「久しぶり」

我ながら完璧な変身だ。これなら絶対師匠も気付くまい。

「……アホか」

なのに私を認識した師匠は、酷く呆れた顔をしていた。

「久しぶりの再会なのにつれないな」

「その小芝居辞めなさいよ」

「小芝居ではない」

「なら今すぐ、自分の名前をフルネームで言ってみなさい」

そこで私は、おじさんの名前を知らないことに気がついた。

「カ、カイルだったかな」

確か名前はそうだったと思い出した直後、師匠が大げさなため息をつく。

「なんでそんな格好してるわけ？」

「……ばれているのか？」

「ばれないと思ってるの？」

思っていた。

「師匠が、おじさんに会いたそうな顔をしていたから」

「してない」

「でも寂しそうだった」

「懐かしんでただけよ」

それから師匠はじつと、私の顔を見上げる。

「似ているだろう？」

「おじさんはそんな間抜けな顔してない」

頑張ってきりつとした表情を作ってみたが、結局笑われただけだった。

「十分楽しんだから、いつものあんたに戻りなさい」

「でも師匠はこの人が好きだったのだろう？ もし望むなら、師匠

が好きなこの人の姿のままでもいいも私は構わない」

「それ本気で言ってる？」

本気だけど、それを選んで欲しくないという気持ちもある。

「……師匠が望むなら」

我ながら情けない声しか出なかった。



それに師匠は呆れたような、けれど嬉しそうにも見える笑顔を浮かべる。

「おじさんは私の初恋なの。素敵な思い出なんだから汚さないでよ」「汚すつもりは…」

「おじさんのイメージぶちこわしじゃない。おじさんはもつと格好良くて優しく素敵だったわ」

だから戻りなさいと怒られて、私は仕方なくいつもの姿にもどった。

「うん、その方が良い」

「…おじさんになれなくて申し訳ない」

「いいのよ。おじさんと同じくらい、あんたのことも好きだし」

「じゃあ結婚してくれるのか？」

「結婚の意味も知らない癖に」

確かに映画やテレビではよく見るが、その詳細を把握してはいなかった。

「勉強しておく」

「あんたには、多分理解できないわよ」

どうやら結婚というのはとても難しい物らしい。それを理解する自信がなかった私は、師匠と共に渋谷家へと入った。

### Episode 3 ハスキーボイス（後書き）

おじさんの名前に「あれ？」と思った方へ。

彼と同名のキャラが出てくる小説に設置されている拍手内に、この話の続き（&おじさんの正体）的な小話を隠してみました。

開くまで外伝というかお遊び的なネタですが、気になった方は探してみてください。

## Episode 4 変わらない

何故だかここ最近、師匠がサラダばかり食べている。

いつぞやのようにレタスを発注しすぎたのかと思っただがその気配はない。

理由を聞いても「別に…」しか言ってくれない。

しかし甘い物が大好きな師匠がサラダしか食べないなんて異常だ。私の作ったシェイクを毎日3杯のみ、その上隣の家のケリーが焼いたクッキーを日に10枚は食べていた師匠が3食サラダ漬け。

これは魔王であるこの私がレベル1の勇者に負けるのと同じくらい、あり得ない事態である。

おかしい、絶対におかしい。

そう思っただけ今朝もじつと師匠を見つめているのだが、彼女はただ黙々とサラダを口に運んでいる。

「…師匠、そろそろ別のものを食べた方が良くはないか？」

「いいのよ。これ好きなの」

「でも師匠は野菜嫌いではないか」

「好きになったのよ」

「でも顔色も悪いし、ひどい汗をかいてるぞ」

「あんまり見ないで」

そう言っただけサラダを口に運ぶ師匠の手は若干震えている。

これはまずい。絶対にまずい。

「師匠、やっぱり今日はサラダはやめよう」

「でもここで負けたら今までの努力が…」

「何かと争っているなら私が代わる！ 戦いなら得意だ！」

師匠の腕を掴み、私はサラダを遠ざけた。

「誰に勝てばいいのか言ってくれ。師匠のためなら、我が魔力で敵を粉碎してみせる！」

「そういう事じゃなくて」

「遠慮しなくていい。さあ、私は何を倒せばいい!」

そう言って詰め寄れば、師匠は顔を赤らめながらうつむいた。

「…こればかりは、あんたにも倒せないと思う」

「私は全てを破壊するために生み出された存在だ、レベル1000の勇者ならともかく、どんな敵でもまけはしない」

「……だって、しばうだし」

「死亡？ それはつまり、亡者か何かか？」

じゃなくて、と師匠は自分の腹部を腕でギョツと押さえる。

「…最近その、腹回りの脂肪がね」

「ああ、贅肉のことか!」

そこで師匠に殴られた。理由はわからなかったが一応謝っておいた。

「しかしなぜそんな物と戦っているのだ？」

「…私最近太ったでしょ？ だからダイエットしようと思ったの」

「あまり変わったようには見えないが」

「変わったわよ！ スポンもきつくなっただし、顔もふっくらしてきたし」

「でも別に良いと思うぞ。師匠は少し痩せすぎていたからな」

会ったときの師匠は腕も足も棒のように細く、ちゃんと食事を取っているのか心配だったほどだ。

実際食事を抜くことは良くあったようで、3食ちゃんと食べるようになったのは私と生活を始めてからだという。

「でも冬ってただでさえ太りやすいし、あんたスタイル良いから隣に立つと嫌でも目立つし」

「なら私が太ろうか？」

「やめなさい」

勿体ないと惜しがる理由はわからなかったが、とにかくダメだといつので巨漢に変身するのはやめておいた。

「ともかくあと2キロは落とさないと」

「でもサラダだけはダメだ。嫌いなものばかり食べていたら心まで

痩せてしまっ」

「だけど嫌なんだもん。クリスマスにはパーティーもあるし、ドレス入らなかつたらまずいし」

「ならドレスを魔法で大きくする」

「でもあんただって、デブの女より痩せた女の方が良いでしょ？」

「私の好みは関係ないだろう。それに、私は健康的な師匠が一番好きだ！」

だからもう辞めようと肩を掴めば、師匠が真っ赤になって下を向いてしまった。

「聞いているのか？ 私はいつもの師匠が良いと言ってるんだぞ？」

「聞いているから、何度も言わないでそれ」

「理解していないなら何度でも言う。私は楽しそうに食事をする師匠が好きだ、甘い物を食べて幸せそうにしている師匠が好きだ、太っているも痩せていてもこの想いは変わらない」

「もう良いってば！」

言葉を切られた上に、拳で殴られた。

「…ダイエツトは辞めるから、もうそれ以上言わないで」

「本当か？」

再度訪ねると、師匠は小さく頷いた。

「ならさっそく何か作ろう。何が良い？」

「……あんたが作る、ハンバーガー食べたい」

「すぐに作る」

「あと、その、パンケーキも……」

「沢山食べると良い！」

「…本当の敵は脂肪じゃなくてあんたね」

笑顔でキッチンに向かうと、師匠が恨めしそうな顔で何かを呟いた。

## Episode 5 好きなもの

「魔王が一番好きな物って何？」

「師匠だ」

答えた瞬間、頭を殴られた。

「真面目に答えなさい」

「真面目なのだが」

「…じゃあ私以外で」

「ハンバーガーだな」

「…できたらそれ以外で」

「でも、師匠とハンバーガー以外は一番ではないぞ」

「とりあえず好きな物言って！」

「どうしたんだ突然」

「もうすぐクリスマスでしょう。だからほら、プレゼントとか考える時期じゃない」

「あ、別にいらないぞ」

そういうと、なぜだか師匠がショックを受けたように動きを止めた。

「もう頼んであるんだ」

「誰に！」

何故だか首を絞められたので、生命の危機を感じた私は慌てて答える。

「さっサントさんだ」

「……そうきたか」

「うむ、欲しい物は紙に書いて靴下に入れてある」

「ちなみにその靴下何処？」

「うちには飾りがないので、隣のケリーの家の靴下に入れてきた」

私の首から腕を外し、それから師匠は出かけると告げて家を出て行った。

買い物なら付き合うのにと、誘われなかったことに拗ねていると10分ほどして師匠が帰ってきた。

何故だか師匠の目は真っ赤で、まるで泣いた後のようだった。

「どこか怪我でもしたのか！」

「何でもない」

言うと同時に、何故だか師匠が私を抱きしめる。

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。…だから、クリスマスの飾り買いに行こう。そしたらサントさん、すぐ側にプレゼント持ってきてくれるから」

いつもより優しい師匠は少し怖かったが、もみの木を飾るのはとても楽しみだ。

「そうだな、あのプレゼントはケリーの家に来ても困る」

ここに、自分の元に届かなければ意味はない。

「師匠」

「なによ」

「メリークリスマス！」

「……それ、まだ早いから」

## Episode 46 ケーキ

「クリスマスイブの夜、高校でパーティーがあるんだけど一緒にいかない？」

師匠にそう誘われた瞬間、私は多分5秒ほど気を失っていたと思う。

クリスマスにパーティーがあるのはずいぶん前から知っていた。そしてそこで師匠が歌う事も知っていた。

けれどハロウィン以降「悪い虫がつかないように」というよくわからない理由で、私はこの手の宴への参加を師匠から拒まれ続けたのだ。

それでもこのパーティーだけは一緒に行きたかった。クリスマスは大事な人と過ごす物だとテレビで見たし、昨日ちらりと見た師匠のドレス姿はうっとりするほど美しかったのだ。

「ねえ、聞いているの？」

「いっつく！ 勿論行く！ 殺虫剤も沢山買ってあるし問題ない！」

「そんな物よりタキシード買いなさいよ」

悪い虫は良いのかと質問したが、師匠には無視された。

「ともかく明日の夜は絶対開けておいてよ」

絶対を3度ほど繰り返し、そして師匠はリハーサルのために学校へと出かけていった。

一人の家は少し寂しいが、パーティーのためなら我慢できる。

今日からクリスマスまでは店も開けないので暇だったが、師匠と一緒にに行けるパーティーのことを考えていると時間はあっという間だ。

だが師匠がいなくなってから2時間ほど過ぎた頃、突然聞き知った怒鳴り声が家の外から聞こえてきた。

慌てて窓から外を覗けば、怒鳴り声の出所は向かいの家、つまり我がギャング団のリーダーアルファの家からだった。



「ママなんて大っきらいだ！」

怒鳴りながら家を飛び出したのはアルファだ。それをアルファのママが追おうとしたが、無駄に足の速いアルファに追いつくのは至難の業だろう。

それを見ていられず、代わりに家を飛び出したのはもちろん私だ。走り去るアルファは道ならぬ道ばかりを選ぶので、私は人様の家の屋根を3つほど飛び越え、雪だるまのイルミネーションが光る家の裏庭で、彼を捕まえた。

「不法侵入で訴えられるぞ」

自分のことを棚に上げてアルファがそう言うので、私は姿を見えなくする魔法をかける。これで話を折られることはあるまい。

「なぜママさんに大嫌いなど言った。明日はクリスマスだぞ」

悪い子の所はサンタが来なくなるぞと続ければ、アルファが私をにらみつけた。

「ママがいけないんだ！　ママが約束破るから！」

「約束？」

「クリスマスは一緒にいられるって言うのに、仕事が入ったって言うんだ！」

そう言いながら口をへの字に曲げるアルファ。この顔は、涙をこらえるときに彼が良く浮かべる表情である。

「毎年毎年仕事で、でも今年は一緒にいられるって言ったのに……」

「確かにそれはママがいけない。約束は破るべきではない」

「そうだろ！」

「でもああやって怒鳴って逃げるのも良くない。約束を破るのがママさんの本意でなかったとしたら、破った方もきつと傷ついているはずだ」

僅かな間の後、アルファの視線が下がる。

「……ママも、一緒に過ごしたいって言ってた」

「なら怒鳴ってはダメだ」

「でも嫌だったんだ、クリスマスを一人で過ごすなんて」

「ママさんはいつまで仕事なんだ？」

「明日の夕方からクリスマスの翌日まで」

「ずいぶんと長い。アルファのママは良く海外出張というのをするから、きつと今度もそうなのだろう。」

「……確かにずっと一人は寂しいな」

「こんな事なら、サンタさんにはテレビゲーム頼んどけば良かった」「頼んだのは別の物なのか？」

「ママと一緒にいられると思ったから、今年はボードゲームにしたんだ」

でも一人じゃ楽しくないと告げるアルファはととてもとても寂しそうで、私はもう見ていられなかった。

心の中で師匠にごめんと謝って、私はアルファの肩に手をかける。「ならば今年は私と過ごそう。そうすれば寂しくないだろう」

「いいの？ 予定あるんじゃないの？」

「リーダーが一人にいるのに、私だけ楽しむ事など出来はしない」

「じゃあうちでクリスマスの料理食べよう！ ママがそれだけは作ってくれるって言ってたんだ」

「クリスマスの料理とやらは、ハンバーガーより上手いか？」

そう尋ねればアルファはようやくやく笑顔になって、ママの料理がいかに素晴らしいかを語り出した。

そのまま二人で手を繋いで家に帰り、アルファは不機嫌ながらもママと仲直りした。なんとか一件落着である。

……がしかし。

そうなると、問題は私だ。

約束を破ったことで師匠が酷く怒るのは予想できる。

それにきつと、師匠との約束を破った私の所に、サンタさんも来てはくれないだろう。

彼に頼んだプレゼントは物凄く欲しかった物だが仕方がない。そ

れに今はプレゼントより師匠にどう謝るかだ。

殴られたり怒鳴られたりするのはいい。だがもし怒り狂った師匠に「違う人とパーティーに行く！」なんて言われたらきつと私は立ち直れない。

それだけは回避したい私は、師匠が好きなのシェイクを作り、魔法で彼女が食べたいと言っていたケーキを用意して師匠の帰りを待った。

「ただいま」

そして帰ってきた師匠はそのケーキを見て、そして静かに告げた。「今日は何したの？」

「まだ何も言っていない」

「あんたが私にケーキ用意する時は、後ろめたいことがあるときでしょ」

さあ白状しろと言われたので、私はアルファの一件を話した。てつきりシェイクを投げられるかと思ったのに、師匠は「何だ」と言っただけだった。

「怒らないのか？」

「他の女の子と約束してたとか言われたら殴ろうと思ったけど」

「でも先にした約束を破ってしまった」

「ギャング団の掟その2を言ってみて」

「『友達が困ってるときは必ず助ける』」

「ならあんたのしたことは正しい」

むしろ問題はこのケーキの大きさだと言いながら、師匠はクリームをなめとった。

そんな彼女を見ていたら何故だか胸が酷く苦しくなった。

その上、気がつけば師匠に背中から抱きついた。

「ちよつ、何で！」

「わからない。でもこうしたい」

「こうしたいってあんた！」

…言い訳のように聞こえるかも知れないが、師匠とパーティーに

は行きたかったんだ」

「わかつてるわよ」

倉庫に殺虫剤積んであったしと繋ぎながら、師匠はもぞもぞと体を動かし私と向き合う。

「だから来年一緒に行こう」

「来年も一緒にいて良いのか？」

「いないつもりだったの？」

「いたい」

そう言っつて師匠の髪に顔を埋めれば、師匠が私の頭を優しく撫でてくれる。

「でもその代わり、ひとつ条件」

「何でも聞く」

「パーティ終わったらすぐ帰ってくるから。だから私も、お子様パーティーに混ぜて」

「もちろんだ、アルファは師匠のことを尊敬しているし、きっと凄く喜ぶ」

「あんたは喜ばないわけ？」

「勿論嬉しいぞ！ 今も涙と一緒に目からビームが出そうで困っているくらいだ」

「人の肩越しに撃ったら絶交だから」

「出ないように頑張る」

アルファのように口をへんの字に曲げて、私は師匠の体に身を寄せた。

## Episode 47 気合い

今夜だけは、何としてでも起きていようと気合いを入れて、私はもう3時間ほど暖炉の前に座っていた。

ちなみに現在の時刻は、夜中の2時である。

「ねえ魔王、もしかしてあんた、アレ待ってるわけ？」

「うむ、待っている」

「別に待って無くても来るわよ」

「だが、プレゼントを貰ったらお礼を言うのが礼儀であろう」

「そう言う事気にする人じゃないって」

「でも本当は謝礼がないことに傷ついているかも知れない」

「そんなナイーブでもないわよあのじいさんは」

「だが世界中の人にプレゼントを配っている心優しき老人を置いて、一人休むのは心苦しい」

そう言って膝を抱えれば、師匠が酷く困った顔で私を見下ろした。

「私のことは気にしないでくれ。それより師匠こそ休んだ方が良い」

「…いや、うん、私も正直さつさと休みたいんだけど」

「ならば休むと良い、私に遠慮はいらないぞ」

そう言って微笑めば、師匠は何故か照れたように「しかたない」

とつぶやくと、突然私のパジャマの裾を引いた。

「だからここは私ひとりで……」

「今日、あんたと一緒に寝たいって言ったらどうする？」

その言葉を理解するより前に、何故だか体がかっとなった。

「どっとうしたのだ師匠！ いつもは一緒に寝ようと言ってても嫌がるのに！」

「クリスマスだからっていうか、何て言うか……」

「しっしかし私はここで彼を待たねばならないし、それに今日は少し熱っぽくて……」

「あんた、サンタと私どっちが大事なのよ」

「勿論師匠ではあるが」

「寝てくれなきゃ、もう魔王にハンバーガー作んない」

「寝ます」

頷いたのに、何故だか殴られた。

「私の誘いよりハンバーガーが貴様……」

何故怒るのかと尋ねたが無視され、その上もう一度殴られた。

「ともかく寝るよ、さあ上に行つて!」

と追い立てられれば従う他はない。

だが不思議なことに、追い立てる方の師匠は、踊り場から上になかなか上がつてこない。

「師匠も一緒じゃないのか?」

「お、女には色々準備があるのよ……」

何故だかそれ以上は聞いてはいけない気がしたので、私は師匠の寝室に入った。

そして師匠も、それからすぐにやつてくる。

「準備は終わったのか?」

「うんまあ、ばっちり」

「じゃあ寝るか」

そう言つて二人で布団に入った直後、またもや体が熱を持ち始める。

「師匠……」

「言つておくけど、明日の朝までこの部屋出ちゃダメだからね」

「なら空調を下げてても良いか、酷く体が熱いのだ」

「むしろ寒くない?」

「そうか、師匠は寒いのか」

なら我慢すると言えば、師匠が私の額に手を当てた。

するとまた体が熱くなり、同時に胸も苦しくなる。

「確かにちよつと熱いわね」

「そして息も苦しい」

「もしかしてまた知恵熱? どんだけプレゼント楽しみにしてんの

よあんだ」

「師匠は呆れながらも、私のためにアイスバッグを持って来てくれた。」

「寒いのにすまない」

「いいわよ別に」

「代わりに私の体で暖を取ると良い」

「それ、本末転倒じゃない」

「でも熱を有効活用できるなら良いだろう」

「そう言っただけで師匠の体を抱き寄せた直後、体が更に熱くなり、そしてなぜか意識が飛んだ。」

次に目を開けると、カーテン越しに朝の光が差し込んでいた。

「すごい、家が違うのにプレゼントきた！」

そして響いたアルファの声にハツとして、私は慌てて階段を駆け下りる。

「昨日は爆睡だったわねあんだ」

「そう言ったのは台所で朝食の準備をしていた師匠だ。」

「うむ、気がついたら息が止まっていた、そのまま死んだように眠ってしまったらしい」

物凄く不安そうな顔で師匠に見つめられたが、今はそれよりプレゼントである。

ボードゲームの前にはしゃぐアルファの横で、私は靴下に手を入れた。

「入っている！」

興奮して腕を引き抜けば、手の中には小さな紙が一枚入っていた。それを手に、私が駆け寄ったのは台所に立つ師匠の所だ。

「師匠、プレゼントが来た」

「聞こえてるわよ」

「これで、師匠は幸せになれるぞ」

私が頼んだプレゼントを差し出せば、彼女は嬉しいような困ったような顔で笑う。

「サンタさんには、師匠が幸せになれるチケットを頼んだんだ。これがあれば、もう悲しいことはきつと無くなる」

そう言っただけで出したのに、何故だか師匠は泣いていた。

「すすまない師匠！ サンタさんがチケットを間違えてしまったよ」

「間違えてない」

「本当か？」

うれし涙だと師匠は言うので、ひとまず安心する。

「でも本当に良いの？ こういうのは、自分が欲しい物を頼む物なのよ」

「良いんだ。だってこれは、私が心から欲しかった物だ」

なによりも一番に。

そう告げると、師匠の目から新しい涙が溢れた。

「本当にうれし涙か？ それにしては酷い顔だぞ？」

言っただけで殴られたが、その威力はいつもより弱い。

その上涙を拭いた師匠は、私が渡したチケットに似た紙をポケットからとりだした。

「嬉しかったのは本当。だからお礼に、これあげる」

あんなへのクリスマスプレゼント。

そう言っただけで渡された物はサンタから貰ったチケットによく似ていた。

「すごい、何でもひとつ願いが叶うと書いてある！」

「ただし願いを叶えるのは私だから、常識の範囲内にしてよ」

「師匠とずっと一緒にいたいというのは、常識の範囲内か？」

尋ねた途端、師匠が惚けた顔で私を見上げた。

「だめか？」

「いや、その、あんなのことだからハンバーガーを死ぬほど食べたとかそういうことかと」



「ハンバーガーより、師匠といられる方がいい」

惚けた顔から慌てた顔になり、師匠の目が再び潤んだ。

「やっぱりだめか？　ずっとは嫌か？」

「嫌じゃないけど……」

良かったと胸をなで下ろして、それから私はハツとする。

「そうだ、私からも師匠にプレゼントがあるんだ！」

クリスマスツリーの下に置いてあると告げると、師匠は怪訝な顔を  
をする。

「このチケットじゃないの？」

「もつと、もつともつと良い物だ」

何故だか師匠がとてつもなく不安そうな顔をした。

それに異を唱えようとした直後、リビングでアルファが物凄い悲  
鳴を上げる。

何事かと思い、私はリビングに戻ろうとした。

だがそれを、師匠が物凄い力で引き留める。

「あなたのプレゼントって何！」

「それは開けてからのお楽しみなんだが」

「良いから白状しなさい」

そう言う師匠の顔が物凄く怖かったので、私は渋々白状する。

「わっ私の心臓だ。前は拒絶されたが、やはり師匠には長生きして  
欲しいと思って」

「今すぐ体に戻せ！」

その声と顔のあまりの恐ろしさに、私は急いでリビングに戻った。

## Episode 48 ドライブ

『今年の目標は、愛しのダーリンとのドライブデート』  
と書かれた師匠の日記を見つけたのは、ダイナーのレジカウンターの奥からだった。

今日は今年最後の営業で、私と師匠は閉店と同時に、店の大掃除に取りかかっていた。

そのさなか、帳簿や発注伝票が押し込まれたカウンターのなかから、私はそれを見つけたのだ。

「師匠」

「何？」

「師匠の今年の目標と去年の愚痴が書かれた日記帳を見つけたのが、これは取っておくのか？」

その直後、師匠が物凄い勢いで私の手から日記を奪った。

「あんたまさか、中見た？」

「師匠が今年の目標の覧に、超格好い男とドライブデートがしたい（できたら車の中で裸を見たい）と書いてある部分は読んだ」

直後、師匠のこぶしが顔面にめり込んだ。

「女の子の日記を読むなんて最低！」

「日記だとは知らなかったんだ」

そう言いつつ日記を渡せば、師匠は中をぺらぺらとめくりつつ、頼りない足取りで奥のカウンター席に移動する。ページをめくるたびに恥ずかしそうに頭を抱える師匠はとても可愛くて、私も彼女の向かいの席に座った。

「……あなたは掃除してなさいよ」

「少しだけこうしたい」

ダメかと尋ねると、師匠は顔を赤らめたまま好きにしなさいと言  
い放つ。

「しかし、そうしていると師匠はまだ子どもっぽいな」

「どついう意味よ……」

「最近、ケリーがよく言うのだ。師匠は、ここ数ヶ月で急に大人になつたと」

前はもつと落ち着きがなくて、男も取っ替え引っ替えて、柄も態度も悪くかつたと、ケリーは勿論近所の人たちも言っていた告げれば、師匠はふくれ面を日記で隠す。

「私も若かつたというか、色々あつたのよ」

「たしかに、日記の師匠はとてもハイテンションだな」

その上ふしだらだと告げれば、師匠は肩を落とした。

「幻滅したなら素直に言いなさいよ」

「なぜ幻滅すると思うのだ？」

本心からそう言つと、何故か尋ねた師匠の方が困つた顔をした。

「ケリーが言つていたのだ。18の少女というのは皆ふしだらな物だと」

逆にそれが普通であるなら、幻滅するどころか心配なくらいである。

「我慢していると言つことはないか？ 本当はもつとふしだらな事をしたいのではないのか？」

「ふしだらの意味、わかつていないでしょあんた」

「素行が悪いことだろう」

「うんまあ、そうなんだけど」

日記を閉じて、師匠はそれを脇へ追いやつた。

「私は今の自分の方が好きなの。だからその、ふしだらなことは卒業したの」

「そうなのか」

「そうなの」

「ならいい。でももし、ふしだらに戻りたいなら言ってくれ。全力で手伝つから」

「……うん、ありがとう」

若干怪訝そうな顔だったが、師匠が落ち着いたようなので、私は

掃除に戻ることにした。

だが席から立ち上がった私の手を、師匠が突然掴む。

「どうした？ やはりふしだらなことをするのか」

違つと怒鳴つた後、師匠は赤い顔のまま、上目遣いに私を伺う。

「実はその、あんたが読んだ今年の目標、まだ叶って無くてさ」

「それはつまり、車の中で裸になりたいと言つことか？」

「それは良いの！ ただドライブデートがしたいの！」

言つてから、何故だか師匠は悔しそうに顔をゆがめる。

「今年は男運悪くて、そう言つての全然出来なかったの……。だから

明日とか、あんたが暇ならどうかなつて」

「暇だからいいぞ」

「…その返事、何か微妙」

「ふしだらでもいいぞ」

「……もう、いいや」

どうやら私は師匠の期待を裏切ってしまったらしい。

「悪い所があつたのなら言つてくれ、修正する」

「ううん、私が勝手に色々期待しただけだから良いの」

「その期待に応えたいのだ！」

結局師匠は何も教えてくれなかったが、もしかしたら師匠はふし

だらなことをしたいのかも知れない。

ならば期待に応えるのが私のつとめであろう。

超はつかないかもしれないが、いちおう人からは褒められる顔だ。

少々寒いのが、明日のドライブでは裸になるべきであろう。

「明日は、脱ぎやすい服にしよう」

そう決意して、私は掃除に戻つた。

でも勿論これは師匠には秘密だ。その方が、きっと師匠も喜んでくれるはずである。

ドライブデートをしてから、師匠と一緒に寝てくれなくなった。どうやら私は何か思い違いをしていたらしく、師匠を酷く怒らせってしまったのである。

「今日も、だめか？」

「だめ」

「久しぶりにジェysonさんを見て、酷く怖いのだが」

「だめ」

「床で寝るのもだめか」

「だめ」

そう言って師匠は部屋に入ってしまった。しかし怖い物は怖い。仕方なく、私は枕と毛布をかかえて師匠の寝室の扉の前に座った。一緒じゃなくても、少しでも近い方が怖くない気がしたのだ。だが問題は廊下が酷く冷えることだ。

毛布は持ってきた物のそれでも酷く凍えるので、私は体を丸め、師匠の部屋の扉にぴったりと体を近付ける。

しかしそれでもまだ寒かったので、せめて想像だけでもと師匠と一緒に寝ている自分を想像した。

師匠は柔らかくてとても暖かい。くっついていると凄くほかほかするのだ。

その温もりを思い出していると、突然師匠の部屋の扉が開いた。

「……お前は犬か」

丸まっている私を見下ろす師匠の顔は、酷く呆れていた。

「怒らないでくれ！ 私は少しでも師匠と距離の近いところにいたいのだ！」

慌てて弁解したが、どうやら師匠は怒っているわけではなかったらしい。

「中入りなさい。そこ寒いでしょう」

「寒かったが、師匠の側にいる時のことを想像したら大分マシになった」

「それはあれなの、あんなりの欲情と取って良いの？」

「浴場？」

「うん、もう良いや」

最近師匠は、私について色々と諦めた顔をする。それが凄く嫌なのだが、せつかく一緒に寝てくれるというのに、ここで機嫌を損ねるわけにはいかない。

「床の方が良いか？」

「隣でいい」

思わず喜んで、私は師匠の隣に潜り込む。

「冷たいわね、さすがに」

「すまない。今日はくっつかないようにする」

「いいわよ、ほら」

許可が出たので、私は師匠の体を抱き寄せる。

「やっぱり、師匠の側が良いな」

暖かいし、柔らかいし、良いにおいがすると言ったら足の裏ですねを思い切り蹴られた。

「そう言うこと、お願いだから口にしないで」

「だって事実だ。何なら試してみるか？」

師匠に変身してみせようと提案したら、またもやすねを蹴られた。

「やったらたき出すわよ」

それは嫌なので、急いで頷いた。

「なら静かに寝なさい」

「そつだ師匠」

「なんだ？」

「最近キスもおあずけだったからしたい」

アホかという顔で見られたが、それでもお願いすると渋々OKがでた。

「……なんかもう、あんたって本当に犬よね」

「ならキスより嘗めた方が良いか？」

そう言えば舌を使うキスもあると、チャーリーが教えてくれたのを思い出す。

やり方はビデオで見たきりだが、運良く師匠が惚けた顔で口を開けていたので、私は舌を使ったキスを試してみた。

なんだか、これは、凄く不思議な感じのキスだ。

普通のキス以上に何度もしたくなるし、師匠の舌に触れると体が燃えるように熱くなる。

とはいえ呼吸をしなくても生きていける私と違い、師匠は人間なので延々キスしているわけにも行かない。

名残惜しいが仕方なく唇を離せば、今度は師匠が同じキスを私にしてくれる。

体が熱くなり、思わず師匠の体を強く抱き寄せた。

とはいえ本気で抱き寄せると師匠の体が壊れてしまうので、その所は考慮する。

壊してしまいたいという恐ろしい考えが頭をよぎったが、私はもう悪い魔王は卒業したのだ。

今の自分は師匠の犬だと僅かに残った悪い魔王に言い聞かせていると、もう一度唇が離れ、師匠がギュツと私の体に腕を回す。

「……し……しょう？」

「眉間に皺寄ってるけど、嫌だった？」

「むしろ、このキスは凄く良いな」

そう言うのと、師匠は躊躇いガチにもう一回するかと尋ねてきた。

「1回どころか何万回もしたい」

「それは、色々な意味で死ぬ」

「確かに、師匠には呼吸も必要だな」

「もしかしなくても、あんた呼吸しないの？」

「うむ、だからずっとキスしていても死なないぞ」

「意外と、狼の素質あるのね」

「狼？ 犬ではなく？」

「独り言だから気にしないで」

狼のようなキスとはどういう物だろうかと考えたが、やはり同じ舌を使ったキスしか思い浮かばなかった。

今度、そのような物があるのかチャージャーに聞いてみよう。



## Episode 50 仲間入り

その日、私と師匠はダイナーから初日の出という物を見ていた。この世界では年の移りかわりは喜ぶべき事らしく、昨日は夕方から馴染みの常連客や近所の人たちを家に呼んでパーティーをした。た。

だが明け方前に突然、師匠が二人で朝日を見たいと言い出したのだ。

「別に今日でなくても、朝日は毎日登るぞ？」

「でも今日は特別なの」

その上静かな場所で、それも二人きりで見たいと師匠は言う。

特別な日である所為か、そう言う師匠は凄く可愛らしく見えて、

私は急いで車を飛ばし、このダイナーまで来たのだ。

「師匠」

「何？」

「年が変わっても、朝日の上り方や輝きは同じなんだな」

「普通は変わらないわよ」

「私のいた世界では良く変わるぞ」

「じゃあこの世界の朝日はつまらないかもね」

窓際のボックス席に二人で寄り添うように座り、眺めた朝日は確かにいつもと同じだ。

しかしだからこそ、美しいと私は思う。

「でも今日は元旦だし、特別って感じがしない？」

「私にとっては毎日が特別だ」

「大げさね」

「大げさではない。この世界は見る物全てが美しく、そして私を満たしてくれる」

中でも師匠がと告げると、彼女は私の腕の中でくすぐったそうに笑った。

「あんたを満たしてるのは、私じゃなくて私の作るハンバーガーでしょう」

「そう言われるとハンバーガーが食べたくなってくるな」

「材料持ってきたから、作るうか」

「いいのか？」

「私が今年最初に作るハンバーガー、食べたくない？」

「食べたいと声を上げれば、師匠が笑顔で厨房に入っていく。」

本当に私は幸せ者だ。むしろ魔王なのに幸せになって申し訳ないくらいである。

そう思いつつ、せっかくなので自分も飲み物を作ろうとしたとき、私は朝日を背にこちらへと歩いてくる人影があることに気がついた。こんな早朝に、荒野を徒歩で横断するなど無謀だ。そのうえ近づいてくる人影をよく見ると、何とそれは老人だった。

無謀どころか自殺行為である。

私があわてて外に駆け出すと、老人は私の目の前で力尽きてしまった。

倒れる老人を抱き起こし、私は彼に声をかける。

弱々しく目を開ける老人。それに私はホッとしたが、何故だか老人は私を見て驚愕の表情を浮かべた。

その上老人は持っていた剣で私の腕を切り裂いた。痛みと、そしてこの世界では馴染みのない老人の武器には覚えがある。

「何故貴様が生きている！」

死んだようだった老人は立ち上がり、剣を構えて私から距離を取った。

「……まさか、貴方は勇者か？」

「年は取ったが、まだ現役じゃ！」

足は子鹿のようにふるふる震えているし、剣を持つ腕は木の枝よりも細かったが、確かに纏う魔力は勇者のそれである。

それに気付いた瞬間、私は絶望した。

やはり全ては仮初めの幸せだったのだ。私は勇者に滅ぼされる運

命からは逃れられない。

「私を殺しに来たのか」

「…そんなところだ」

剣を向けられただけで、奪われていく私の魔力。

やはり老いていても、立ち方が子鹿でも老人は勇者だった。

心の中に「我を解き放て」と絶叫する魔剣の声が聞こえたが、ここで聖剣と魔剣が打ち合えばダイナーがタダではすまない。

それだけは、師匠と師匠のダイナーが傷つくことだけはあってはならない。

「覚悟しろ、魔王！」

「覚悟なんてとうの昔に出来ている。やるならすぐに殺せ、だがこの店とその亭主だけは決して傷つけるな」

「お前の配下か？」

「関係のない人間だ」

師匠に危害が及ばぬよう、操っていたと嘘をつけば勇者は信じたようだった。

「ならば死ぬのはお主だけだ！」

勇者が剣を振り上げると、その美しき白銀の刃が朝日を浴びて赤く輝く。

この美しき光に斬られるなら悪くない。

そう思いながら私は目を閉じ、そのときを待った。

……だが、直後に響いたのは骨と肉を断ち切る音ではなく、酷く重い衝撃音である。

一向に訪れない痛みを怪訝に重い、私は恐る恐る目を開ける。

するとそこには、フライパンを手にした師匠と、その前に倒れている勇者の姿があった。

「魔王、すぐ警察に連絡！」

ただ者ではないと思っていたが、まさか勇者を倒すほどの実力があるとは驚きである。むしろ少し恐ろしいくらいである。

「こんな長い刃物で押しかけるなんて、最近の強盗は本当に油断で

きないわ!」

「わ、私も剣は持っているぞ」

そう言う意味じゃないと言いながら、師匠は常人には触れられないはずの聖剣を、勇者の手から蹴り飛ばした。

「とりあえず縛ろう」

「しつ縛るのか?」

「だって警察に引き渡さないと」

「警察はまずい! この人は犯罪者ではなく正義の味方なのだ!」  
それどころか勇者だと言えば、師匠の表情が僅かに変わる。

「バカ言わないでよ、どう見ても強盗じゃない」

だが納得したとは言い難いようだ。

「見えなくても勇者なんだ」

「よく見えても浮浪者でしょ」

「それでも勇者なんだ」

「それにこの人何か臭いし」

「伝説の鎧というのは、一度着たら脱いではいけない決まりがあるらしい」

そう告げれば、師匠は今更のように彼の纏う伝説の鎧に気付いて驚いた。

「……縄で縛るのあんたの仕事だから」

だがそれでもなお、師匠の決意は揺るがないようだった。

「やはり縛るのか? 何度も言うようだが、正義の味方なのだぞ」

「お風呂に入らない奴に正義を語る資格はない」

言い切る師匠の顔があまりに怖かったので、私は慌てて縄を探しに行った。

あと、これからは毎日ちゃんとお風呂に入ろうと思った。

A n o t h e r E p i s o d e s

「これって正当防衛だから罪にならないよ」

E p i s o d e 5 0 . 5 師匠視点

勇者。

その名前は魔王から何度も聞いていた。

魔王を倒す者。世界の救世主。平和の使者。

そう語られるたびに、私は怖かった。魔王はこんなにバカで、アホで、優しいのに、少なくとも彼の世界では悪い奴で、そしてこの勇者に殺されたのだ。

多分彼がいなくなったら、私は一人では生きていけない。彼は気付いていないかも知れないが、それほどまでに私にとって魔王の存在は大きいのだ。

だからもし勇者が現れたらと考え、眠れない夜さえあった。

……なのに。

「縄をほどけ魔王の手先よ！ わしを誰だと心得る、メルトキオノ第56代救世主にして、伝説の勇者なのだぞ！」

ずっと恐ろしいと思っていたそれは、魔王同様頭のネジが緩んだ汚いじいさんだった。

「魔王、やっぱり警察に引き渡そうよ」

「しかし勇者が魔王を斬りつけるのは当たり前のこと、罪ではない」

「あんたの世界じゃそうかも知れないけど、ここでは罪のない人を傷つけちゃダメなの」

「私は罪人だ」

「ここでは悪いことはして無いじゃない」

「存在その物が罪なのだ」

「それもあんなの世界での話でしょ。この世界じゃ命は皆平等、良い存在も悪い存在もない」

私の言葉に不思議そうな顔をしていたのは、魔王だけではなかった。

「魔王の存在を許す世界か……実に興味深いな」

「つていつか、そもそも魔王なんていないのここじゃ」  
魔法も何もないと説明すれば、じいさん合点がいったという顔で頷く。

「通りでこの世界には魔法を使わない兵器が沢山あるわけだ」  
まるでこの世界を知った風だったのが気になって、私は勇者の襟首を掴む。後で絶対手を洗わないと。

「あんた本当に勇者なの？ 自分を勇者だと思っている頭のおかしなじいさんってことない？」

「失敬な！私はメルトキオの……」

「それはもういい」

「信じていないな娘よ！」

信じろと言う方が難しい。だって魔王が語った勇者は、こんな頭が固そうなじいさんではなかった。

「ならば我が力、特と見るがよい」

唐突に、じいさんの表情が変わった。

同時になにやら訳のわからない言葉を叫ぶと、じいさんの少ない髪の毛がふわりと浮き上がり、天に向かって逆立つ。

こういう、髪の毛が逆立つ日本のアニメを見たことがあるなど場違いな事を考えていたとき、あの貧相なじいさんが、体を縛る縄を引きちぎった。

たしかに、これは凄いかも知れない。

「驚くのはまだ早い。さあ伝説の聖剣よ、我が元にきたれ！」

以前魔王が魔剣を呼び出したときのように、じいさんの手に現れる聖剣。その途端、魔王が苦しそうに胸を押さえた。

「どうしたの！」

「アレは我が命を絶つ唯一の聖剣。側にあるだけで命を吸い取られるのだ」

それは困る。魔王には、まだ死んで欲しくない。

「今度こそ、貴様を殺してやろう！」

だが幸運なことに、このじいさんはひとつのことに集中すると周

りが見えなくなるらしい。

私は念のため側に置いておいたフライパンを手に取り、じいさんの後ろへと回り込む。

「ていつ！」

あっけなく、あまりにあっけなくじいさんの頭にフライパンが直撃した。

先ほどより若干強く叩いたせいか、フライパンには少し血が付いていた。

「勇者殿、生きておられるか？」

殺されかけたというのに、人が良い魔王は勇者を心配そうにゆすっている。

しかし勇者からの返事がない。これは屍になってしまったかもしれない。

「これって正当防衛だから罪にならないよね？」

さすがに牢屋には入りたくないなと思っていると、勇者が僅かに動いた。

「大丈夫そうだが、病院に連れて行った方が良いかも知れない」

「そうね。でもちよっと待って」

じいさんの手にある聖剣を取り、私はそれを肩に担ぐ。

「魔王を唯一殺せる剣、そう言ったわね」

「これだけが我が命を絶てる」

「なら、これは処分しないと」

怪訝な顔をする魔王の前で、私は剣を持って店の前にある大きな岩の前に立った。

「師匠、何をするつもりだ？」

「剣って意外と折れやすいつて世界史の先生が言ってたの」

岩に刃を叩き付けると、伝説の聖剣はあまりにあっけなくぽつきり折れた。

その途端、青ざめていた魔王の顔がいつもの色に戻る。

「聖剣を折るとは、師匠はやはりただ者ではないな」



「たかが剣じゃない。でも念のため、これもとかした方が良かったら」

「既に魔力はない、それはタダの剣だ」

「なら穴掘って埋めておいて」

「しかし勇者殿が酷く落胆するのではないか？ それに土の中ですつと過ごすの可哀想だ」

聖剣にまで同情する魔王を見てみると、やはり彼が悪人には見えない。

勿論目からビームが出たり、変な魔法を使うのは普通ではないが、普通でないことを悪というならあのじいさんだって十分悪人だ。

「ねえ魔王……」

「どうしたのだ改まって」

「何で魔王は、魔王なの？」

その質問は、今までに何度も聞こうとした物。

けれど彼の事を深く知ったら、お互いの間に大きな溝が出来てしまふ気がして、私はずっとその質問を飲み込み続けてきたのだ。

「もちろん、魔王として生まれたからだ」

しかし私の覚悟に対して、その回答はあまりに間抜けだった。

「あんたねえ！」

「だって私は生まれたときから魔王なのだ。故に魔王であることを疑問に思ったことがなく、誰かに何故と尋ねたこともなかったから、どう答えて良いかわからない」

「生まれたときから魔王って、つまり赤ちゃんの時からって事？」

「いや私に幼少期はない。先代の魔王が勇者に倒された時、私はその模造品として製造された」

王とつくくらいだから、血筋的な関係で魔王をやっているのかと思っただが、どうやら事情は少し複雑らしい。

しかし幼少期がないというのはなんだか納得がいった。

多分魔王は見た目よりも年を重ねていない。頭が空っぽだったり子どもっぽかったりするの、きつとその所為だろう。

「親から位を受け継ぐとか、そう言う事じゃないのね」

「魔王は消耗品だからな。子をなす前に勇者に倒されることが多く、その血筋はずいぶん前に途絶えてしまっている。けれど私達の世界は憎しみを糧に回っているらしく、人々の憎しみを産む魔王は無くてはならないらしい」

「だから作られたって事？」

「そうだ。魔王が人々の憎しみを生み、憎しみが多くの……何千万という勇者を生む。その勇者の活動を支えるために職が生まれ、そうして人々の社会は回っていると私を生み出した者達は言った」

それはたぶん、戦争をすると社会が潤うのと同じような原理なのだろう。

しかし残念ながら、私は社会や政治経済の授業は常に赤字。魔王の言葉から彼の世界の詳細を想像するだけの知恵を持たない。

だがそれでも彼の世界が歪んでいることは何となくわかる。

そしてそんな歪んだ世界に生まれ、それを疑問に思う間もなく死んだ魔王が、私は哀れでならなかった。

だから今度は、この世界では、勇者なんかには殺させたくない。

「安心して。あんたはもう魔王じゃなくてうちの店員、理不尽な理由で殺されたりはしないから」

決意を言葉にしながら魔王を見つめると、彼は魔王らしからぬ暖かい笑顔を私に向けた。

「殺される理由は、師匠がへし折ってしまったしな」

そう言っただけ魔王が拾い上げたのは聖剣だ。

「しかし見事に折れたな」

「安心した？」

「心配している。勇者殿が落ち込まないかと」

本当に人が良すぎる。

でもだからこそ、私は彼が好きなのだろう。

目からビームを出したり羽が生えたりした時点でおかしいとは思

っていたが、正直製造されたと言っ言葉は衝撃だった。

けれどこの笑顔を見ているとそんなことはどうでも良くなる。

だって私を救ってくれたのは、この間の抜けた笑顔に他ならないのだから。

「そんなに気になるなら直してあげれば？ 中にガムテープあるし」

そうすれば腰には差せるというと、魔王は良いアイディアだと笑って店に戻っていく。

冗談のつもりだったし、たぶんガムテープの巻かれた剣を渡された方がじいさんは傷つくと思ったが、あえて私は止めなかった。

私の今までの不安と、そして魔王の一生を思えば、それくらいの嫌がらせは当然だ。

「師匠、ガムテープが見つからないのだが何処にあるのだ」

そう言って手を振る魔王に苦笑して、私は店へと戻る。

ふと店内を見回すと、相変わらず勇者は死んだままだった。

そう言えば魔王は無一文だったが、この人お金を持っているのだろうか。

保険に入っているとは到底思えないし、怪我は思いの外大きそうなので治療費も高くつくだろう。

いつそ殺しておいた方が楽だったかも知れない。

そう思う自分の方がよっぽど悪人だと思いつつ、私は治療費を確保するためレジスターを開けた。

## Episode 51 オフショット

今朝もまた、我が家には罵声が飛び交っている。

原因は先日ひよっこり現れた勇者殿と、それを家に泊めたいと申し出た私だった。

行くところも帰る術もないという勇者殿が放っておけず、師匠に無理を言っただけに置いて貰ったのだが、残念な事に師匠と勇者殿はあまり相性が良くないようだ。

その上勇者殿は師匠に殺されたことを根に持っており、師匠は勇者殿が私を殺したことを根に持っている。

別にどちらも大したことではないと思うのだが、二人はそうは思えないらしい。

それ故、二人は事あるごとに喧嘩をしているのだ。それも割と些細なことだ。

「わしは目玉焼きの黄身は堅い方が好きなんじゃ!」

「だったら自分で作りなさいよ!」

「わしは勇者だぞ! 料理などはせぬ!」

「じゃあ文句言わずに食べて!」

「こんなグジュグジュの黄身は嫌じゃ!」

そんなやり取りを聞きながらリビングに顔を出せば、勇者殿の投げた目玉焼きが師匠の顔にぶち当たるところだった。

これはまずい。非常にまずい。

そう思って師匠を羽交い締めにするれば、彼女は手にしていた熱々のフライパンを振りまわしながらあいつを殺すと喚んでいる。

さすがの勇者殿も、師匠のフライパンの恐ろしさを知っている故この場は引き下がったが、やはりこれはまずい。

このままでは、師匠が勇者を殺すのは時間の問題だろう。

勇者殿を家に置いて欲しいと言ったのは私だ。ならば二人の仲を取り持つのは、私の義務。

それに全ての争いの根っこにあるのは、私と勇者殿の間に横たわる深い溝だ。

これを無くし彼の警戒心が解ければ、師匠にも優しく接して貰えるかもしれない。

そう決意した私は、師匠が寝静まった深夜、勇者と語らいの時間を持つことにした。

「まあ、とりあえず飲んでくれ」

まずは仲直りの印にとシェイクを差し出すと、勇者はそれを怪訝な顔で見た。

「毒入りか？」

「いや、バナナとアイスクリームとミルクが入っている」

真面目に答えると、勇者殿は酷く怪訝そうな顔で私を見つめた。

「貴様、以前と雰囲気がいぶん変わったな」

「師匠のお陰だ。彼女が、私を変えてくれた」

「魔王が人の女に惚れるなんてあり得ん」

「惚れてはいない、好きただけだ」

「惚れるのと好きは同じだぞ」

「そうなのか？」

それは是非詳細を聞かねばと思ったが、何故だか勇者殿は不機嫌な表情になってしまった。

「私に聞くな。お前の所為で、恋には縁がない人生だったんだ」

「もしかして独り身なのか？ それは寂しいな」

「お前に言われたくない！」

ドンと机を叩き、勇者は悔しそうに頭を抱える。

やはり、勇者と私の間の溝を埋めるのは簡単ではないようだ。

しかたなく、私は考えを改めた。

私を好きになって貰うのは無理だが、彼に師匠の良さを知って貰う事なら出来ると思ったのだ。

「私を恨むのはわかる。しかし師匠にはあまり当たらないでくれ」

「あの小娘は礼儀がなっていない！ わしは勇者なのに、敬おうと

もしない！」

「彼女は肩書きや立場で人を計らない。しかしそこが、彼女の良さだ」

その後も師匠の良さを語っては見たが、残念ながら勇者殿の心にはあまり響いていないらしい。

こうなれば、語るより見せた方が良さだろう。

「魔王が好きになるほどの女性だ、心を開けばきっと貴方も好きになる」

そう言っただけで私が勇者の前に広げたのは、私がコレクションしている師匠の写真だ。

「今度は何だ」

「師匠がどれくらい可愛くて素敵か貴方に知って貰おうと思って」

「さっきの褒め殺しもそうだが、これはのろけか！ 貴様ののろけか！」

のろけがなんだかはよくわからなかったが、尋ねても勇者殿は答えしてくれなかった。

なので仕方なく、写真の中でも特に写りが良い物選んで、私はそれを差し出す。

「自然な笑顔が素敵だろう。友人に隠し撮りのやり方を教わって、こんなに綺麗に撮れるようになったのだ」

オフショットという奴だと胸を張ったとき、突然勇者が一枚の写真に目をとめた。

「うっ美しい！」

「そうだろう」

「ちがう、こちらのご婦人だ！」

そう言っただけで勇者が指さしたのは、師匠と並んで写っているケリーである。

「彼女は隣の家にすむ私の友人だ。私と師匠のことを子どものように可愛がってくれている」

「魔王を子どものように……なんてお人だ……」

「良かったら明日会いに行くか？ 丁度クッキーをもらいに行く日なんだ」

「まっ、魔王の手など借りぬ！」

「なら玄関の横にある小さなボタンを押すと良いぞ、それを押すとケリーが出てきてくれる」

「ドアベルくらい私の世界にもある！」

「そうなのか？ 私の城にはなかったから、てっきりこの世界の物だと思っていた」

「どうやら私は、想像以上に私の世界のことを知らないらしい。」

「そうだ、良ければ元の世界のことを聞かせてくれ！ 師匠や友人達に色々質問されるのだが、私には答えられないのだ」

「そう言つと、何故だか勇者はとても悲しげな顔で私を見た。」

「ダメか？」

「それでも頼めば、勇者は降参だと手を挙げる」

「花屋の場所を教えるなら、考えよう」

「出された交換条件に、私は大きく頷いた。」

「そして私は、勇者の家がどんな作りであるかを知った。」

「師匠に家には劣るが、とても住みやすそうな家であると告げると、

「お前のお陰でわしは金持ちだからな」と勇者は得意げに笑った。

「彼の役に立てたのなら、私の死も無駄ではなかったのだろう。」

「それが嬉しくて、バナナシェイクにホイップクリームを足せば、

勇者はようやくやく口を付けてくれた。

「美味しいな」

「その言葉は、なんだか私の心をとても温かくしてくれた。」

「それが嬉しくて微笑んでいると、勇者もほんの少しだけ笑ってくれる。」

「だがそこに、タイミングが悪く師匠が起きてきてしまった。」

「二人で何か企んでるの？」

「多分冗談のつもりで言った言葉なのだろう。しかしそうとも知らない勇者殿は、またしてもけんか腰な否定の言葉をぶつけてしまう。」

お陰でまたもや二人は口論を始め、何故だか最後は私が手ひどく殴られた。  
前途多難である。



## Episode 52 協力

勇者殿がこちらの世界に来て早1週間。

しかし残念ながら、相変わらず師匠と勇者殿の溝は埋まらない。

もはや二人の喧嘩は、毎日の恒例行事になってしまっている。

「もう限界…もう耐えられない……。すぐ、今すぐその鎧を脱いで風呂に入って！」

「敵前で防具を外せというのか貴様！ これだけは、この鎧だけは死んでも脱がぬ！」

「じゃあ今日こそ出てっつてよ！」

「元々長居をするつもりはない！ 魔王の首をくれるなら今すぐ出て行ってやる！」

「とか言っつて、ここ一週間はテレビ見ながらゴロゴロしてばかりじゃない！」

「そっそれは聖剣が折れてしまったから仕方なく……」

「当初の目的を忘れて、うっかり恋愛ドラマにハマッてるの知ってるんだからね！」

「はまっつてなどいない、私はただ参考に……」

「ついでに言つと、ケリーお婆ちゃんに片思い中なもの、相手にされないのも知ってるんだから！」

そしてこの日も、師匠の一言によって喧嘩は終わりを迎える。

魔王を倒すほどの実力を持つ勇者殿であつても、やはり師匠には叶わない。

今のところ口げんかは勇者殿の全敗で、そのたびに彼は悔しそうに顔をゆがめるのだ。

そしていつもなら、彼は泣きそふな顔で師匠を睨んだ後、意地になつてバスルームに立てこもる。

だが今日は、最愛のケリーの名を出されて相当悔しかったのだろ  
う。

ついに勇者殿は全てのプライドをかなぐり捨て、私を見たのだ。「協力しろ」という眼差しで。

勇者殿に助力を求められた魔王は、きっと私が初めてだろう。これは非常に光栄なことである。

「いくら何でも今のは酷い。勇者殿の恋は本気なのだ」

「なによ、あんたもこいつの味方なわけ！」

「たしかに勇者殿の二オイは最悪だ。何せあのケリーが死んでも近づきたくないと言うほどだ。だが聖剣が折れた今、勇者殿のアイデンティティーはあの臭くて汚い鎧だけなのだ」

私がそう言うと、勇者殿が息をのんだ。

たぶん助けを求めつつも、魔王である私が、自分のフォローをするとは思っていなかったのだろう。

「私にとって師匠が無くてはならない存在であるように、勇者殿にはあの鎧が必要なのだ。命より大切に常に側に置きたい物なのだ。」

その所為で周囲の人間全てから「絶対近づきたくない」と思われても構わないほどに」

その後もあの鎧の大切さを熱く語れば、ついに師匠が「本当に大切なら仕方ない」と折れた。

勇者殿でも勝てない師匠に勝てた。

その事実には私も驚き、そして勇者殿と共に勝利の喜びを分かち合おうとした。

だが振り返ったそこに、勇者殿の姿はなかった。

かわりに、いつの間にかバスルームの扉が閉じている。

「せっかく師匠の許しが出たのに、勇者殿はまた籠もってしまったのか？」

「あなたのお陰で現実が見えたんでしょ」

どういいう意味だと尋ねた私の肩を叩き、「協力ありがとう」と師匠が笑う。

私が協力したのは勇者殿のはずだったのに、何故師匠は礼を言うのだろうか。

そう考えていると、どこからともなく石鹼の香りが漂ってきた。  
そこで私ははたと気付く。

もし勇者殿が帰ってきたら、体臭を石鹼に香りに変える魔法を使おう。そうすればきっと、師匠もケリーも彼のニオイに顔をしかめることはない。

我ながら良い案が思いついたと喜びつつ、私は勇者殿が出てくるのを待つことにした。

きっとこれで、勇者殿も私を見直してくれることだろう。

### Episode 3  いつの間にか

「いつの間に店員が増えたんだ」

久方ぶりに店を訪れたチャーリーが指さしたのは、危うい手つきで皿を片づけている勇者殿だった。

「彼は異界人なのだ。私と同じ世界から来て、帰る術がないというので師匠のうちに暮らしている」

「じゃあ宿賃変わりに働かせているのか」

「私が二人分稼ぐと言ったのだが、家に置いておくのは危険だと師匠が主張してな」

コップを派手に割っている彼の姿を見て、チャーリーはなるほどと頷く。

「でも最近あの子が不機嫌な理由がわかったよ。せつかくの二人暮らしにあんな邪魔者がいちゃな」

「師匠が不機嫌なのは、彼が私を殺そうとするからだとおもっが？」

「殺人鬼には見えないけど」

「殺人鬼ではなく勇者だ」

「まあ、あの子とお前の仲を邪魔するなんて確かに勇者だけどさ」

そう言う意味ではなかったが、チャーリーの言葉に私は不安になった。

最近勇者殿が気がかりで、師匠と語り合う時間が少なくなっているのは事実だ。

「老人介護は大変かも知れないけどさ、あの子のご機嫌もちゃんと取れよ」

最近学校ですげえ荒れてるんだ。

そう言うチャーリーの言葉に、私は慌てて師匠のいる厨房に駆け込んだ。

言われてみると、師匠はいつもの5倍は不機嫌だった。その上少し元気がないようで、どこか惚けた顔でトマトを切っている。

「師匠すまない！ 私は師匠を蔑ろにしていた！」

そう言っただけで背後から抱きつけば、師匠がギャーと叫んで包丁を振りまわした。

「突然なによ！」

怒る師匠が怪我をしないように包丁を取り上げて、私は師匠にすまないと謝罪をする。

「チャーリーに言われたのだ。勇者だけでなく師匠の相手もちゃんとしろと」

「そっそんな事で拗ねるほど子どもじゃないし……」

と言いつつ、師匠が視線をそらす。

師匠が目をそらすのは、本音を隠したいときだ。

「嘘をつかなくて良い」

そう言っただけで私は師匠の顔を私へと向けさせる。

「私は師匠に不快な思いをさせたくない。勇者殿を家に呼んだのは私の我が儘だし、それで嫌な思いをしているならちゃんと言って欲しい」

私の言葉に、師匠はようやく私の目を見てくれた。

「正直言つとね、私あの人苦手なの。無駄に態度がでかいところとか、週に1回しかお風呂に入らない所とかは我慢できるんだけど、やっぱりあなたに剣を向けた奴には優しくできない」

その上師匠は、自分は心が狭いのだと悔やむ。

「それに私、本当はずっと……」

何か言おうとしたが、師匠は急に黙り込んでしまった。

どうしたのかと尋ねようとして私は思わず息をのむ。下を向いた師匠の肩が、震えているのに気付いたのだ。

「泣いているのか？」

「大丈夫。ただちょっと怖くて……」

絞り出したその声は、いつもの師匠からは考えられないほど細く、そして弱々しかった。

「あなたのこと守るって言ったけど、毎日毎日不安で……。あの勇者

が突然また襲ってきたらどうしようとか、あんたに何かあったらどうしようとか」

「勇者殿はそんなことはしない。不意打ちや奇襲は彼の正義に反するし、聖剣がなければ私を傷付けることは出来ない」

「それはわかっているの。一緒にいるとあのじいさんが悪い人じゃないってわかるし、今はあんたよりケリーにお熱だし」

だがそれでも怖いのだと言いながら、師匠は私の服をギュツと掴んだ。

「魔王がいなくなったらって、前より頻繁に思うようになったじゃない、一度思うと不安な気持ちが消えてくれなくて……」

そこで、師匠がきつく唇を噛んだ。

こらえる声と、涙が落ちるかすかな音で私はようやく気付く。彼女がどれほど強く、私の身を案じてくれていたかを。

「ありがとう」

そう言って体を抱き寄せれば、師匠の涙とこらえていた声が私の胸にぶつかった。

まるで子どものように泣きじゃくる師匠を抱きしめながら、私はただひたすらに「ありがとう」と「すまない」を繰り返す。

それしか言えぬ自分が齒がゆくて。師匠の涙を止められない自分が悔しくて。

なのにほんの少しだけ、嬉しいと感じてしまったのはやはり私が魔王だからなのだろう。

もし自分が人だったらと。もしこの世界で生まれ、ただの人として師匠と出会っていたらと私は願う。

そうすれば師匠を泣かすこともなかったし、泣く師匠を見てこんな汚い感情を抱くこともなかっただろう。

「すまない」

そう繰り返して、でも師匠の体を手放すことも出来ぬまま、私はただ立ちつくしていた。

それからどれほどの間、そうしていたかはわからない。

いつの間にか師匠の体が重くなり、気がつくと彼女は気を失うように眠っていた。

よく見れば目の下に濃いクマがある。

師匠の不安に気づけなかった自分を悔やみながら、私は師匠を抱きかかえたままホールに出た。

「あの男は帰ったぞ」

そう言ったのは客のいないホールに一人立つ勇者殿だった。

「申し訳ないが、店のネオンを消してきてくれないか？　今夜は店じまいにしたい」

私が言くと、勇者殿は頷いた。だが彼は店を出る前に、ふと足を止める。

「その娘に、謝っておいてくれないか？」

「それは構わないが何かあったのか？」

皿でも割ったのかと尋ねると、勇者殿は悔やむような顔で首を横に振った。

「いつの間にか私は勇者としての心得をすっかり忘れていたらしい」

「心得？」

「魔王にすら少女を思いやる気持ちがあるというのに、私にはそれすらなかったようだ」

それから勇者殿は、チャイリーから私と師匠がどのように出会い、暮らしていたかを聞いたと告げる。

「あの男の話聞いて思ったのだ。私は大きな間違いを犯していたのかもしれないと」

「勇者殿でも間違える事があるのか？　過ちを犯すのは魔王の仕事ではないのか？」

「わしもそう思っていたが、それこそが過ちなのだろう」

そう言って、勇者殿は苦笑する。

「その娘が不安で壊れてしまわないよう、これからはわしも協力し

よう」

それは非常に助かる申し出だった。

悔しいが、私は不安を与えるのは得意だが不安を拭う術を持たないのだ。

「やはり勇者殿は頼りになるな」

「そんなことはない。むしろ勇者にも出来ない事は沢山ある」

「例えば？」

「……1週間に2回以上は風呂に入れない」

石鹸のにおいが嫌いなのだと、勇者殿はポツリとこぼした。

「どうやら、私は魔王であるにもかかわらず、勇者殿の弱点すら知らなかったようだ。」

それに驚くと同時に、言葉を交わす事がいかに重要であるか、私は再確認する。

「師匠の不安も、勇者殿が風呂嫌いな理由も、ちゃんと言葉を交わせばすぐにわかったことなのに、それを怠った所為で二人を不快にさせてしまった。」

「これからは師匠ともっと言葉を交わそう。」

「そして勇者殿のために薔薇の香りのソープを買おう。」

「そう決意して、私は腕の中の師匠を強く抱いた。」



**Episode 3 いつの間にか(後書き)**

10/16 誤字修正しました(ご指摘ありがとうございました)

## Episode 54 うるさい

「あのうるさいハエをどうかしてくれないかね」

唐突にケリーが家を訪ねてきたのは、師匠と勇者が二人で出かけている時だった。

以前は仲が悪かった二人だが、勇者殿が歩み寄りを見せたお陰か、殴り合いの喧嘩は日増しに減っている。

さすがに1ヶ月も一緒にいれば慣れてくる物もあるようで、最近私は私抜きで買物に行くまでになった。

未だ口での喧嘩は良くあるが、気が合わないわけではないようなのだ。

好きな映画やドラマの傾向は似ているし、私が嫌いなジェイソンさんも二人で楽しそうに見ている。

そしてなぜだか、私はそれが少し面白くない。

「ちょっと、聞いているのかい！」

「すまない、ちょっと拗ねていた」

「ともかくあのじいさんが家に来ないようにしておくよ。毎日毎日愛の詩を大声で読まれて、こっちは迷惑してるんだ」

「愛の詩はダメか？ 二人で頑張ってるんだか」

「お前の所為かい！」

そう言っつて、ケリーはその細腕からは想像のつかない怪力で、私の襟首を締め上げる。

「だって、女の人は愛の詩に弱いとケリーが教えてくれたから」

「せめて手紙にして送れ。あとケーキをこっそりポストに入れるのもやめさせてくれ」

「頑張つて作ってるのに」

「人を糖尿病にさせる気かい！」

そう言っつて頭を叩かれ、私は激痛に呻く。

「とにかく迷惑だからやめさせてくれ」

「しかし勇者殿は本気なのだ。それに私は魔王だし、愛の力には太刀打ちできない」

そういうと、ケリーが呆れ顔でため息をこぼした。

「そもそもねえ、私には夫がいるんだよ」

「でも亡くなっているのだろう？ それに師匠も言っていたのだ、

ケリーはまだ若いし再婚相手を探しても良いと」

「あれだけはごめんだね」

「そんなに嫌なのか？」

「嫌だね、あんな欠点しかないようなジジイ」

「よければどこが悪いか教えてくれ。正すよう勇者殿に伝えておく」  
きつと勇者殿のことだ、その欠点を克服しようとして修行を積むに違いない。

「じゃあ、おつきい紙とペンを持っておいで」

言われるがままそれらを持つてくると、ケリーはその紙が真っ黒になるくらい沢山の欠点を上げた。

「わかった、全て伝えておく」

「さすがにこれで懲りるだろう」

「どうだろう。彼は幾多の困難を乗り越え、私を打ち倒した勇者だぞ」

そんな馬鹿なとケリーは鼻で笑う。

「これを聞いてもまだ愛の詩を読むようだったら、デートくらいしてやるさ」

そう言っつてケリーは家に帰って行った。

そしてその翌日、私は勇者からデートの最適なレストランの場所を聞かれた。

Episode 5 我慢

「なんか、久しぶりに二人つきりだね」

そう言う師匠は酷く嬉しそうに、私が出したケーキを食べていた。今夜、勇者殿はケリーとダイナーに出かけたので家にいないのだ。最近師匠は勇者殿と良く一緒にいるので寂しがるかと思ったが、私と二人でもとても楽しそうなので何よりである。

「確かに、こうして食事をするのも久しいな」

「あの勇者、味にうるさくて文句ばかりだから、静かな食事が恋しかったのよね」

「文句は言うが、別に師匠の料理が嫌いなわけではないと思うぞ。いつも完食していたし」

「わかってるわよ。そう言うところはある意味可愛し、嫌いじゃない」

そう言ってケーキを咀嚼する師匠。

その口の箸にクリームが付いているのに気付き、私はそれを指で拭いた。

勿体ないのでそれをなめ取ると、師匠がフォークを加えたまま不自然に下を向く。

「どうした？ 味がおかしかったか？」

「ううん、なんかその、久しぶりに二人だと意識しちゃうって言うか」

「意識？」

何でもないと呟いて、師匠はケーキの載った皿をテーブルに置く。

「ごめん、おなか一杯だからもういいや」

「やはり味がおかしかったのか？ すまない、すぐ作り直す！」

「違うわよ」

「だが師匠が何でもないと言うときは、何かを我慢しているときだ」  
そしてその台詞は日増しに増えており、私はずっと気がかりだっ

ただ。

「何でもないとされるたび、私はふがないのだ。師匠に何かを我慢させてしまうほど、私は頼りないか？」

頼りないとかそう言う事じゃないと師匠は言葉を濁すが、今日こそはその先を続けて貰いたかった。

故に私は背後から師匠を抱きかかえ、ソファーへと魔法で転移する。さすがの師匠も、背後から拘束されては逃げられまい。

「何でもないを撤回するまで、今夜は離さない」

師匠は暴れたが、今日だけは、今日こそは聞き出すと決意したのだ。

私だつて魔王だ。たまには魔王らしく、我を通すこともある。

「さあ教えてくれ、師匠は何を我慢している！」

「我慢何てしてない！」

「ならば私の目を見てくれ」

そう告げれば、師匠はやはり目をそらした。

「…なら、今夜は離さない」

「それは困る！」

「なら教えてくれ」

「それもダメ！」

「何故だ！」

思わず悪い魔王でいたときのような声で怒鳴れば、師匠の体がびくりと震える。

やりすぎたと思ったがもう遅い。

彼女だけは怖がらせたくないと思い続けてきたのに、師匠の目に私への恐怖がはっきりと映っている。

「すまない、師匠を怖がらせるつもりはなかったのだ！　ただ、私は……」

慌てて弁解しようとしたが、動揺のあまり上手いこと声が出てこない。

そんなとき、落ち着けと言うように私の頭を撫でてくれたのは、

他ならぬ師匠だった。

「怖いんじゃない、好きなの」

そう言う師匠の目に恐怖が無いことに安堵し。

それから今更のように、私は師匠の言葉にはっとした。

「今何と？」

「好きなの」

あなたが。

そう言われた直後、私は師匠に殴られたかのような錯覚を覚えた。しかし師匠は私の腕の中で、体を小さくしたままだ。

「あんたにそう言う気持ちが無いのわかってたのに、一緒にいると嫌でも色々期待しちゃって……。でもそれが上手く隠せなくて……」

「何故隠すのだ。私も師匠が好きだぞ」

「私の好きとあんたの好きは違う」

「好きでも種類があるのか？」

尋ねると、師匠は呆れと困惑が混ざった顔で私を見つめる。

「何て言うか、私の好きはあんたのより重い」

それが何故問題なのか、私には理解できない。

「重くても私ならば持てる。私は魔王だ！」

「魔王でも持てないくらい重い。だからこれは我慢しなきゃいけないし、あんたが苦労するくらいなら、私は我慢できることなの」

師匠はそう言うが、その顔はやっぱり辛そうだった。

やはり私は師匠が我慢することに我慢が出来ない。

だから人から空っぽだと言われる頭を必死に働かせ、5分ほど悩んでようやくやくひとつの案を思いついた。

「なら半分だけ持たせてくれ」

師匠に理解して貰えるように、私は必死に言葉を選ぶ。

「一人で持てないなら、二人で持てばいい。重い物ならなおさら、師匠一人に持たせるわけにはいかないからな」

「本気で言ってる？」

本気だと主張したが、師匠はまだ信じていないようだった。

「凄く凄く重い物よ。気のいいあんたが呆れるくらい」

「師匠の気持ちなら、例え重い物でも私は持つていたい」

むしろ欲しいと言った瞬間、突然師匠が私をきつく抱きしめた。

「こっこれは許可の抱擁か？」

「多分あんたは何もわかってないけど、私もう我慢できないかも…」

…

どっという意味かと尋ねようとすると、師匠が小声で「もう限界」

と呟いた。

「それは大変だ。やはり我慢は良くない！」

そう主張すると、師匠が私の腕の中で顔を上げる。

その顔を見た途端、私はジェイソンさんを初めて見たとき以上の鳥肌が立つのを感じた。

しかし怖いのではない、むしろ息をのむほど師匠は美しい。

なのに私の体は、何故だか震えそうになっていた。

「わかった、もう我慢しない」

そう言うやいなや、師匠が突然舌を使うキスをしてきたので、私は更に慌てた。

最近、私は師匠のキスに抵抗できないのだ。

いや抵抗はしているというか、舌で応戦はできるのだが、そうすると師匠の息が上がるほどキスの時間が長くなってしまふのだ。

けれどそれで良いと師匠は言う。その上、気がつけば何故かシャツのボタンが外されていた。

「おっ重いというか激しいな」

「今更撤回しても遅いから」

「師匠から貰った物を返すつもりはない」

そう答えると、師匠が私をソファに押し倒した。

師匠に上に乗られると、なんだか体が熱くなって気が遠くなる。

だが今日ばかりは気絶してはいけない気がして、私は必死に意識を保つ。

しかし次の瞬間、師匠の体が唐突に離れ、同時に彼女の悲鳴が響

いた。

何かと起きあがったが驚くことはない。

ただ、ケリーと勇者殿が戸口に立っているだけである。

「ああ、おかえり」

「おかえりではない！ 貴様何をしている」

何と言われてもこれはなんとはいえぬのだから言つ。

キスとプロレスの合わせ技としか形容できないがそれもまた違つ  
気もする。

そうして悩んでいると勇者殿の機嫌が悪くなつてしまつたが、そ  
こはケリーがなだめてくれた。

「あいつがじゃない。押し倒したのは、この子の方だよ」

確かにその通りなので同意すれば、勇者は困つた顔でもじもじし  
ている。

「この世界の娘は激しいな」

「良くあることさ」

そう言つと、ケリーは勇者の体をくるりと反転させる。

「あんた今夜はうちに泊まりな」

「あつ貴方も激しいたちか！」

「うちに来ればわかるよ」

それから師匠と私に「ごゆっくり」と告げて、ケリーと勇者は家  
を出て行つた。

残された私と師匠は無言で5分ほど過ごし、それから師匠が私の  
シャツのボタンをとめた。

「脱がなくて良いのか？」

「なんか萎えた」

と言つてソファで膝を抱える師匠は、幼い子どものようなふく  
れ面をしている。

「とりあえず、ケーキの残りでも食べるか？」

尋ねると、師匠は食べると頷く。

「よくよく考えたら、食後に魔王は重すぎる」



「もしかして私を食べる気になったのか？」

喜び勇んで心臓を取り出そうとすれば、「それよりケーキ！」と師匠が怒鳴る。

私の心臓よりケーキが良いというのはちょっと傷ついたが、師匠の機嫌がこれ以上悪くなると困るので、私は急いで台所に駆け込んだ。

## Episode 56 グルメ

ここ1週間ほど師匠の機嫌は酷く良かった。

理由はひとつ、うちの店がグルメ番組で紹介されたのだ。

お陰で客も増え、ここ1週間ほどは師匠が悲鳴を上げるほどの忙しさだった。

「凄く美味しかったよ、ごちそうさま！」

そしてお客さんたちは、口々にそう言って帰っていく。美味しいという言葉はいつも聞くが、やはりこんなに多くのお客さんに言われるのはまた格別だ。

その上客たちはチップも沢山くれるから、私の小遣いもずいぶんと増えた。

「忙しいが、良い収入だ」

ある晩、私と勇者殿と一緒にチップを数えていると、勇者殿が手持ちの1ドル札を頼ずりしながらそう言った。

お金を数えているときの勇者殿は本当に幸せそうで、見ているこっちまで嬉しくなる。

「この世界に来てずいぶんになるが、こんなにたくさんのお金を貰ったのは私も初めてだ」

「給料は貰っていないのか？」

「ああ。くれるというのだが、貰っていない」

チップも貰えるし、何より師匠の側にいられば他に欲しい物はない。

プラモデルなどは師匠の父上の物があるし、服などはチャーリーのお下がりもらえる。

丈が足りないのでズボンだけは買わねばならないが、魔王でいた頃と違いここでは戦闘行為もないので替えの服はそんなにいらぬ。

「お前は本当に欲がないな」

勇者はそう言うと、貯まったチップに目を落とす。

「勇者殿は何か欲しい物があるのか？」

もしかしてケリーに贈り物でもするのかと思ったのだが、何故だか勇者殿は悲しそうに笑った。

「したいのは山々だが、ちょっと金を貯める必要があるかもしれないのだ」

そういうと、勇者は躊躇いがちに言葉を続ける。

「そう言えばお前さん、自分が死んだときの事を覚えているか？」

「あまり詳しくは覚えていない」

正直に答えると、勇者は何かを言いかけて、それから「何でもない」と言葉を濁した。

その表情は真剣で、そして彼が必要としている物と何か関係がある気がした私は、持っていたチップを彼に差し出す。

「欲しい物があるなら 私のチップを使ってくれ」

「お前、なぜそこまでする」

「貴方が困っているように見えたからだ」

それ以外に理由など無いというと、勇者は真剣な表情を崩し、チップを差し戻した。

「いらん世話だ。それにお前こそ、あの子に何か買ったらどうだ」

「誕生日でもクリスマスでもないのでいいの？」

「好きな女には買いで買いで貢ぐ。…と言うのが、私達の世界のルールだったぞ」

ならば是非贈り物をしたい所である。

師匠から好きという気持ちで頂いたまま、私は未だ何もお返しが出来ていなかったのだ。

「しかし何が良いだろう」

「どれくらいたまっているんだ？」

「前からの貯金を合わせると200ドルくらいはある」  
意外にたまっているなと勇者が驚く。

「なら指輪だ。指輪を買え」

「でも師匠は料理人だし、指輪は邪魔ではないだろうか」

それに200ドルでは師匠がほしがっているような、宝石がついた物は買えない。

だがそれを告げても、勇者殿は主張を曲げなかった。

「私もドラマで見ただけだが、この世界では親しい女性に指輪を贈るのが礼儀なのだ。それも薬指にはめる指輪だ」

「薬指か」

「左手の薬指だぞ、忘れるな」

その顔があまりに真剣だったので、私は翌日指輪を買いに出かけた。

丁度2つセットの物が安く売られていたのでそれを買って帰ると、師匠が物凄く驚いた。

「とりあえず、こっちの奴は左手の薬指にはめてくれ。太い方は何処の指でも良いが」

「じゃああなたの薬指にはめて」

「でも師匠に買ってきた物だぞ」

「良いからはめて」

それ以外は許さないというので薬指にはめると、それは丁度良いサイズだった。

それを師匠はとても喜び、グルメ番組に紹介された時以上に彼女に機嫌は良かった。

あの師匠をここまで大喜びさせる案を持っていたとは、やはり勇者殿は凄い。

これは是非お礼をせねばと思い、私はその夜、余ったお小遣いを勇者殿が大切にしている豚の貯金箱にいれた。

最近、よく深夜に師匠が一人でベッドを抜け出す。

最初の頃はトイレが近くなったのかと思ったが、どうやら原因は悪夢らしい。

なんでも2週間ほど前から毎晩同じ悪夢を見続けているらしいのだ。お陰で睡眠時間が減り、肌が荒れると師匠は言っている。

むしろそこは悪夢を気にするところだと思うが、ホラー映画好きな所為か師匠は割と冷静だった。

その日も深夜2時過ぎに師匠はむくりと起きあがったが、悲鳴どころか冷や汗すらかいていない。

「今日も悪夢を見たのか？」

尋ねると、師匠はばつが悪そうな顔をする。

「起こしてごめん」

「かまわない。それよりも今度も同じ夢か？」

「うん。血だらけのウエディングドレスを着た女の人が、何か喋ってるのよね」

そしてその女の人とやらが立っているのはこの家の中らしい。その上彼女は、日に日にこの寝室に近づいているというのだ。

「ホラー映画は好きだけど、さすがに少し気味悪いわよね」

このまま悪いことが起きたらどうしようと言う師匠に、私が思い出したのは前に見たホラー映画だ。

こういう場合、最後は本当に幽霊が現れ、夢を見た人を殺してしまうのだ。

それは困る。非常に困る。いくら師匠でも、さすがに幽霊には勝てないはずだ。

「今日は何処に？」

「その、廊下の角の所」

もうすぐそこではないかと慌て、私は師匠を抱き寄せる。

「師匠を何としても守らねば」

「っていうけど、あんた幽霊苦手じゃない」

「師匠のためなら、例え相手がジエイソンさんでも戦う」

若干声が震えてしまったが、その言葉に嘘はない。

「でも戦うって言うても、どうすればいいのかしらね」

当事者でありながら妙に冷静な師匠に指摘され、私は返す言葉がなかった。

残念ながら魔王には幽霊を見る機能がない。魔剣は使役できるが悪魔のたぐいを召喚するのも無理だ。悪魔に近い容姿には変身できるのに、なんとも不便な話である。

「戦えなくてもなんとかする」

「なんとかかって?」

「とりあえず原因を考えてみよう」

そうすれば解決策が見つかるかも言えば、「珍しく頭が働くわね」と師匠が褒めてくれた。

「最初に悪夢を見始めたのはいつだ?」

「2週間くらい前かしら」

「きっかけになるようなことがあったか?」

「全然」

「なにか、封印的な物を壊したとかは?」

「無いわよ。丁度グルメ番組に紹介されて忙しくなってた時だし、学校と家とダイナーの往復しかしてない」

「しかし訳もなく悪い幽霊にとりつかれるわけがない」

「でも私には心当たり無い物」

忘れていただけではと食い下がったが、師匠の機嫌が悪くなっただけで大した情報は得られなかった。

仕方なく、今度は私が2週間前のことを思い出す。

確かに師匠が何かを壊した記憶はない。

それにそもそも、師匠が人の悪意を買うようなことをしたとは思えない。魔王の私ならともかく。

そう考えてふと、今更のように自分に原因があるのではと言う考えが浮かんだ。

魔王は人から恨みを買ったための存在だ。ならば同じ要領で、幽霊の恨みを買っていてもおかしくはない。

慌てて、私は2週間前の事を更に詳しく思い出そうとした。

しかし師匠同様、私もダイナーの仕事が忙しくロクに出かけていなかった。

唯一街に出たのは、師匠に指輪を買ったあの1回くらいのものだ。「あの日も、指輪を買っただけですぐダイナーに戻ったしな」

その間に猫でもひいてしまったのかと考えた瞬間、師匠が自分の薬指に目を落とした。

師匠の視線の先にあるのは、もちろん私が買った指輪である。

師匠はそれが気に入ったらしく、昼間は勿論夜寝るときもはめているのだ。

また友達や店の客にもよく自慢しており、何故だかそのたびにおめでとうと言われるので、師匠は更に喜んでいたのだ。

だがいつもは指輪をうっとり見つめるその目が、今日はどこことなく不安に揺れている。

「そう言えば、夢うつつに何かをかえせとか言われてた気が……」

いや、でも、そんな映画みたいな事……でも魔王が買った物ならもしかして……」

となにやら一人会議を始めた師匠を眺めていたら、不意に師匠が指輪のはまった左手を私の前に突き出した。

「この指輪、ちゃんとしたお店で買ったのよね？」

「店というか露天商だ。ちゃんとしている、とは言い難いかもしれない」

むしろどちらかと言えば怪しい黒人が売っていたというところ、なぜだか師匠の顔が青ざめた。

「もしかして、買うとき何か言われなかった？」

「気を付けて、と帰りの心配をされた」

直後、私はベッドから派手に落ちた。むろん、殴り飛ばされたからである。

「何でよりもよって呪いの指輪を買ってくる！」

呪いの指輪とは何だとウツカリ質問してしまったお陰で、その晩は師匠のホラー映画コレクションのなかでも特に怖い、ジャパニーズホラーの映画を見せられた。

それは恨みの籠もった指輪を買ってしまった女性が、死んだ前の持ち主に理由無く追いかけられ、ついには死んでしまうという内容だった。

「なるほど、この指輪は映画の中に出てきた物と同じなのだな」

スタッフロールを見ながらそう言えば、師匠は泣きそうな顔で明日返しに行こうと言った。

言われるがまま指輪を怪しい露天商に返せば、それ以来師匠の悪夢はピタリと止んだという。

それに私は喜んだが、残念ながら問題は終わっていないかった。

悪夢を見ていた頃より、目に見えて師匠の元気がなくなったのだ。それが気になって観察していると、師匠は良く指輪がはまっていた薬指をいじっている。

そして時折手をかかげ、大きなため息をつくのだ。

馬鹿だ馬鹿だと言われている私でも、さすがに師匠のため息の理由はわかる。

「師匠、もしかしてあの指輪が恋しいのか？」

ある晩指を撫でている師匠に声を掛けると、彼女はばつの悪そうな顔をする。

「よかつたらまた贈らせてくれ。今は小遣いが足りないが、お金が貯まったらまた薬指にはめる物を買おう」

「もう良いのよ」

「でも今度は普通の、幽霊が憑いてないのをちゃんと選ぶ」

我ながら良いアイディアだと思ったが、師匠は喜んでくれなかった。



「本当にいらないの。そもそも、私はあんたから指輪なんて貰っちゃいけなかったの」

「どうしてだ？ 私は師匠に喜んで貰いたくて買った物だ。師匠が付けずに誰が付ける」

「普通の指輪なら別に良いのよ。でも、薬指にはめるペアリングって特別な物だから」

そうして、師匠はペアで付ける指輪の意味を私に教えてくれた。

「恋人同士が、つけるのか……」

「うん。こういうのは、ちゃんと思いが通じ合った相手同士しか付けちゃいけないの」

「だけど貰えたのが嬉しかったから、外したくなかったからそれを言えなかったと師匠は言う。」

「私達は、思いが通じ合っていないのか？」

「同じ指輪を着けるにはまだ足りないのよ、だから本当の持ち主が返せって言いに来ちゃったのね」

そう言われると何故かとても切なくて、でもどうすれば通じ合えるのか私にはわからなかった。

その上私は、今更のように師匠と思いを通じ合わせることが酷く困難である事に気付く。

魔王は元々人の恨みを集めるために生み出された物だ。故に人と思いを通じ合わせるような機能はない。

それはつまり私と師匠は一生思いが通じ合えないと言うことだ。

そこまで理解して、そして私は今更のように自分の願いに気付いてしまった。

私はきつと、師匠の恋人になりたかったのだ。ずっと一緒にいることは他人でもできるかもしれない。

でも私が欲しいのは師匠に最も近い場所なのだ。恋人だけが手に出来る、師匠を独占できる場所なのだ。

けれどそれは、私には決して手に出来ない場所でもある。恋人となるための大事な物が、私にはないのだから。

「だから指輪は我慢するわ」

しかし師匠にそう言われると、私の方が我慢がなくなってしまう。

恋人にもなれないということは、きっと本当の家族にもなれない。それを知ってしまったのに、私は師匠を手放せそうもないのだ。

「私は本当に悪い魔王になってしまったのかも知れない」

思わず師匠を抱き寄せると、師匠は酷く驚いていた。だが手放せない。手放したくない。

「思いが通じ合えないのに。彼氏にもなれないのに私は師匠が欲しいのだ」

そう言つと師匠が真っ赤になってうつむく。

「彼氏でもないのに誰にも渡したくない。家族になりたいしキスもしたいしずっとこうしていたい」

それにはどうすればいいと縋る思いで尋ねると、師匠が彼女らしい凛々しい顔で私を見上げた。

「あんたがしたいようにすればいい」

「だが私がしたいことは……」

「あんたは通じ合えないって言っけど、私がして欲しいことは全部あんたがしたいことだから」

そんな奇跡のようなことがあるのかと尋ねると、師匠はあるのだと言いつ切る。

「それにやっぱり、幽霊付きじゃなかったら指輪もちゃんと受け取るから」

「通じ合っていないなくても良いのか？」

「あんたがあげたいって思って、私が欲しいって言ったらそれは通じ合ってるって事でしょ？」

「うむ」

「それで、あんたは指輪を贈りたいの？」

「師匠は欲しいか？」

お互いの問いかけに私達は同時に頷いた。

「通じ合うというのは意外と簡単だな」

ホツとしたと言えば、師匠が私の頭を撫でてくれる。

「とにかく、思ったことは言葉にしてみなさい。あんた馬鹿だから、恋やら精神論やらを説明してもわからないだろうし」

確かに難しいことを理解するのが私は苦手だ。

特に恋愛や心のやり取りについてはチャーリーから色々と言われたが、未だによくわからない。

「だからとにかく考えたことは言葉にして。そうすれば数学の答え合わせみたいに、思いを確認できるでしょ？」

確かにそれは良い考えだと頷くと、師匠も微笑む。

「心のない魔王と通じ合うなんて、やっぱり師匠はただ者ではないな」

そしてきつと私はそう言うところがたまらなく好きなのだ。

「師匠」

「なに？」

「例え通じ合えなくても、愛している」

「言えとは言ったけど、これは少し恥ずかしいかも……」

そう言っただけで赤くなった師匠を見ると、私は更に愛していると連呼したい気持ちになった。

「師匠、あと3万回くらい愛してると言いたいんだがいいだろうか」

「また睡眠不足になるから、10回くらいにして」

「20回は？」

「……じゃあ15回」

15回、師匠にすっかり届くように愛していると告げた。

だが翌日、睡眠不足になるからという理由で、寝る前に言って良い愛してるの回数は10回までと師匠に決められてしまった。

私にとってそれは安眠の呪文だが、師匠に取っては悪夢以上に睡眠の妨げになるらしい。

## Episode 58 見せ所

「魔王」

「どうした師匠？」

「私達、少し距離を置こうか」

師匠の言葉に私はその場から5歩ほど下がり、側にいた勇者殿は飲んでいたモーニングコーヒーを拭きだした。

「距離ってそう言う距離じゃないんだけど……」

「もつと遠くと言うことか？ それは嫌だ、師匠が側にいないと落ち着かない」

既に今の時点で落ち着かないというと、師匠が酷く困った顔をした。

「前は離れてても大丈夫だったじゃない」

「それは師匠への愛に気付いていなかったからだ。しかし今は、師匠と一秒たりとも離れたくない」

そこで勇者殿がまたコーヒーを拭きだした。その上激しく咳き込んでいる。そろそろ気管支が弱ってきているのかもしれない。

「その気持ちは凄く嬉しいんだけど、度が過ぎるとさすがに恥ずかしいのよ」

「でも高校生というのは過度なスキンシップが好きなのだろう？」

「嫌いじゃないけど、やり過ぎて言うか……」

「例えば何を控えればいい？」

「言わせないでよ」

「でも言ってくれないとわからない」

「とりあえず、キスの回数が多すぎるかなと」

「キスは嫌いか？」

思わず肩を落とせば、師匠が慌てて嫌いではないと首を振る。

「でも朝も昼も晩も、家でも出先でもダイナーでもするのは勘弁っというか……。ましてや高校の前で待ち伏せしてキスをせがむのは、

さすがの私も恥ずかしいかなって」

「……わかった、頑張つて我慢する」

「あと同じように抱きしめるのも程々にして欲しい」

特に外では回数を減らしてと言われ、私は渋々頷いた。

「じゃあ、その分ベッドの中でギユツとする」

ここでまた勇者殿がコーヒーを拭きだしたが、いつの間にかタオルを用意していたようで、テーブルが汚れることはなかった。

「あと最近色々世話焼いてくれるけど、それもいらぬから」

「何故だ。彼女の世話を焼くのは彼氏の役目だと教わったぞ」

こればかりは譲れないと身を乗り出したが、相変わらず師匠は渋い顔である。

「学校の送り迎えとかは嬉しいけど、食事を食べさせるのとかやりすぎよ。お風呂も一緒に恥ずかしいし」

「でもテレビや映画の恋人たちは良くそうしている」

それに、そう言うのをこなす事こそ彼氏の特権であり腕の見せ所だと友から教わったのだ。

「食事はアーンが基本、お風呂では体を隅々まで洗いっこして、寝るときは愛の言葉と子守歌がセオリーなのだろう？」

「誰に聞いたのよそれ」

「チャーリーだ」

やりすぎて別れる奴もいるけどと注意はされたが、師匠と私にその心配はない。

そう思い実行したのだと告げれば、何故だか師匠がここではないどこかへ殺気を放った。

「ともかく、普通にしましょう普通に！ じいさんだっているんだし、見せつけるのは可哀想でしょ」

そうなのかと勇者殿に尋ねると、彼は真っ赤になってコーヒーを啜る。確かにあれは困っている顔だ。

「たしかに気が利かなかったな」

反省して、私は勇者殿の隣に座った。

それから彼が使っていたフォークを取り上げ、皿に残っている食べかけのソーセージをフォークに突き刺す。

「では、勇者殿にもアーンをしよう。仲間はずれはいけないしな」

直後、勇者殿が今まで以上の勢いでコーヒートを吹いた。側にいた私は全身コーヒーマみれになったが、勇者殿は謝るより前に怒り出す。

「何故そうなる！」

「だって見せつけるのはダメだと師匠が」

「だからってわしにアーンはないだろう！」

「なら一緒に風呂にはいるか？ 頭や体を洗うのは得意だぞ」

毎日師匠を洗っているから上手いはずだと言えば、勇者殿は持っていたカップを握り砕いた。

「わしは勇者だぞ！ 何が悲しくて魔王のお前と風呂に入らねばならん！」

「遠慮しなくて良い」

「そう言う意味ではない！」

肩を怒らせて、そして勇者殿は私を睨む。

「お前こそわしに気遣いなんて無用だ！」

「しかし勇者殿にも気持ちよく過ごして頂きたい」

だからお風呂で気持ちよくしてあげたいのだと言ったが、勇者殿は怒るばかりだ。

「構うなど言っているのだ！ もうすぐここを出て行くのに、誰が好きこのんでこれ以上の悪夢を増やすか！」

それは残念だと思った直後、私は彼の言葉に引っかかりを覚える。だが私が尋ねるより早く、師匠が嬉々として身を乗り出した。

「もしかして、ケリーと上手くいったの！」

「んなわけあるか！」

自分で言っただけで、そして勇者殿は傷ついた顔でその場に泣き崩れた。私も師匠と同じ事を考えていたので、何となく申し訳ない気持ちになっってしまう。

「でも出て行くって、あんた何処に行くのよ？」

「……元の世界に帰るだけだ」

その言葉に師匠が驚くと、勇者殿は誤解するなと涙を拭いた。

「そいつは連れて行かん。ただ、この世界での仕事が終わった故、わしは帰るだけだ」

「仕事してたの!？」

「失敬だな小娘！」

怒りを露わにしつつ、勇者殿は「ちょっと待っている」と部屋に引っ込んでしまった。

そして待つこと5分。勇者殿はあまりに意外な物を持ってきた。

「どうだ、ジョン・ウェインみたいじゃろう！」

そう言う勇者殿の腰にはガンベルトと、西部劇に出てくるような古い銃がささっていた。

「何処で盗んだの？」

「勇者殿、盗みは良くない」

私と師匠が同時に口を開くと、勇者殿は馬鹿にするなと銃を抜いた。

「買ったのだ阿呆！」

「お金はどうしたのよ」

「お前等に隠れて、芝刈りやらスーパーのレジうちをしてコツコツ稼いだのだ！」

そう言えば最近、勇者殿は家を空けることが多かった。それもこれも、このガンベルトと銃を買ったためだったらしい。さすが勇者殿、努力家の鏡である。

「っていうか、じいさん。こんなの買ってどうするのよ」

「むろん、魔王を倒すのじゃ！」

途端に師匠が鬼の形相でフライパンを持ち出したので、勇者殿は慌ててソファアの影に隠れた。

「待て、私が倒すのはそいつではない！ わしの世界にいる、今の魔王じゃ！」

勇者殿の言葉に、私は自分が生きていた頃のことを思い出す。

たしか、私が死ぬ以前から次の魔王は製造されていた。

そもそも私はちよつとした欠陥があり、長くもたないと言われていたのだ。

それ故すぐに起動できる次期魔王がスタンバイしており、私が倒された後は彼が世界を破壊と絶望の渦に巻き込む予定だったのである。

「もしかして勇者殿は、私とは違い理由があつてこちらの世界に来たのか？」

「お主、自分が死んだときのことを覚えているか？」

尋ねたのは私だが、逆に勇者殿が申し訳なさそうな顔で質問を投げかけてくる。

正直、自分が死んだときは良く覚えていなかった。

だが勇者殿の銃を見ていると、おぼろげだったいくつかの記憶が色を持ち始める。

「そう言えば私を殺したとき、勇者殿は聖剣とは別の武器を持っていなかったか？」

それも今持つている銃に似ていたと言えば、勇者殿は頷き、そして師匠がハツとする。

「そう言えばあんたの体、脇腹の所に変な傷があつたわよね」

切り傷とは違う傷だったと師匠が言う。

「そうなのか？ 私は良く見えないのだが」

「まあその、私の方が近くで見える機会はあるって言つか」

「確かに、師匠は私の腹部を嘗めるのが好きだからな」

途端に一発殴られた。

「そうか、小娘は嘗めるのが好きなのか」

「話をそらすな！」

そう言つと、師匠は赤くなりながら勇者を締め上げる。

「でもどういふ事よ、あんたの世界って剣とか魔法とかそう言つので敵を倒す世界なんですよ」



死にそんな顔で頷いて、勇者は事情を話すと訴えた。

「私達の世界にはこのような強力な武器はない。故に私は今一度、こちらの武器を得るために世界を越えてきたのだ」

「今一度つて事は、あんたは前にも？」

「その魔王を倒す直前、私は世界を飛び越えた。その魔王を殺せたのは、この世界で得た武器を使ったからなのだ」

言葉にされて、ようやく私は思い出す。

剣で心臓を突きさされたものの、勇者殿は魔力も低く、私の命を奪うまでの実力はなかったのだ。

だがその直後、魔法とも違う衝撃と痛みが私を唐突な死へと誘った。

「つまりあんた、ズルして勝ったつて事?!」

「ズルではない！ 世界を飛び越えられたのはひとえに私の実力のうち」

と勇者殿は言うが、何かが引っかかる。

その引っかかりについて考えていると、私はついに自分の最後の瞬間をはっきりと思いだした。

痛みに倒れたとき、私の死を確認しに来た勇者殿の胸から、小さな魔石のような物が私の上に落ちたのだ。

それが体に触れた瞬間、私の体は師匠のダイナーの前にあった。

多分あの石こそ、世界を転移する魔力を秘めた物なのだろう。

しかしそれをここで言うのと、勇者殿が師匠にけちよんけちよんにされてしまう気がしたので、私はあえて黙っていた。

「お陰で私は勇者となった。だがしかし、程なくして現れた新しい魔王はお前をも上回る強さと残忍さを持つ者だったのだ」

多くの勇者が戦いを挑んだが破れ、その上魔王はたくさん町の村を破壊しているという。

「勇者の数も3分の一まで減り、世界はめっちゃくちゃだ」

「では勇者殿はそれを救うために今一度この世界へ？」

尋ねると、勇者は首を横に振った。

「わしは逃げてきたのだ。あまりに多くの勇者が死に絶えた故、歴代の勇者を引つ張り出そうという話が持ち上がったな」

情けないと師匠は言うが、老人となつた勇者殿に二度も世界を救えと言うのは酷な話である。

「だが勇者というのは面倒な物でな。それはもう、鬱陶しいくらいに魔王を倒せというお告げが来るのだ」

それに今自分が幸せな分、お告げと称して見せられる悲惨な故郷の状況が辛かったと勇者は告げる。

「私には世界を救える可能性がある。なのに何もしないというのは、やはり勇者として心苦しいのだ」

「だから勇者でありながら、パートをしてたのだな」

「今回の魔王はこやつよりずっと強い。武器を買う金はなかったが、折れた聖剣で戦える相手ではないのだ」

苦渋の選択だという勇者に、師匠がため息をつく。

「ちなみに聞くけど、あんたケリーお婆ちゃんのこととは諦めたの？」

「諦めていないこそその選択だ！ 魔王を打ち倒し、二度目の栄光を手にした暁には彼女に結婚を申し込む予定だ！」

「そもそも交際も上手くいってないのに？」

師匠の言葉に勇者殿が悲鳴を上げたが、残念ながらフォローは出来なかった。

実際仲は良くなっている物の、恋人と称するにはケリーの勇者殿を見る目は冷たい。

「それにあんた、こんなしよばい銃で魔王なんて倒せるわけ？」

「弾も6発ある！」

そう言つて勇者が銃を構えたが、その銃は所々錆びていた。

私を殺したときの物の方がまだマシだろう。あれもずいぶんしよばかったが。

「つていうか、言ってくれたら援助したのに」

「こつ小娘の手助けなど……」

「でも、銃ならうちに腐るほどあるし」

その言葉に勇者が驚き、私もまた驚いた。

もう半年ほどこの家にいるが、銃のたくいを見たことは一度もなかったからだ。

「隠してあるからね」

微笑む師匠を見た途端、手助けはいららないと言った事を、勇者殿は無かったことにした。

必死で泣きついているところ、多分本人が一番、あの銃では勝ち目がないことに気付いていたのだろう。

「うちの最新式とは言い難いけど、いらないからあげるわ」

そう言いながら師匠が私達を案内したのはガレージだ。

その一角には地下室へと続く小さな木の扉があり、それを降りるとホコリまみれの空間に所狭しと銃が置かれていたのだ。

あまりに乱雑に置かれていた故一瞬オモチャにも見えたが、どうやら全て本物らしい。

「拳銃はもちろん、ショットガン、サブマシンガン、狙撃銃にマグナムにロケットランチャー。あと手榴弾、催涙弾にプレスチック爆弾等なんでもあるわよ」

まるで映画で見たスパイの隠し部屋のようにである。

「しつ 師匠は何者なのだ？」

「これは私のじゃなくてパパのよ」

「パパさんは何者なのだ」

「ダイナーをやる前は軍隊にいたって話してたけど、正直よく知らないのよね」

それにここまでではないが、この国では家に銃があることが当たり前らしい。

なので師匠も最近までこの部屋がおかしな物だと気付かなかったそうだ。

「正直これがやばいってわかったのは良いけど、処分も出来なくて困ってたのよ。だからよかったら、全部持って行って」

師匠が言つと、早速勇者が銃を漁りだした。

「でも良いのか？ パパさんの形見なのだろう」

「私が持つていても役に立たないし、形見に縋るほど私はもう弱くはないから」

その笑顔は彼女らしい強さに満ちていて。

でもそれでも彼女が一人になるのは寂しい気がして、私は師匠の手を握った。

「ならこれからは、私が師匠の彼氏兼武器になろう」

「たしかに、ロケットランチャーよりあなたの方が強そう」

「実際強いぞ」

一度は銃に負けたが、それは不意打ちを食らったからだ。

今ならば弾を止めることも跳ね返すことも可能だと笑えば、何故だか師匠はほんの少し不安そうな顔をした。

「じゃあこれ全部よりあなたの方が強いんだ」

「うむ。それにこれは勇者殿には秘密だが、私の力には制限がかかっていたのだ。ある意味私は魔王としては失敗作でな、力があるすぎる故にその能力の殆どを封印されていた」

「ちなみに聞くけど、新しい魔王とあなただとどっちが強いのか？」

「余裕で私だな。私が魔王であった頃、既に次期魔王は製造されていたが私ほどの力が出なかったと聞く」

「……じいさんのレジ打ち、本当に無駄だったかもね」

酷く疲れた顔で師匠はこぼした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7736s/>

---

魔王はハンバーガーが好き

2011年10月26日04時03分発行